

秋田県文化財調査報告書第462集

湯 瀬 館 跡 (第2次)

— 国道 282 号交通安全施設等整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 —

2010・8

秋 田 県 教 育 委 員 会

シンボルマークは、北秋田市白坂(しろざか)遺跡出土の「岩偶」です。
縄文時代晩期初頭、1992年8月発見、高さ7cm、凝灰岩。

秋田県文化財調査報告書第462集

^ゆ湯 ^ぜ瀬 ^{たて}館 ^{あと}跡 (第2次)

— 国道282号交通安全施設等整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 —

2010・8

秋田県教育委員会



1 湯瀬館跡全景（南東→）



2 湯瀬館跡と周辺地形（東→）



1 1979（昭和54）年調査時の「館コ」部分（北東→）



2 埋没沢から出土した土器

序

本県には、これまでに発見された約 4,900 か所の遺跡をはじめとして、先人の遺産である埋蔵文化財が豊富に残されています。これらの埋蔵文化財は、地域の歴史や伝統を理解し、未来を展望した彩り豊かな文化を創造していくうえで、欠くことのできないものであります。

一方、日本海沿岸東北自動車道をはじめとする高速交通体系の構築や国道の整備は、地域が活発に交流・連携する秋田をめざす開発事業の根幹をなすものであります。本教育委員会では、これらの地域開発との調和を図りながら、埋蔵文化財を保存し、活用することに鋭意取り組んでおります。

本報告書は、国道 282 号交通安全施設等整備事業に先立って、平成 21 年度に鹿角市において実施した湯瀬館跡の発掘調査成果をまとめたものであります。調査の結果、中世の館の帯曲輪が造成されるまでの過程が明らかになり、館の範囲に関する重要な資料も得られました。

本書がふるさとの歴史資料として広く活用され、埋蔵文化財保護の一助となることを心から願うものであります。

最後になりましたが、発掘調査及び本報告書の刊行にあたり、御協力いただきました秋田県鹿角地域振興局建設部、鹿角市教育委員会など関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成 22 年 8 月









秋田県教育委員会

教育長 根 岸 均

例 言

- 1 本書は、国道 282 号交通安全施設等整備事業に係る湯瀬館跡発掘調査報告書である。本遺跡は昭和 54 年度に東北縦貫自動車道に係って調査が行われ、昭和 55 年度に報告書が刊行されている。本書では昭和 54 年度の調査を第 1 次調査、今回報告する平成 21 年度の調査を第 2 次調査とする。湯瀬館跡第 2 次発掘調査成果については、既にその一部が『秋田県埋蔵文化財センター年報 28 (平成 21 年度)』および発掘調査報告会資料などによって公表されているが、本書を正式なものとする。
- 2 本書第 2 図は、鹿角地域振興局建設部提供の工事用図面 (1/1,000) を、第 3 図は『秋田県文化財調査報告書第 78 集 東北縦貫自動車道発掘調査報告書 I』8 頁「第 1 図 地形分類図」および国土地理院発行の 1 / 25,000 地形図「湯瀬 (平成 10 年発行)」を元に作成した。第 4 図は国土地理院発行の 1 / 50,000 地形図「花輪 (平成 3 年発行)」「田山 (平成 2 年発行)」をもとに作成した。
- 3 本報告書中の土色表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帳 2005 年版』を使用した。
- 4 放射性炭素 ¹⁴C 年代測定・樹種同定・テフラ分析は、パリノ・サーヴェイに委託した。
- 5 本書は、第 2 章第 2 節・第 3 章第 2 節を巴、第 3 章第 3 節を深沢、それ以外を山田が執筆した。第 5 章は、委託した分析成果報告を掲載した。編集は山田が行った。
- 6 本書を執筆するにあたり、次の方々から御指導・御助言を賜った。記して感謝申し上げます。
〔五十音順・敬称略〕 藤沼邦彦 吉田 歆

凡 例

- 1 本書に掲載した平面図 (遺構実測図) の方位は、世界測地系平面直角座標第 X 系による座標北を示す。原点 (MA 50) において座標北から磁北の偏角は西偏 8° 18' 25" である。本文および巻末の報告書抄録記載の経緯度は世界測地系に基づく。
- 2 遺構名の略号の解説
S I : 竪穴住居跡 S K T : 陥し穴 S K : 土坑 S K I : 竪穴状遺構
S B : 掘立柱建物跡 S A : 柱穴列 S N : 焼土遺構 S D : 溝状遺構
S X : 性格不明遺構 S K P : 柱穴様ピット
- 3 遺構実測図および遺物実測図の縮尺は以下の通りである。
掘立柱建物跡・柱穴列… 1 / 50 焼土遺構… 1 / 20 その他の遺構… 1 / 40
土器・陶磁器・礫石器… 1 / 3 土偶・剥片石器… 1 / 2
- 4 弥生土器の破片は、右から順に内面拓本・外面拓本・断面図の順に並べて掲載した。
- 5 挿図中の記号、スクリーントーンの解説
 被熱変色部分  柱痕  地山  磨り面
 敲打痕  アスファルト  内黒  自然面
- 6 中世に造成された平坦面について、1980 (昭和 55) 年刊行の報告書中では「郭」と表記している。しかし、城郭の石垣・堀・塀による区画を「郭」、山城の削平して設けた平坦面を「曲輪」と表記する近年の傾向に則り、表記を「曲輪」とした。

目次

巻頭図版

序	i
例言・凡例	iii
目次	iv
挿図目次	v
表目次	v
図版目次	vi

第1章 はじめに	1	第3節 中世以降の遺構と遺物	31
第1節 調査に至る経過	1	1 検出遺構と出土遺物	31
第2節 調査要項	2	(1) 帯曲輪	31
第2章 遺跡の環境	3	(2) 竪穴状遺構(S K I)	31
第1節 遺跡の位置と立地	3	(3) 掘立柱建物跡(S B)	33
第2節 歴史的環境	5	(4) 柱穴列(S A)	40
第3章 発掘調査の概要	11	(5) 焼土遺構(S N)	40
第1節 遺跡の概観	11	(6) 溝状遺構(S D)	41
第2節 調査の方法	12	(7) 土坑(S K)	41
第3節 調査の経過	12	(8) 性格不明遺構(S X)	42
第4節 整理作業の方法と経過	13	(9) 柱穴様ピット(S K P)	42
第4章 調査の記録	14	2 遺構外出土遺物	51
第1節 調査範囲の地形と基本層序	14	(1) 陶磁器	51
第2節 古代以前の遺構と遺物	16	(2) 鉄製品	51
1 検出遺構と出土遺物	16	第5章 自然科学的分析	52
(1) 竪穴住居跡(S I)	16	第1節 炭化材の年代測定と樹種同定	52
(2) 陥し穴(S K T)	16	第2節 基本土層のテフラ分析	55
(3) 土坑(S K)	16	第6章 まとめ	58
(4) 柱穴様ピット(S K P)	17	図版	
2 遺構外出土遺物	21	抄録	
(1) 縄文土器	21	奥付	
(2) 土製品	22		
(3) 石器	22		
(4) 弥生土器	23		
(5) 土師器	23		

挿図目次

付図1 湯瀬館跡基本地形図	付図2 遺構配置図 および 地形等高線図
第1図 遺跡の位置 …………… 1	第16図 中世以降の遺構②(S B 463・464) ……………34
第2図 国道282号交通安全施設等整備事業 計画図 …………… 1	第17図 中世以降の遺構③(S B 549・559、S A 558) ……………35
第3図 湯瀬館跡周辺地形分類図 …………… 4	第18図 中世以降の遺構④(S B 549・559、S A 558) ……………36
第4図 湯瀬館跡と周辺の遺跡位置図 …… 7	第19図 中世以降の遺構⑤(S B 550・560、S A 561) ……………37
第5図 古代以前の遺構①(S I 462) ……18	第20図 中世以降の遺構⑥(S B 550・560、S A 561) ……………38
第6図 古代以前の遺構②(S K T 509、S K 2・3・4・5) ……………19	第21図 中世以降の遺構⑦(S A 465・466) ……………43
第7図 古代以前の遺構③(S K 6・17・261・300・ 520、S K P 8) ……………20	第22図 中世以降の遺構⑧(S N 116・169・ 232、S D 163・167・367・369) ……44
第8図 遺構外出土遺物①(古代以前) ……24	第23図 中世以降の遺構⑨(S K 112・131・ 132・200・322・343・426・432・436・440・ 445・451) ……………45
第9図 遺構外出土遺物②(古代以前) ……25	第24図 中世以降の遺構⑩(S X 447) ……46
第10図 遺構外出土遺物③(古代以前) ……26	第25図 遺構外出土遺物(中世以降) ……51
第11図 遺構外出土遺物④(古代以前) ……27	
第12図 遺構外出土遺物⑤(古代以前) ……28	
第13図 遺構外出土遺物⑥(古代以前) ……29	
第14図 遺構外出土遺物⑦(古代以前) ……30	
第15図 中世以降の遺構①(S K I 168・226・ 270) ……………32	

表目次

第1表 湯瀬館跡と周辺の遺跡一覧① …… 8	第11表 S A 465・466 柱穴一覧 ……………43
第2表 湯瀬館跡と周辺の遺跡一覧② …… 9	第12表 中世以降の柱穴様ピット一覧① ……47
第3表 「鹿角四十二館」一覧 ……………10	第13表 中世以降の柱穴様ピット一覧② ……48
第4表 古代以前の土坑一覧 ……………17	第14表 中世以降の柱穴様ピット一覧③ ……49
第5表 古代以前の柱穴様ピット一覧 ……17	第15表 中世以降の柱穴様ピット一覧④ ……50
第6表 遺構外出土石器一覧 ……………23	第16表 放射性炭素年代測定および樹種同定 結果 ……………53
第7表 S B 463・464 柱穴一覧 ……………33	第17表 暦年較正結果 ……………53
第8表 S B 549・559、S A 558 柱穴一覧…36	第18表 テフラ分析結果 ……………56
第9表 S B 550・560、S A 561 柱穴一覧…39	
第10表 中世以降の土坑一覧 ……………42	

図版目次

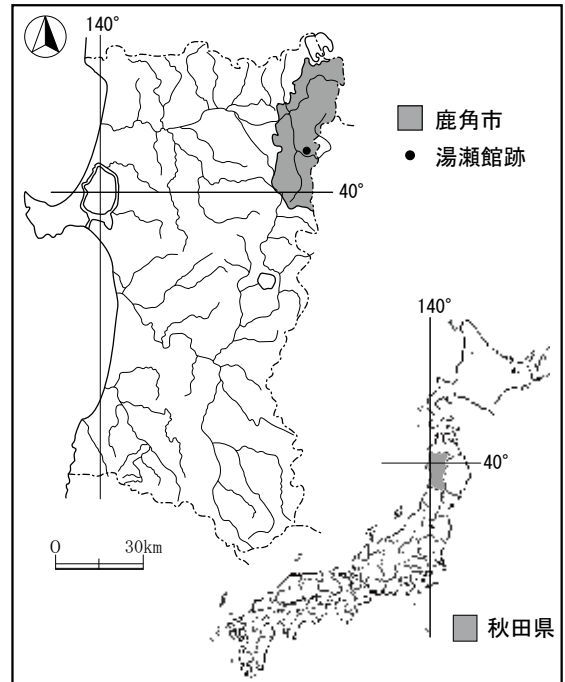
- 巻頭図版 1 - 1 湯瀬館跡全景(南東→)
巻頭図版 1 - 2 湯瀬館跡と周辺地形(東→)
- 図版 1 - 1 1979 年調査区全景(真上)
図版 1 - 2 B 区調査風景(B 区東→)
図版 2 - 1 A 区基本土層①(A 区東→)
図版 2 - 2 A 区基本土層②(A 区西→)
図版 3 - 1 B 区基本土層(B 区西→)
図版 3 - 2 C 区基本土層(C 区北→)
図版 4 - 1 S I 426 完掘①、S A 465・466
完掘① (B 区北西→)
図版 4 - 2 S I 426 完掘②、S A 465・466
完掘②(B 区東→)
図版 5 - 1 S B 463・464 完掘(B 区北西→)
図版 5 - 2 S B 550・560 完掘、S A 561
完掘(C 区北西→)
図版 6 - 1 S K 4 完掘(A 区東→)
図版 6 - 2 K N 42 区土偶出土状況
(A 区東→)
図版 6 - 3 K J 40 区縄文土器出土状況
(A 区北西→)
図版 7 - 1 K H 38 区縄文土器出土状況
(A 区南西→)
図版 7 - 2 S K 112 漆器出土状況
(B 区南→)
図版 7 - 3 S K 451 完掘(B 区南西→)
図版 8 - 1 S K I 168 完掘①、S N 169
完掘(B 区南西→)
- 巻頭図版 2 - 1 1979 (昭和 54)年調査時の
「館コ」部分(北東→)
巻頭図版 2 - 2 埋没沢から出土した土器
- 図版 8 - 2 S K I 168 完掘②(B 区南東→)
図版 8 - 3 S X 447 完掘(B 区北→)
図版 9 - 1 S B 549 完掘、S A 558 完掘
(C 区北西→)
図版 9 - 2 S K I 226 断面(C 区北西→)
図版 9 - 3 S K 261 断面(C 区南→)
図版 10 - 1 S K 520 断面(C 区南東→)
図版 10 - 2 S K 520 完掘(C 区東→)
図版 10 - 3 S K I 226 確認(C 区北西→)
図版 11 - 1 S K I 226 完掘(C 区北西→)
図版 11 - 2 S K I 270 確認(C 区北西→)
図版 11 - 3 S K I 270 完掘(C 区西→)
図版 12 - 1 S K T 509 完掘①(C 区東→)
図版 12 - 2 S K T 509 完掘②(C 区北→)
図版 12 - 3 S N 232 断面(C 区東→)
図版 13 出土遺物①
図版 14 出土遺物②
図版 15 出土遺物③
図版 16 出土遺物④
図版 17 出土遺物⑤
図版 18 自然科学的分析①(炭化物)
図版 19 自然科学的分析②(テフラ)

第1章 はじめに

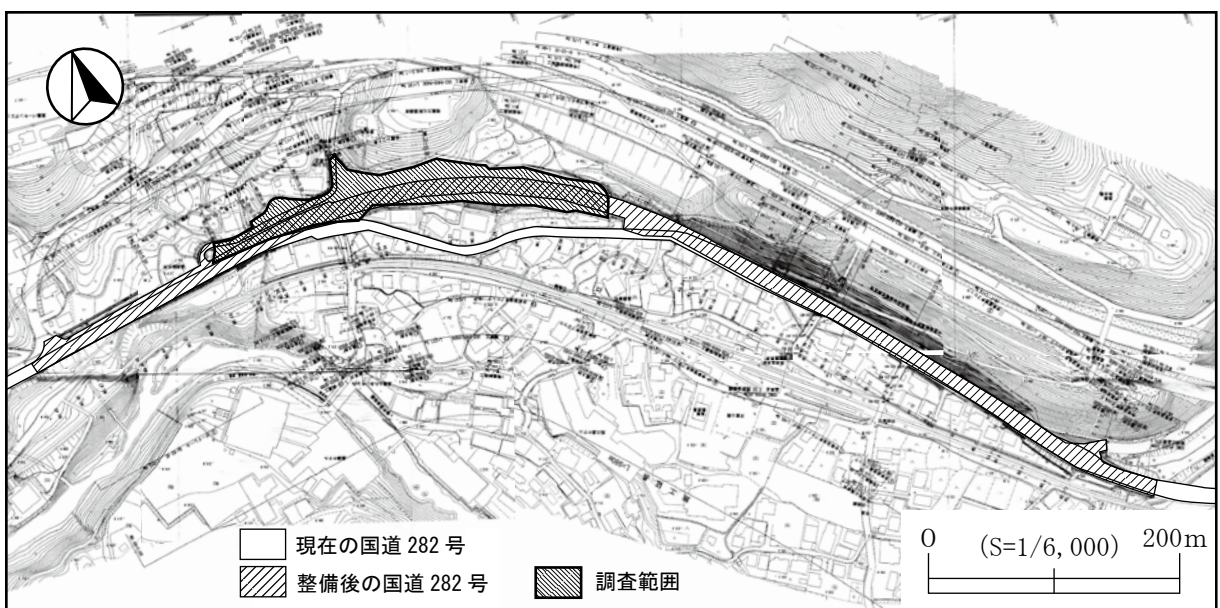
第1節 調査に至る経過

国道282号は、岩手県盛岡市から秋田県鹿角市を經由し青森県平川市へつながる幹線道路であり、並行する東北自動車道の代替迂回路として、また住民の主要な生活道路として重要な役割を果たしている。しかし近年の大型トラックを中心とする交通量増加により、湯瀬地区の幅員の狭さや見通しの悪いカーブの存在などの問題点が指摘されるようになった。そこで秋田県鹿角地域振興局は、走行性と安全性の確保を目的として、国道282号交通安全施設等整備事業を計画した(第1・2図)。

これに伴い、文化財保護法に基づいて、秋田県鹿角地域振興局建設部から秋田県教育委員会教育長に遺跡分布状況について調査の依頼があった。秋田県教育委員会は、平成19年度に計画路線内の遺跡分布調査、平成20年度に確認調査を実施し、その結果、周知の遺跡である湯瀬館跡7,300㎡の発掘調査が必要であることを報告した(第2図)。その後、秋田県鹿角地域振興局建設部と秋田県教育委員会による協議を経て、秋田県埋蔵文化財センターが平成21年度に湯瀬館跡の発掘調査を実施することとなった。



第1図 遺跡の位置



第2図 国道282号交通安全施設等整備事業計画図

第2節 調査要項

遺 跡 名	湯瀬館跡(ゆぜたてあと) (遺跡略号 1 Y Z T)
遺跡所在地	秋田県鹿角市八幡平字湯瀬古館 62 外
調査期間	平成 21 年 6 月 15 日～10 月 30 日
調査面積	7,300㎡
調査主体者	秋田県教育委員会
調査担当者	柴田陽一郎 (秋田県埋蔵文化財センター調査班副主幹) 五十嵐一治 (秋田県埋蔵文化財センター調査班学芸主事) 山田 祐子 (秋田県埋蔵文化財センター調査班文化財主事) 深沢恵里子 (秋田県埋蔵文化財センター調査・研究員) 巴 亜子 (秋田県埋蔵文化財センター調査・研究員)
整理担当者	山田 祐子 (秋田県埋蔵文化財センター調査班文化財主事)
総務担当者	久米 保 (秋田県埋蔵文化財センター総務班主査) 高村智恵子 (秋田県埋蔵文化財センター総務班主任)
調査協力機関	秋田県鹿角地域振興局建設部・鹿角市教育委員会

第2章 遺跡の環境

第1節 遺跡の位置と立地

湯瀬館跡は鹿角市八幡平湯瀬に所在し、JR花輪線湯瀬駅から北西へ450 mに位置している。前述の段丘地形の2段目、鳥越面と呼ばれる丘陵地上に立地しているが、盆地より上流に位置しているために標高は高く、230～250 mある(第3図)。

鹿角市の地形は大きく見て東西の山地、盆地内の段丘地形、沖積低地の三つに区分される。八幡平火山群は新第三紀鮮世(700万～200万年前)末期から第四紀更新世(200万～1万年前)までにかけて活動していたと推定され、山地部分が隆起した。続いて更新世に鹿角盆地の沈降が始まり、完新世までに十和田起源の火山灰の堆積と米代川による開析・侵食とを繰り返して、現在の地形が形成された。火山灰層は降下年代によって、高市軽石質火山灰層(25,850 ± 1,360)、鳥越軽石質火山灰層(12,100 ± 250)、申ヶ野軽石質火山灰層(8,600 ± 250)、大湯軽石質火山礫層(3,680 ± 130)、毛馬内軽石質火山灰層(1,280 ± 90)の四つに分けられる(第3図)。

東側山地は標高800 mを超えるけわしい地形を示し、皮投岳(1,122 m)、五ノ宮嶽(1,115 m)などを中心とした起伏の大きい山塊が連なる。米代川は先行谷を形成して東西に流れている。西側山地は標高400～600 mほどで山容は比較的穏やかである。地質は主として新第三紀系の火山碎屑岩類で安山岩類および安山岩質凝灰岩も分布している。谷内付近や湯瀬南方には粘板岩が露出している。西側の大葛層、大滝層などで砂岩、泥岩などがよく発達している。

盆地内の段丘地形は4段に識別される。花輪盆地内でみれば高位段丘面は標高270～300 mで歌内川等が盆地に注ぐ付近に見られる面である。構成層は主として河成の垂角礫～角礫からなり、風化が著しい。2段目の180～250 m面は南部で厚い礫層をもち、扇状地様の形状を残しているが、北部では火砕流台地としての形態を示している。この面は関上面あるいは鳥越面であり、分布は盆地内全域にわたり、湯瀬や田山付近にまで点々と分布している。本遺跡はこの段丘面に立地している。3段目は標高160～170 mで主として米代川左岸に沿って広く分布し、夜明島川、黒沢川等による扇状地の段丘面と考えられ、松館面と呼ばれている。4段目は標高が150～155 mで米代川右岸沿いに大里付近まで分布する面で、大里面と呼ばれており、構成層は砂礫層と砂礫粘土層である。

引用文献

- 1 藤本幸雄 『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅰ－居熊井遺跡・湯瀬館跡・大地平遺跡・上山田遺跡・堂の上遺跡・上葛岡Ⅲ遺跡－』秋田県文化財調査報告書第78集 1981(昭和56)年
- 2 秋田県 『秋田県総合地質図幅,花輪』 1973(昭和48)年
- 3 内藤博夫 「秋田県米代川流域の第四紀火山碎屑物と段丘地形」 『地理学評論』第39巻第7号 1966(昭和41)年
- 4 内藤博夫 「秋田県花輪盆地および大館盆地の地形発達史」 『地理学評論』第43巻第10号 1970(昭和45)年
- 5 中川久夫ほか 「十和田火山発達史概要」 『東北大地質古生物研究報告』第73号 1972(昭和47)年
- 6 大池昭二 「十和田火山は生きている」 『国土と教育』第26号 1972(昭和47)年
- 7 藤本幸雄 「十和田火山起源の火山灰層の重鉱物組成(その1)大館、花輪盆地における火山灰層」 『昭和54年度大館工業高校研究紀要』 1980(昭和55)年
- 8 鹿角市 『鹿角市史』第一巻 1982(昭和57)年



第3図 湯瀬館跡周辺地形分類図

第2節 歴史的環境

湯瀬館跡が所在する鹿角市では、400あまりの遺跡が確認されている。これらの遺跡のほとんどが縄文から中世にかけての複合遺跡であり、米代川流域に作られた段丘面に多く分布している。1951(昭和26)年から学術調査が進められている大湯環状列石を始め、1980年代に行われた東北自動車道に係る事前調査や、鹿角市が行った航空写真測量による館跡の調査から多くの成果をえている。ここでは湯瀬館跡を中心に八幡平～花輪南部にかけての遺跡を中心にみていくこととする(第4図)。

現在のところ、鹿角市内で旧石器時代の遺跡は見つかっていない(第1・2表)。縄文時代草創～早期の遺跡は、飛鳥平遺跡(82)から爪形文土器が4点、大地平遺跡(91)から赤御堂式および早稲田Ⅳ式に比定される土器が、猿ヶ平Ⅱ遺跡(11)や柏木森遺跡(32)から赤御堂式に比定される土器が、上葛岡Ⅳ遺跡(79)からは表裏に縄文が施文された土器が出土している。前期の遺跡は、案内Ⅲ遺跡(14)・駒林遺跡(72)・北の林Ⅰ遺跡(80)・堂の上遺跡(90)・上山田遺跡(92)から円筒下層d式に比定される土器が、上山田遺跡・案内Ⅵ遺跡(17)・小豆沢館跡(89)から羽状縄文が施文された土器が出土した。清水向遺跡(71)では円筒下層c～d式に比定される土器と大木6式に比定される土器が出土した。中期の遺跡は、天戸森遺跡(4)・猿ヶ平Ⅱ遺跡(11)・下沢田遺跡(27)・駒林遺跡(72)・上葛岡Ⅰ遺跡(76)・上葛岡Ⅲ遺跡(78)・北の林Ⅰ遺跡(80)・堂の上遺跡(90)からは大木式土器が出土し、下沢田遺跡(27)・柏木森遺跡・上葛岡Ⅳ遺跡(79)からは円筒上層式土器が出土している。後期・晩期の遺跡は数多く、特に後期の中では、天戸森遺跡(4)や大湯環状列石が広く知られており、配石遺構群や十腰内Ⅰ式土器が発見されている。晩期は、大洞式土器が出土している遺跡のほか、玉内遺跡では大湯環状列石のものと類似した配石遺構が発見されている。弥生時代の遺跡は、案内Ⅲ遺跡(14)・猿ヶ平Ⅰ遺跡(10)・上葛岡Ⅳ遺跡(79)・案内Ⅴ遺跡(16)・大地平遺跡(91)・中の崎Ⅰ遺跡(30)・下モ平遺跡(40)が知られており、主として小坂Ⅹ式土器が出土しているが、案内Ⅵ遺跡(17)から出土した土器には後北式が含まれている。

古代の遺跡は、鹿角盆地中央部より北側を中心に墳墓や集落跡などが確認されている。また、「かづの」が史料に名を現したのは古く、『日本三代実録』の元慶2(878)年7月10日条で「又秋田城下賊地者上津野火内…(傍点筆者)」と記載されているのが初見である。さらに同8月4日条には「且春風好蔭等取陸奥路上津野村(傍点筆者)」と記載されている。元慶2年3月、秋田県北部の夷俘が国司の苛政に対して反乱を起こし、秋田城を焼き払ったいわゆる元慶の乱が勃発する。反乱側に加わった12か村の内の1つに上津野=鹿角があり、鎮守將軍小野春風が陸奥路を経て上津野村に入り、ここで反乱軍を教諭することで乱を収束したとされている。この頃から鹿角は、陸奥・出羽両国を連絡する交通路として重要視されるようになったと言われている。

中世の遺跡としては数多くの館跡が知られており、近世に書かれた『鹿角由来記』では「鹿角四十二館」と呼ばれている(四十八との説もある)。第4図の図幅にある館跡28か所のうち19か所が「鹿角四十二館」に数えられており、過去に発掘調査が行われたことがあるのは、湯瀬館跡(1)・高瀬館跡(2)・黒土館跡(5)・花輪古館跡(6)・小豆沢館跡(89)・石鳥谷館跡(52)・三ヶ田館跡(68)・長牛館跡(99)の8か所である(第3表)。1979(昭和54)年に行われた湯瀬館跡(1)の調査では、北宋で鑄造された元祐通宝、明で鑄造された永楽通宝の他、13～14世紀の青磁小片、16世紀前半の美濃灰釉の皿小片

が出土している。高瀬館跡(2)では北宋で鑄造された景德元宝・皇宋通宝・元豊通宝・元符通宝・宣和通宝・熙寧通宝、南宋で鑄造された大宋元宝・景定元宝の他、13～16世紀の青磁片が出土している。

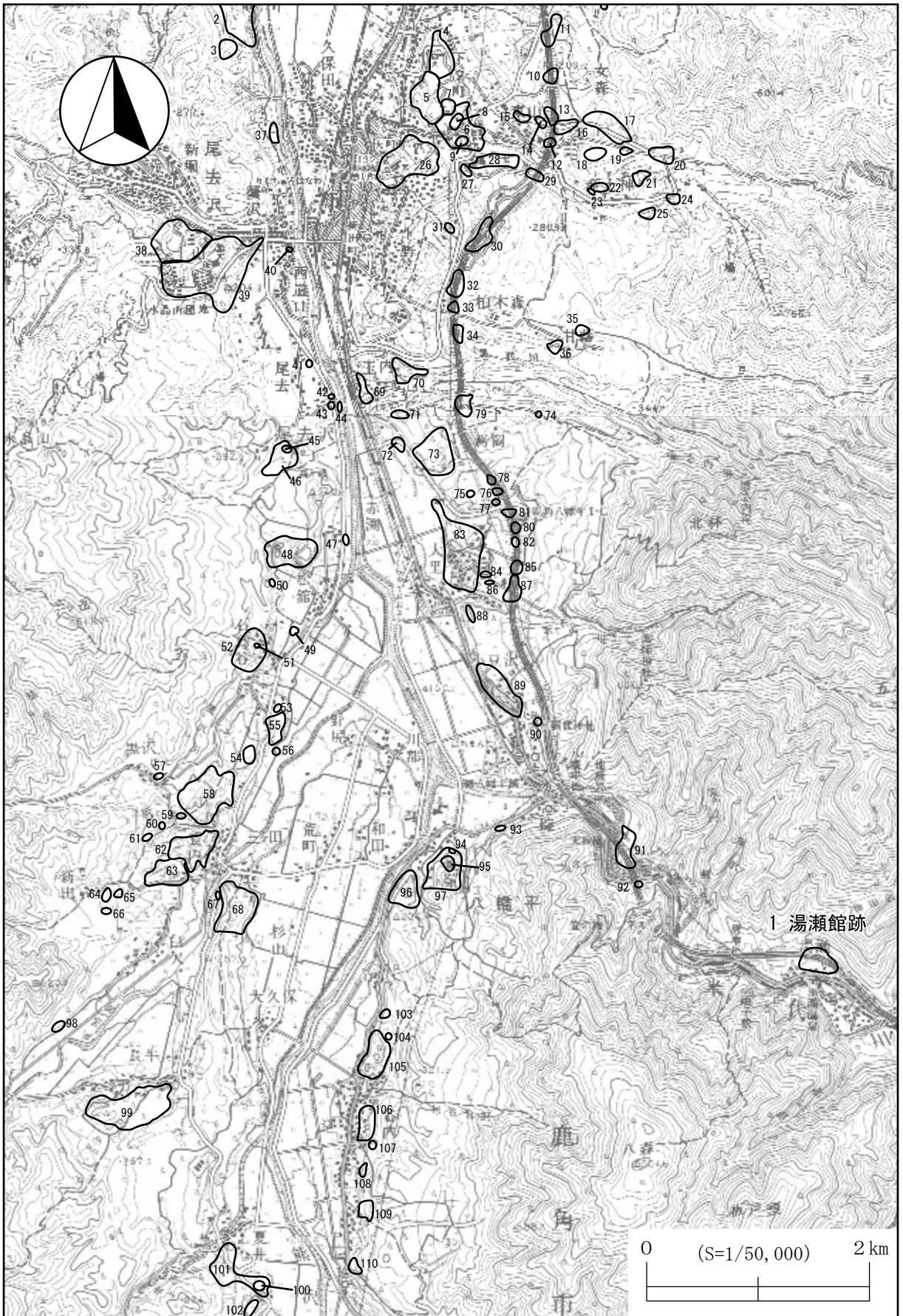
これらの館は、1189(文治5)年の奥州合戦の後に形成された。中でも「鹿角四十二館」は当時村地頭であり「鹿角四氏」と呼ばれた成田・安保・奈良・秋本らの所有だったと伝えられている(第3表)。湯瀬館についても、『鹿角由来記』に「一、湯瀬村 湯瀬中務領也 本名成田／後に湯瀬刑部領す本名安倍也、一戸より来り館有。」と記されている。成田氏の一族である湯瀬中務については資・史料に乏しいため、成田氏一族内における地位、湯瀬入部および湯瀬を離れた時期・経過、子孫については不詳である。湯瀬刑部については、小豆沢大日靈貴神社(通称大日堂)の別当安倍家に伝わる『寺社由緒世代書上之事』の中に「五代 三位坊秀安／右者嫡子刑部～(略)～永禄十一年同郡長牛陣之時、御先達被仰付兄弟被出忠之働仕候故、～(略)～且御鎚拝領仕候、弟宮内右之依忠同郡湯瀬村領地ニ被下御奉公社候由。」と記されており、湯瀬刑部とは5代安倍秀安であろうということがわかる。代々奥郡一戸郷に住していた安倍氏は、文明年中(1469～1487年、一説には1480年)に鹿角に来て、当時空席となっていた大日堂別当となり、三位儀安と称して現在に至ったと伝えられている。ただし同文献および『大日堂故実傳記』に、実際に湯瀬館の館主となったのは刑部の弟の宮内であるという記述がある。「永禄^(ママ)十一年同郡長牛陣之時」とあるのは、永禄12(1569)年の南部氏が鹿角の支配権を回復した合戦を示している。永禄年間(1558～1570)には、南朝側の北朝側の三戸南部氏と桧山安東氏の間で数回にわたる鹿角争奪戦が行われており、鹿角が津軽と南部を結ぶ重要な交通路であったことを示すものであろう。

1590(天正18)年に豊臣政権による奥州仕置が行われ、東北の大名とその所領が整理されつつある背景の中で、1591(天正19)年に九戸政実の乱が起こった。乱後の処置として、湯瀬館をはじめ大里館・谷内館・長嶺館・小豆沢館・黒土館が破却されたという記録が、『祐清私記一内山助右衛門奥北の館破却之事一』にある。

江戸時代には湯瀬に駅伝所が置かれていたという記録が残っており、館が失われた跡も湯瀬は盛岡と鹿角を結ぶ街道の要衝であったと考えられる。

引用文献

- 1 藤本幸雄 『東北縦貫自動車道発掘調査報告書I - 居熊井遺跡・湯瀬館跡・大地平遺跡・上山田遺跡・堂の上遺跡・上葛岡Ⅲ遺跡 -』秋田県文化財調査報告書第78集 1981(昭和56)年
- 2 秋田県 『秋田県総合地質図幅,花輪』 1973(昭和48)年
- 3 内藤博夫 「秋田県米代川流域の第四紀火山碎屑物と段丘地形」 『地理学評論』第39巻第7号 1966(昭和41)年
- 4 内藤博夫 「秋田県花輪盆地および大館盆地の地形発達史」 『地理学評論』第43巻第10号 1970(昭和45)年
- 5 中川久夫ほか 「十和田火山発達史概要」 『東北大地質古生物研究報告』第73号 1972(昭和47)年
- 6 大池昭二 「十和田火山は生きている」 『国土と教育』第26号 1972(昭和47)年
- 7 藤本幸雄 「十和田火山起源の火山灰層の重鉱物組成(その1)大館、花輪盆地における火山灰層」 『昭和54年度大館工業高校研究紀要』 1980(昭和55)年
- 8 鹿角市 『鹿角市史』第一巻 1982(昭和57)年
- 9 伊藤祐清 「祐清私記一内山助右衛門奥北の館破却之事一」 『南部叢書』第3冊 1970(昭和45)年



第4図 湯瀬館跡と周辺の遺跡位置図

第1表 湯瀬館跡と周辺の遺跡一覧①

番号	遺跡地図 番号	遺跡名	種別	時代	遺構・遺物	文献
1	9-394	湯瀬館	館跡	縄文・弥生 古代・中世	掘立柱建物跡・礎石配列建物跡・堀跡・竪穴状遺構・柱穴列、縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・陶磁器(青磁・美濃灰釉皿) ・鉄製品・銅銭	2-4
2	9-219	高瀬館	館跡	中世	竪穴状遺構・掘立柱建物跡・土坑、青磁・鉄製品・古銭(北宋銭)・炭化米	16-17-19
3	9-220	堪忍沢	集落跡	平安	竪穴住居跡・製鉄炉・土坑、土師器・鉄製品・吹子羽口・鉄滓	16-17-19
4	9-305	天戸森	集落跡	縄文・古代	竪穴住居跡・土坑・配石遺構・埋設土器・屋外炉・溝、縄文土器(中～後期)・土師器・須恵器・土製品・石製品	1-20-23
5	9-306	黒土館	館跡	中世	空堀、縄文土器・陶磁器・鉄製品・古銭・石器	11-15-21
6	9-307	花輪古館	館跡	縄文・中世	竪穴状遺構・掘立柱建物跡・土坑・空堀、縄文土器・須恵器・陶磁器・古銭	11-15-24
7	9-308	陣場	遺物包含地	縄文	縄文土器	1
8	9-309	御休堂	集落跡	縄文・平安	竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑、縄文土器・土師器・石器・石製品	1-25
9	9-310	白山堂	遺物包含地	縄文	縄文土器(中期)・石器	1
10	9-311	猿ヶ平Ⅰ	集落跡	縄文・弥生	竪穴住居跡・土坑、縄文土器(後～晩期)・弥生土器・石器	2-7
11	9-312	猿ヶ平Ⅱ	集落跡	縄文・古代	竪穴住居跡・土坑、縄文土器(早～晩期)・石器・石製品	2-8
12	9-313	案内Ⅰ	集落跡	縄文・平安	竪穴住居跡・土坑、縄文土器(後期)・土師器・石器	2-10
13	9-314	案内Ⅱ	集落跡	縄文	竪穴住居跡・土坑・配石遺構、縄文土器(前・後～晩期)・石器	7
14	9-315	案内Ⅲ	集落跡	縄文・弥生・ 平安	竪穴住居跡・土坑、縄文土器(後期)・弥生土器・土師器・和鏡	8-22
15	9-316	案内Ⅳ	集落跡	縄文・平安	竪穴住居跡・土坑、縄文土器(後～晩期)・土師器・石器	22
16	9-317	案内Ⅴ	集落跡	縄文・弥生・ 平安	竪穴住居跡・土坑、縄文土器(前～晩期)・弥生土器・土師器・石器・石製品	1-22
17	9-318	案内Ⅵ	集落跡	縄文	竪穴住居跡・土坑・掘立柱建物跡、縄文土器(前～晩期)・弥生土器(一部後北C2式含む)	22
18	9-319	東山Ⅰ	遺物包含地	縄文	縄文土器	1
19	9-320	東山Ⅱ	遺物包含地	縄文	縄文土器	1
20	9-321	赤坂A	遺物包含地	縄文	縄文土器(晩期)	1-26-27
21	9-322	赤坂B	遺物包含地	縄文	縄文土器	1-28
22	9-323	産土神A	遺物包含地	縄文	縄文土器(晩期)	1
23	9-324	産土神B	遺物包含地	縄文	縄文土器	1
24	9-325	産土神C	遺物包含地	縄文	縄文土器(中期)	1
25	9-326	産土神D	遺物包含地	縄文	縄文土器(中期)	1
26	9-327	花輪館	館跡	中世	空堀・土塁・竪穴状遺構・土坑、陶磁器・古銭・鉄製品	29-30
27	9-328	下沢田	集落跡	縄文・平安	竪穴住居跡・土坑・堀跡、縄文土器(前～後期)・土師器・鉄製品・吹子羽口	29
28	9-329	孫右衛門館	館跡	中世	空堀	11
29	9-330	孫右衛門館	集落跡	縄文・平安	竪穴住居跡・屋外炉、縄文土器(後期)・土師器・石器	2-10
30	9-331	中の崎Ⅰ	集落跡	縄文・弥生・ 平安・中世	竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑・合口甕棺墓、縄文土器(前～晩期)・弥生土器・土師器・石器・鉄製品・木製品(櫛)	2-9
31	9-332	中の崎Ⅱ	遺物包含地	縄文・古代	縄文土器・土師器	2-9
32	9-333	柏木森	集落跡	縄文・古代	掘立柱建物跡・土坑・溝・Tピット、縄文土器(前～晩期)・石器・土師器	2-9
33	9-334	明堂長根	集落跡	縄文	掘立柱建物跡・土坑・溝、縄文土器(晩期)・石器	2-9
34	9-335	一本杉	集落跡	縄文・平安・ 中世	竪穴住居跡・掘立柱建物跡・竪穴状遺構・土坑、縄文土器(早～後期)・土師器・須恵器・陶磁器・石器	2-8-31
35	9-336	甘露Ⅰ	遺物包含地	縄文	縄文土器	1
36	9-337	甘露Ⅱ	遺物包含地	縄文	縄文土器(後期)	1
37	9-338	かいぬま館	館跡	中世	空堀	11
38	9-339	茶臼館	館跡	中世	空堀	14
39	9-340	上山館	館跡	中世	空堀	11-14
40	9-341	下モ平	遺物包含地	弥生	弥生土器	
41	9-342	六角平	遺物包含地	縄文	縄文土器(後期)・磨製石斧・石槍	
42	9-343	三光塚	古墳	古代	玉類	32-33-34
43	9-344	東在家	集落跡	縄文	竪穴住居跡・土坑・集石遺構、縄文土器(晩期)・土製品(土偶)・石器(石槍・石斧)・石製品(岩版)	1
44	9-345	尾去Ⅰ	遺物包含地	縄文	縄文土器(晩期)	
45	9-346	尾去Ⅱ	遺物包含地	縄文	縄文土器	1
46	9-347	尾去館	館跡	中世	空堀	1-11-14
47	9-348	岩淵	遺物包含地	縄文	縄文土器・石器	1
48	9-349	松館	館跡	中世	空堀	11-13
49	9-350	後口田Ⅰ	遺物包含地	古代	土師器	1
50	9-351	後口田Ⅱ	遺物包含地	縄文	縄文土器・石器	
51	9-352	石鳥谷	遺物包含地	縄文	縄文土器(中期)	
52	9-353	石鳥谷館	館跡	中世	空堀・かまど状遺構	11-13-35
53	9-354	下モ和志賀Ⅰ	遺物包含地	縄文	縄文土器	1
54	9-355	下モ和志賀Ⅱ	集落跡	縄文	竪穴住居跡・土坑、縄文土器(中～後期)	
55	9-356	伊勢堂館	館跡	中世	空堀	1
56	9-357	二ツ森	遺物包含地	縄文	縄文土器(晩期)	1
57	9-358	黒沢	遺物包含地	縄文	土坑・縄文土器(後期)	
58	9-359	上ミ和志賀館	館跡	中世	空堀	11-14
59	9-360	上ミ和志賀Ⅰ	遺物包含地	古代	土師器	
60	9-361	上ミ和志賀Ⅱ	遺物包含地	古代	土師器	
61	9-362	上ミ和志賀Ⅲ	遺物包含地	古代	土師器	
62	9-363	長内館	館跡	中世	空堀	11-14
63	9-364	長内古館	館跡	中世	空堀	14
64	9-365	小館Ⅰ	遺物包含地	縄文・古代	縄文土器・土師器	
65	9-366	小館Ⅱ	遺物包含地	縄文・古代	縄文土器・土師器	
66	9-367	小館Ⅲ	遺物包含地	縄文・古代	縄文土器・土師器	
67	9-368	三ヶ田	遺物包含地	縄文	縄文土器(後期)	36
68	9-369	三ヶ田館	館跡	縄文・中世	空堀・土塁・切岸、縄文土器・陶器・磁器・銭貨	11-14-37
69	9-370	玉内	配石墓群・ 集落跡	縄文・平安・ 中世	竪穴住居跡・配石墓・土坑墓・土器棺墓・溝状遺構、縄文土器(後～晩期)・土師器・土製品・石器	34・38
70	9-371	玉内館	館跡	中世	空堀	12
71	9-372	清水向	集落跡	縄文・中世	竪穴住居跡、縄文土器(前期:円筒下層c～d式、大木6式・中期:円筒上層a式)・石器	32-34
72	9-373	駒林	集落跡	縄文・平安	竪穴住居跡・土坑・掘立柱建物跡、縄文土器(前～晩期)・土師器・須恵器・石器	2-7
73	9-374	下館	館跡	中世	空堀・土塁	15

第2表 湯瀬館跡と周辺の遺跡一覧②

番号	遺跡地図番号	遺跡名	種別	時代	遺構・遺物	文献
74	9-375	下葛岡	遺物包含地	縄文・古代	縄文土器・土師器・須恵器	39
75	9-376	中ノ沢	遺物包含地	縄文・古代	縄文土器(晩期)・土師器	1
76	9-377	上葛岡Ⅰ	集落跡	縄文	竪穴住居跡、縄文土器(中～後期)・石器	6
77	9-378	上葛岡Ⅱ	集落跡	縄文	竪穴住居跡、縄文土器(中～後期)・石器	6
78	9-379	上葛岡Ⅲ	遺物包含地	縄文	縄文土器(中～後期)	2-3
79	9-380	上葛岡Ⅳ	集落跡	縄文・弥生・平安	竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑、縄文土器(早～前期・後～晩期)・弥生土器・土師器・須恵器	1-7
80	9-381	北の林Ⅰ	集落跡	縄文・平安	竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑、縄文土器(前～晩期)・土師器・須恵器・石器・鉄製品	2-5
81	9-382	北の林Ⅱ	集落跡	縄文・平安	竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑、縄文土器(中～後期)・土師器・須恵器・石器・鉄製品	6
82	9-383	飛鳥平	集落跡	縄文・平安	竪穴住居跡・土坑、縄文土器(早～晩期)・土師器・石器	5
83	9-384	大里館	館跡	中世	空堀	13
84	9-385	大里	遺物包含地	縄文	縄文土器	1
85	9-386	鳥居平Ⅰ	集落跡	縄文・平安	竪穴住居跡・土坑、縄文土器(後期)・須恵器	2-5
86	9-387	鳥居平Ⅱ	遺物包含地	縄文・古代	縄文土器・土師器	1
87	9-388	歌内	集落跡・遺物包含地	縄文・平安	竪穴住居跡・土坑・掘立柱建物跡、縄文土器(後～晩期)・土師器・須恵器・石器・鉄製品・石製品・銅銭	2-4
88	9-389	下鷺の巣	遺物包含地	縄文・古代	縄文土器(前～中期)・土師器・石器	1
89	9-390	小豆沢館	館跡	縄文・平安・中世	竪穴住居跡・土坑、縄文土器(前～中期)・土師器・石器・鉄製品	11・13-6
90	9-391	壺の上	遺物包含地	縄文	縄文土器(前～晩期)・石器	2-3
91	9-392	大地平	遺物包含地	縄文・弥生	縄文土器(早～前期・後期)・弥生土器	36・2-3
92	9-393	上山田	遺物包含地	縄文	縄文土器(前期)	36-3
93	9-396	長畑	遺物包含地	古代	土師器	1
94	9-397	新城A	遺物包含地	縄文	縄文土器(前期)	1
95	9-398	新城B	遺物包含地	縄文	縄文土器(前～中期)	36-1
96	9-399	長嶺館A	館跡	中世	空堀	11-14
97	9-400	長嶺館B	館跡	中世	空堀	11-14
98	9-401	白懸館	館跡	中世	空堀	11
99	9-402	長牛館	館跡	中世	空堀、土師器・古銭	11・12-40
100	9-403	大館	遺物包含地	縄文	縄文土器(前期)	
101	9-404	夏井館	館跡	中世	空堀	11-14
102	9-405	上ミ沢	遺物包含地	縄文・古代	縄文土器(中期)・土師器・石器	
103	9-407	八舛寺	遺物包含地	縄文・古代	縄文土器(晩期)・土師器	
104	9-408	谷内下毛平	遺物包含地	縄文・古代	縄文土器・土師器	
105	9-409	谷内館A	館跡	中世	空堀・石垣	11-14
106	9-410	谷内館B	館跡	中世	空堀	11-14
107	9-411	天照皇御祖神社・境内磨崖仏・および板碑	祭祀遺跡		磨崖仏・板碑	県指定史跡・34
108	9-412	沼田	遺物包含地	古代	土師器	
109	9-413	谷内高館	館跡	中世	郭	14
110	9-414	小宮	遺物包含地	縄文・古代	縄文土器・土師器	

第1・2表文献

- 秋田県教育委員会 『東北縦貫自動車道遺跡分布調査報告書(花輪町・尾去沢町・八幡平地区)』秋田県文化財調査報告書第24集 1972(昭和47)年
- 秋田県教育委員会 『東北縦貫自動車道遺跡分布調査報告書 八幡平～十和田錦木』秋田県文化財調査報告書第56集 1978(昭和53)年
- 秋田県教育委員会 『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅰ－居熊井遺跡・湯瀬館遺跡・大地平遺跡・上山田遺跡・道の上遺跡・上葛岡Ⅲ遺跡－』秋田県文化財調査報告書第78集 1981(昭和56)年
- 秋田県教育委員会 『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅱ－歌内遺跡－』秋田県文化財調査報告書第88集 1982(昭和57)年
- 秋田県教育委員会 『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅲ－鳥居平遺跡・飛鳥平遺跡・北の林Ⅰ遺跡－』秋田県文化財調査報告書第89集 1982(昭和57)年
- 秋田県教育委員会 『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅳ－北の林Ⅱ遺跡・上葛岡Ⅰ遺跡・上葛岡Ⅱ遺跡・小豆沢館遺跡－』秋田県文化財調査報告書第90集 1982(昭和57)年
- 秋田県教育委員会 『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅴ－上葛岡Ⅳ遺跡・駒林遺跡・案内Ⅱ遺跡・猿ヶ平遺跡－』秋田県文化財調査報告書第91集 1982(昭和57)年
- 秋田県教育委員会 『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅵ－猿ヶ平Ⅱ遺跡・室田遺跡・一本杉遺跡・案内Ⅲ遺跡－』秋田県文化財調査報告書第99集 1983(昭和58)年
- 秋田県教育委員会 『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅶ－柏木森遺跡・中の崎遺跡・明堂長根遺跡－』秋田県文化財調査報告書第106集 1984(昭和59)年
- 秋田県教育委員会 『東北縦貫自動車道発掘調査報告書ⅩⅠ－孫右エ門館遺跡・案内Ⅰ遺跡・妻の神Ⅱ遺跡・下乳牛遺跡・西町Ⅰ遺跡・西町Ⅱ遺跡』秋田県文化財調査報告書第119集 1984(昭和59)年
- 秋田県教育委員会 『秋田県の中世城館』秋田県文化財調査報告書第86集 1981(昭和56)年
- 鹿角市教育委員会 『鹿角の館－館跡航空写真測量調査報告書(1)－小枝指館・玉内館・長牛館(城)』鹿角市文化財調査資料20 1982(昭和57)年
- 鹿角市教育委員会 『鹿角の館－館跡航空写真測量調査報告書(2)－大里館・小豆沢館・石鳥谷館』鹿角市文化財調査資料23 1983(昭和58)年
- 鹿角市教育委員会 『鹿角の館－館跡航空写真測量調査報告書(4)－長嶺館・長内館・谷内館・尾去館・夏井館・上山館・三ヶ田館・茶白館』鹿角市文化財調査資料28 1985(昭和60)年
- 鹿角市教育委員会 『鹿角の館－館跡航空写真測量調査報告書(5)－小平館・万谷野館・高市館・地羅野館・柴内館・黒土館・花輪古館』鹿角市文化財調査資料30 1986(昭和61)年
- 秋田県教育委員会 『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第126集 1985(昭和60)年
- 秋田県教育委員会 『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第140集 1986(昭和61)年
- 秋田県教育委員会 『西山地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ－高瀬館跡－』秋田県文化財調査報告書第153集 1987(昭和62)年
- 秋田県教育委員会 『西山地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ－堪忍沢遺跡－』秋田県文化財調査報告書第152集 1987(昭和62)年
- 鹿角市教育委員会 『天戸森遺跡発掘調査報告書』鹿角市文化財調査資料26 1984(昭和59)年
- 鹿角市教育委員会 『黒土館跡発掘調査報告書(1)～(4)』鹿角市文化財調査資料57・59・62・64 1996(平成8)～1999(平成11)年
- 秋田県教育委員会 『県道田山・花輪線関係遺跡発掘調査報告書－案内Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ遺跡－』秋田県文化財調査報告書第115集 1984(昭和59)年
- 秋田県教育委員会 『県道田山・花輪線関係遺跡発掘調査報告書Ⅱ－天戸森遺跡－』秋田県文化財調査報告書第248集 1994(平成6)年
- 鹿角市教育委員会 『花輪古館跡発掘調査報告書』鹿角市文化財調査資料51 1994(平成6)年
- 鹿角市教育委員会 『御休堂遺跡発掘調査報告書』鹿角市文化財調査資料19 1981(昭和56)年

第3表 「鹿角四十二館」一覽

鹿角由来記		鹿角由来集		所在地	現遺跡名	第4図番号
村名	館主	村名	館主			
田山村	田山左京進	田山	田山左京進	岩手県八幡平市宇藍ノ野	田山館	—
左比内村	左比内采女	佐比内(館市)	佐比内采女	岩手県八幡平市宇館市	館市館	—
湯瀬村	湯瀬中務	湯瀬	湯瀬中務	鹿角市八幡平宇湯瀬古館	湯瀬館	1
長峯村	長峯下聰	長嶺	長嶺下総	鹿角市八幡平宇東館・西館・牛長根・蚕の前・新城	長嶺A・長嶺B	(96・97)
三ヶ田村	三ヶ田左近	三ヶ田	三ヶ田左近	鹿角市八幡平宇浦田・長根・上塚	三ヶ田館	68
谷内村	谷内三郎	谷内	谷内三郎	鹿角市八幡平宇谷内・下モ平	谷内館	(105・106)
長牛村	秋元彈正左エ門	長牛	秋本彈正左エ門	鹿角市八幡平宇長牛・カラム田・指島	長牛館	99
夏井村	夏井但馬	夏井	夏井但馬	鹿角市八幡平宇夏井・寺山・上ミ沢	夏井館	101
長内村	長内刑部	長内	長内刑部	鹿角市八幡平宇糸坪平・長内・船ヶ沢	長内館	62
白懸村	白欠勘解	白懸	白懸勘解由	鹿角市八幡平宇白砂館	白懸館	98
石鳥屋村	石鳥屋五郎	石鳥屋	石鳥谷五郎	鹿角市八幡平宇石鳥谷館・竹鼻	石鳥谷館	52
松館村	松館越前	松館	松館越前	鹿角市八幡平宇天神館・岩淵	松館	48
尾佐利村	尾佐利越中	尾去	尾去越中	鹿角市尾去沢宇尾去・野統	尾去館	46
小豆澤村	小豆澤駿河	小豆澤	小豆澤駿河	鹿角市八幡平宇下鷲の巣・小豆沢	小豆沢館	89
大里村	大里上聰	大里	大里上総守	鹿角市八幡平宇堀合・大里	大里館	83
玉内村	玉内大炊之助	玉内	玉内大炊之助	鹿角市八幡平宇玉内・森鼻	玉内館	70
花輪村	花輪次郎	花輪	花輪治郎	鹿角市花輪宇古館・陣場・福土川	花輪古館	6
黒土村	黒土丹後	黒土	黒土丹後	鹿角市花輪宇陣場・下夕町	黒土館	5
高瀬村	高瀬土佐	高瀬	高瀬土佐	鹿角市花輪宇築忍沢・浦館・小森沢	高瀬館	2
高屋村	高屋筑前	高屋	高屋筑前	鹿角市花輪宇茶臼館・女平・前平	花輪茶臼館	—
柴内村	柴内弥治郎	柴内	柴内弥治郎	鹿角市花輪宇西町・乳牛平・中屋布	柴内館	—
血牛村	血牛六郎	乳牛	乳牛村六郎	鹿角市花輪宇乳牛平・妻ノ神	乳牛館	—
中柴内村	中柴内八郎	中柴内	中柴内八右衛門	鹿角市花輪宇柴内地区	(所在地不明)	—
折加内村	折加内甚右エ門	折加内	折加内甚右エ門	鹿角市花輪宇柴内地区	(所在地不明)	—
高市村	高市玄番			鹿角市花輪宇高沢	高市館	—
新斗米村	新斗米左近	新斗米	新斗米左近	鹿角市花輪宇大坊沢・新斗米	新斗米館	—
大湯村	大湯右エ門家来	大湯	大湯佐左衛門督	鹿角市十和田大湯宇古館・下ノ湯	鹿倉館	—
小枝指村	小枝差左馬	小枝指	小枝指左馬助	鹿角市花輪宇平元古館・小枝指・八幡館	小枝指館	—
小平村	小平彦次郎	小平	小平彦次郎	鹿角市花輪宇下モ館・元村・小平	小平館	—
神田村	神田十郎	神田	神田十郎	鹿角市十和田末広宇神田沢・土筆森	碁石館	—
毛馬内町	毛馬内備中	毛馬内	毛馬内備中	鹿角市十和田毛馬内宇前館・古館	当麻館	—
瀬田石村	瀬田石太郎左エ門	瀬田石	瀬田石太良左衛門	鹿角市十和田瀬田石宇小館宇小館根・外ノ沢	瀬田石館	—
大地村	大地甚之進	大地	大地甚之尉	鹿角郡小坂町大地宇館	大地館	—
小坂村	小坂筑後	小坂	小坂筑後	鹿角郡小坂町小坂館山宇杉沢	小坂館(杉沢館)	—
濁川村	濁川但馬			鹿角郡小坂町濁川宇向田表	濁川館	—
荒川村	荒川備中	荒河	荒川備中	鹿角郡小坂町荒谷宇松森	荒川館	—
八幡館村	秋元兵部少	八幡館	秋元兵部少	鹿角郡小坂町砂子沢	八幡館	—
高清水村	高清水豊後			鹿角市十和田山根宇館ヶ沢	高清水館	—
関上村	関上安房	関神	関神安房	鹿角市十和田大湯宇関上・村下	関上館	—
芦名澤村	芦名澤太郎兵衛	芦名沢	芦名澤太郎兵衛	鹿角市十和田山根宇向田・砂沢	芦名沢館	—
草木村	奈良越後	草木	奈良越後	鹿角市十和田草木宇九館ノ下夕	九館	—
高梨子館村	高梨子土佐	高梨	高梨土佐	鹿角市十和田末広宇高梨館・鳥根	高梨館	—

26 鹿角市教育委員会 『赤坂A遺跡－第52回国体冬季スキー競技会施設整備事業に伴う発掘調査報告書』鹿角市文化財調査資料50 1994(平成6)年

27 鹿角市教育委員会 『赤坂A遺跡(2)』鹿角市文化財調査資料53 1995(平成7)年

28 鹿角市教育委員会 『赤坂B遺跡総合運動公園関連遺跡発掘調査報告書』鹿角市文化財調査資料48 1993(平成5)年

29 鹿角市教育委員会 『花輪館跡・下沢田遺跡発掘調査報告書』鹿角市文化財調査資料27 1984(昭和59)年

30 鹿角市教育委員会 『花輪館跡試掘調査報告書(2)』鹿角市文化財調査資料34 1988(昭和63)年

31 鹿角市教育委員会 『一本杉遺跡－株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモ東北携帯電話無線中継基地局建設に伴う発掘調査－』鹿角市文化財調査資料90 2007(平成19)年

32 奈良修介・豊島昂 『秋田県の考古学』吉川弘文館 1967(昭和42)年

33 秋田県 『秋田県史 考古編』1977(昭和52)年

34 鹿角市 『鹿角市史』第一巻 1982(昭和57)年

35 秋田県教育委員会 『石鳥谷館跡－県道比内大葛鹿角線建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－』秋田県文化財調査報告書第279集 1998(平成10)年

36 八幡平村 『八幡平村遺跡発掘調査報告』1962(昭和37)年

37 秋田県教育委員会 『三ヶ田館跡－地方道路交付金事業根瀬尾去沢線に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－』秋田県文化財調査報告書第417集 2007(平成19)年

38 秋田県教育委員会 『玉内遺跡発掘調査報告書－一般国道282号改良工事に係る埋蔵文化財発掘調査－』秋田県文化財調査報告書第171集 1988(昭和63)年

39 秋田県教育委員会 『圃場整備地域内(鹿角北東地区)遺跡分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第54集 1979(昭和55)年

40 鹿角市教育委員会 『長牛城跡－長牛城跡発掘調査報告書－』鹿角市文化財調査資料17 1982(昭和57)年

第3章 発掘調査の概要

第1節 遺跡の概観

湯瀬館跡は、湯瀬溪谷内にあるJR花輪線湯瀬温泉駅から北西へ約100mに位置する(第4図)。米代川の右岸、五ノ宮嶽の北側山麓部の東西に細長い丘陵上から南側斜面にかけての範囲に立地しており、標高は230～253mである。現在の国道282号線沿いにあり、盛岡から奥羽山脈を横断して鹿角へ向かう入り口にあたる。ただし館が機能していた当時主に使用されていた道は現在と違い、湯瀬よりやや東側で居熊井を通して米代川左岸へ渡り、板戸ノ沢から八森を抜けて谷内・長嶺方面へ至る経路だったと言われている。湯瀬館はこの古道から若干離れているが、湯瀬溪谷の中で湯瀬から居熊井にかけては比較的開けた地形となっているため見通しが良い。この立地から、湯瀬館は古道の様子をうかがい、古道に向かって館の威容を示す役割を担っていたのではないかと考えられる。

湯瀬館の主要な曲輪は、館の範囲の中でも標高の高い鳥越面の丘陵上にある、八幡平小学校湯瀬校舎跡地(以下小学校跡地)と「館コ」と呼ばれている部分の2か所である。現在この小学校跡地と「館コ」部分の北半部は東北自動車道になっているが、東北自動車道建設前の航空写真を見ると、造成された広大な平坦面をはっきりと見て取ることができる。小学校跡地は丘陵が米代川に向かって張り出している場所であり、その南側斜面に3段の帯曲輪が刻まれている。古道からは、小学校跡地から帯曲輪にかけての様子がよく見えたであろう。対して「館コ」部分は、小学校跡地に比べると若干張り出しが小さく南側斜面の傾斜もなだらかで、「館コ」部分の平坦面以外は造成の様子が不明瞭であるが、東西を流れる沢が水濠の役割を果たしていたと考えられる。

東北自動車道建設の際、小学校跡地については校舎建設によって既に削平されていたが、「館コ」部分には遺構が残存していると判断し、1979(昭和54)年に発掘調査を実施した。調査の結果、「館コ」部分を南北に分ける空堀を発見している。空堀の北側には2間×3間(約16.4m×10.9m)の掘立柱建物跡と、礎石配列建物跡、5間(約22m)の柱穴列を検出した。これらは重複しているものの、主軸方向は空堀とほぼ同じである。出土遺物としては、13～14世紀の中国製蓮弁青磁碗片、室町時代から日本で流通した永楽通宝、16世紀末の美濃灰釉皿が挙げられる。美濃灰釉皿は湯瀬館が破却された時期と一致する遺物であり、中国製蓮弁青磁碗片は13～14世紀頃、既に館が存在していたことを示唆している。

湯瀬館は以上に挙げた状況から、小学校跡地によって館の存在を主張し、周囲からは目立たない「館コ」部分で有事に備えるという場の使い分けをしていたのではないかと考えられる。

今年度の調査範囲は、小学校跡地の南側に位置する3段の帯曲輪、「館コ」の南側に位置するが館の範囲に含まれるかどうか不明であった宅地、そして帯曲輪の東側にあたる畑地と、大きく3つに分けることができる。東側の畑地は中世の館の範囲外であるが、2008(平成20)年に実施された確認調査で、縄文時代後期の遺物が出土したため、調査の必要があると判断した。

第2節 調査の方法

調査区は地形によって3つに分け、東側の畑地をA区、中央の帯曲輪をB区、西側の宅地をC区と呼称した。B区は3段の帯曲輪が連なっていることから、さらに上・中・下段と細別して調査を行った（付図1・2）。以下この呼称を用いる。

確認調査の結果に基づき、A区の表土除去は重機によって行った。B区は重機の進入によって曲輪が損壊するのを防ぐため、C区は表土が薄いため、人力で表土除去を行った。

作図のため、世界測地系による緯度40° 07' 28"、経度140° 50' 15"を原点（MA50）とした。この点を通る真北方向のラインをMA、これに直交する東西方向のラインを50と名付け、これらに平行するラインによって4m×4mのグリッドを必要範囲に設定した。南北ラインは東から西に向かって…LS・LT・MA・MB…という2桁のアルファベット、東西ラインは南から北に向かって…48・49・50・51…という2桁の数字で呼称した。2桁のアルファベットは左を母単位、右を子単位として、20単位で1母単位という表記法を採っている。ラインの交点には杭を打設して、南北ラインを示すアルファベットと東西ラインを示す数字を組み合わせた名前を付けた。各グリッドは、南東角に打設されている杭の名前で呼称した。

調査の記録は、平面図・断面図および写真で記録した。平面図・断面図は1/20を原則としたが、遺構細部の図面を必要とする際には1/10で作図した。写真撮影は、35mmのモノクロとリバーサルフィルムおよび必要に応じデジタルカメラを使用した。

遺物は、遺構内出土のものは出土遺構名・出土層位・遺物番号・出土年月日を記入し、遺構外出土のものは、出土グリッド・出土層位・遺物番号・出土年月日を記入し、取り上げた。

遺構の確認は、主にⅢ層上面およびⅦ層上面で行った。遺構番号は調査区ごとに100単位で分け、A区に1～100を、B区に100番台・300番台・400番台、C区に200番台・500番台を検出した順に付した。

遺構検出面の地形はトータルステーションによる測量と、ラジコンヘリによる航空写真撮影を行って記録した。これらの測量および記録は委託によって行った。

第3節 調査の経過

1月13日	秋田県鹿角地域振興局建設部との協議にて、調査区内にある電柱・電話線を調査開始までに撤去する必要があることを報告。
4月20日	電柱は調査区内に移設せざるをえないため、文化財保護室および埋蔵文化財センターが移設位置に遺構・遺物がないことを確認した上で移設作業を行うことになった。
6月15～19日	A区の表土除去を重機によって行った。その結果、A区は近現代の耕作地造成により大規模な削平・盛土がなされていることが判明。近現代の盛土も併せて除去した。
6月29日～7月2日	機材を搬入し、草刈り・ベルトコンベアの設置を行う。方眼杭打設作業開始。A区の東側で埋没沢を発見し、土層観察用のベルトを設定して掘削を開始。C区でトレンチを掘削し遺構の分布状況を確認したところ、SK I 226を検出。
7月6～10日	A区でSK 2～6を検出。Ⅳ層から縄文土器片や土偶が出土。B区下段の表土除去を開始。C区でのトレンチ調査により、調査区西端部は近現代に攪乱されているため遺構はないと判断した。方眼杭打設作業終了。

7月13～17日	A区でSK7・8を検出。IV～VI層に遺物が包含されており、埋没沢やその周辺で縄文土器片が集中して出土。土層観察により、埋没沢は3期に分けることができた。B区に基本土層を設定し掘削。中世とそれ以前の2面で遺構検出作業をする必要があることを確認。神社参道の西側にトレンチを掘削したところ、沢を埋め立てて現道路を設置しており、遺構のないことがわかった。
7月21～24日	A区でSK17を検出。IV～VI層の掘削を継続。B区で表土除去作業。C区で近現代の蔵跡の盛土を除去し、その下の遺構検出作業を行う。秋田県鹿角地方振興局建設部により新しい電柱が設置され、古い電柱の撤去作業が終了した。
7月27～31日	A区でIV～VI層の掘削を継続。B区下段で表土除去作業。C区で近現代に攪乱されている部分と、遺構が残存している部分を確認しながら、遺構精査を行う。
8月3～6日	A区でIV～VI層の掘削を継続。B区下段でSN116を検出。C区では北半部の遺構精査を終了。南半部での作業の際に排土置場として利用する予定。夏期休暇に備えて養生をする。
8月17～21日	A区はVII層上面まで掘削して精査終了。B区下段で柱穴様ピットを多数検出。B区中段の表土除去を開始。大館市から見学者1名来跡。
8月24～28日	B区下段でSK131、132を検出。B区中段でSD163を検出。
8月31日～9月4日	トータルステーションによる地形測量を開始。B区中段でSD167、SKI168、SN169下段でSK200を検出。鹿角市から見学者1名来跡。
9月7～11日	B区中段でSD367、369、SK343を検出。C区南側の精査を開始。SN232、SK233を検出。
9月14～17日	B区中段でSK426を検出。C区でSN232、SK233を検出。大館市より見学者3名来跡。
9月24～25日	B区中段でSK440、445を検出。C区でSKI270を検出。
9月28日～10月2日	B区で中世遺構検出面の精査を終了し、VI層の掘削を開始。SX447を検出。C区でSKT509、SK300、520を検出。VI層の掘削を開始。鹿角市から見学者2名来跡。
10月5～9日	B区でSK451を検出。C区で検出された柱穴様ピットの配列からSB549、550を確認。見学会に備えて見学者用通路の養生作業を行う。
10月10日	遺跡見学会を実施、見学者72名来跡。
10月13～16日	B区のVI層掘削作業。調査区の航空写真撮影を実施。見学者1名来跡。
10月19～23日	B区のVI層掘削作業。C区の遺構精査終了。山形県立米沢女子短期大学吉田氏、甘肅省交流員の楊氏、朱氏、見学者1名が来跡。
10月26日～30日	B区のVI層掘削作業を終了し、調査区の精査完了。十和田八幡平物産協会田中氏が来跡。遺構の埋め戻し作業など現場を撤収し、文化財保護室の立ち会いのもと、秋田県鹿角地域振興局建設部に調査区を引き渡した。

第4節 整理作業の方法と経過

各遺構は、現場で作成した図を第一原図とし、これを基に平面図と断面図を組み合わせ、適宜縮尺を変更し第二原図を作成してトレースし、調査所見や土層注記を記述した。

調査中に採取した試料については、平成21年度に放射性炭素年代測定および樹種同定、テフラ分析を委託によって実施した。

遺物の整理は、現場で洗浄・注記を行い、秋田県埋蔵文化財センターで接合・復元作業・採拓・実測・写真撮影を行った。実測図は基本的に実物大で作成し、土器・礫石器は1/3、土偶・剥片石器は1/2で掲載し、遺物分類と観察所見を記述した。調査中は土器のほとんどが縄文時代中期末葉から後期初頭に属する遺物と推定していたが、遺物整理の結果、弥生時代の遺物があることがわかった。また、陶磁器の多くは近世の遺物であったが、中世の中国製染付も1点出土した。

以上の図面・文字原稿を編集し、本報告書を刊行した。

第4章 調査の記録

第1節 調査範囲の地形と基本層序

本遺跡は十和田火山起源の鳥越火砕流堆積物による台地とその開析面にあたる斜面部に立地し、土壌は鳥越火砕流および十和田 a 火山灰を母材としている。今年度の調査範囲は地形によって東側の畑地(A区)、中央の帯曲輪(B区)、西側の宅地(C区)の3か所に分けた。作図地点によって堆積状況に大きな差があったため、基本層序は以下の基準に従って大別し、適宜枝番を付して記録した。枝番は各土層共通のものではない(付図1)。

- I層 表土。旧耕作土や宅地の砂利面など。
- II層 VII層ブロックや角礫を多量に含む黒褐色シルト。ビニールやプラスチックなどの廃棄物が混入している。近現代に畑地や宅地を造成した際の盛土。
- III層 細かいVII層ブロックを多量に含む黒褐色シルト。中世に館を造成した際の盛土。この上面が中世の遺構検出面にあたる。
- IV層 腐植に富んだ黒色シルト。古代～中世の堆積した旧表土。
- V層 黄褐色の火山灰・軽石層。十和田 a 降下火山灰層(テフラ分析の結果は、第5章第2節)。
- VI層 褐色～暗褐色シルト。若干腐植が発達したVII層の漸移層。縄文時代から弥生時代の遺物包含層であり、遺構検出面。
- VII層 角礫を含む黄褐色シルト。地山であり、鳥越火砕流堆積物。

以下では区毎に現地形およびその形成過程、基本層序の順に記述する。

A区には更新世に開析された沢があり(A区 spC-D 埋没沢1)、北東へ向かって開口している。沢底にはV層にあたる十和田 a 降下火山灰層がもっとも厚く堆積しており、A区の旧地形は全体にこの沢へ向かって傾斜していたものと推定される。沢が腐植により発達した黒色土でほぼ埋没した後に、埋没沢に沿って2条の溝跡がある(A区 spC-D 埋没沢2・3)。近現代には畑地とするため、東西の標高の高い部分をVII層まで削平し、標高の低い埋没沢部分に盛土して、A区の西半部を標高約235 m、東半部を標高約234 mの平坦面に整地している。

I層は旧耕作土で、腐植に富み、未分解の植物遺体を多く含む。II a～c層は畑地造成の際の盛土で、VII層由来土のブロックや角礫を多量に含む。II d層は部分的に堆積している火山灰の層で、テフラ分析の結果II a～c層が盛土される前に二次的に堆積した十和田 a 火山灰であることがわかっている。A区は中世の館の範囲外に位置するため、III層は堆積していない。IV～VI層は、畑地造成の際に削平された部分と、旧地形の標高が低いために削平を免れた部分がある。IV層は腐植に富んだ黒色土で、二次的に流入した縄文時代から弥生時代の遺物を含む。V層は最大80cmの層厚がある十和田 a 降下火山灰層である。V層とVI層の層界には植物の印影が残っている部分があり、十和田 a 火山灰の降下直前の地表面が残存していることを示している。VI層は縄文時代から弥生時代の遺物包含層であり、遺構検出面であるが、炭化物・焼土ブロックなどは見られない。VII層は鳥越火砕流堆積物で、畑

地造成の際に大きく削平された部分では角礫が多量に含まれていることが観察できた。埋没沢は2条の溝跡も含めると3期に分けられる。埋没沢1の覆土は5層に分けられ、1～3層はIV層の黒色土、4層はV層の十和田a降下火山灰層、5層はVI層の漸移層に対応する。埋没沢2・3の覆土はVII層由来土の大塊を多量に含む人為的な一括埋土で、II層に対応する。

B区は湯瀬館の主要な曲輪の一つである小学校跡地の南側に位置している。旧地形は斜面だったと推定されるが、館の建設にあたって掘削され3段の帯曲輪が造成されている。上段は神明社の社地に続く面で、調査範囲に含まれるのはごく一部である。中・下段は全域が調査範囲内に含まれている。帯曲輪の面は水平ではなく、中段は10°前後の角度で南へ緩やかに傾斜している。近現代には、宅地造成の際に中段のグリッドLF～LJ 43～46あたりは大きく削平され、中・下段の西端も攪乱を受けている。また、より水平に近くなるよう、各段の南側が盛土によってかさ上げされていた。

I層は表土で、攪乱された土壌を母材とする腐植に富んだ黒色土である。II層は宅地造成などの整地による盛土で、VII層由来土のブロックを多量に含んでおり、ビニールなどの廃棄物が混入していた。III a層は水成堆積した砂の層で、中世の生活面と推定される。III b～i層はグリッドLF以東で確認され、VII層由来土のブロックを含む土が水平に盛土されている様子が観察できる(B区 spA-B)。IV～VI層は帯曲輪が造成される際に掘削されたため、各段の南半部にのみ残存している。IV層は基本的に黒色土だが腐植の具合により若干色の違いが見られる(B区 spC-D・spE-F)。V層は部分的に堆積している火山灰層で、テフラ分析により二次的に堆積した十和田a火山灰層であることがわかっている。VI層は漸移層で、下段では縄文時代の遺物が少量出土した。中世の遺構は、III～VI層が残存している場合はその上面、削平されている場合はVII層上面で確認した。ただし、覆土によってはIII～VI層が残存していても平面形を見分けられず、VII層で確認した遺構もある。また、III～VI層が削平され、VII層の直上にI層が堆積している部分については、近現代の造成により中世の面が失われている可能性がある。

C区は湯瀬館のもう一つの主要な曲輪である「館コ」部分の南側に位置しているが、道路建設や宅地造成により中世以前の地形が失われている。現地形の観察とトレンチ調査の結果、グリッドMF～MKは南へ開口する沢を埋め立てて道路と駐車場を建設した部分であり、覆土に古代の遺物が混入しているものの、沢底に遺構の形跡はないことを確認した。またグリッドML以西は、宅地造成の際に大部分がVII層まで削平されており、遺構が残存しているのはVI層が残存している部分とその周辺にあたるグリッドML～MT 46～50であることがわかった。

I層は砂利か攪乱されたVI・VII層由来土、II層は角礫を含む黒色土とVII層由来土の混合した盛土で、どちらも宅地造成による層である。VI層は漸移層だがA・B区のVI層より腐植に富んで黒味が強い。古代以前・中世以降共に生活面は攪乱されているため、VI・VII層上面で遺構を確認した。

第2節 古代以前の遺構と遺物

1 検出遺構と出土遺物

竪穴住居跡1軒・陥し穴1基・土坑9基・柱穴様ピット10基を検出した。

(1) 竪穴住居跡(S I)

S I 462(第5図、図版4)

B区下段L O・L P 46に位置する。I層直下のⅦ層上面で弧状に並んだ11基の柱穴様ピットを確認し、壁際に柱が並ぶ楕円形の竪穴住居跡と判断した。規模は推定で長軸約5m×短軸約4m、主軸はN-89°-Eである。各柱穴の詳細は、第5図の一覧に記載した。本遺構は中世の帯曲輪の造成に際してⅣ～Ⅵ層が失われている場所にあり、本遺構本体の掘り込みと北側の柱穴は、中世の掘削により失われたと推定される。南に位置する柱穴ほど底面標高が低くなっており、これは当時は傾斜した地形で南側の柱穴を深く掘る必要があったためと考えられる。遺構内出土遺物はないが、本遺構南東のグリッドL N 45のⅥ層から縄文時代晩期の土器が出土している(第12図25)。

(2) 陥し穴(S K T)

S K T 509(第6図、図版12)

C区MR 49に位置する。I層直下のⅦ層上面で確認した。平面形は楕円形で、確認面の規模は長軸2.58m×短軸0.52m、底面は長軸3.00m×短軸0.30m、深さは0.95mである。覆土は4層に分かれ、1～3層はⅦ層由来土を含む褐色～黒褐色土で、4層はⅦ層由来土のブロックを主体としていることから、壁面の崩落により4層が堆積した後、自然堆積により1～3層が堆積したと推定される。S B 550のP 10と重複し、本遺構の方が古い。形状から縄文時代の陥し穴と判断した。C区は近代の宅地造成でⅦ層上面まで掘削されており、本遺構と関連する陥し穴がこの掘削によって失われている可能性がある。

(3) 土坑(S K)

S K 2・3(第6図、第4表)

A区の埋没沢の西側縁辺部に6基、C区に3基分布する。近現代の削平を受けていない部分ではⅥ層で、Ⅶ層まで削平を受けている部分ではⅦ層上面で確認した。規模は平均で長軸0.87m、短軸0.69m、深さ0.13m、覆土はほとんどが単層で一括で埋め戻されたと推定される。長軸÷短軸の平均は1.26で、長短軸の差の少ない楕円形の遺構が多い。以下で特徴的な遺構について記述し、詳細は第4表に記載した。

S K 2・3は規模・長軸÷短軸の比率が平均から隔たって大きく、S K 2の平面形は楕円形、S K 3は長方形と推定される。S K 2・3は重複しており、S K 2が新しい。これらの周辺は攪乱されている部分が多く、S K 2・3も攪乱である可能性がある。S K 4は、まとめて出土した縄文土器片(第6図1～3)の周辺を精査した結果確認した。土坑の平面形は遺物の出土位置より約16cm低い面で確認したが、本来は遺物の出土位置より高い面から掘り込まれており、0.28mより深い土坑であった可能性がある。覆土が2層に分層され、1層はⅦ層由来土、2層はⅥ層由来と見られる腐植の発達した土を主体としているが、どちらも軽石を含むブロック状の覆土で、一括で埋め戻されたと推定される。第6図1は頸部に若干くびれのある円錐形の鉢形土器の破片で、大洞B式である。波状口縁で、

口縁部から胴部半ばまでは無文、胴部下半にはL R単節縄文が施されている。2・3は法量の小さい土器の破片で、2は壺形土器と推定され、無文地に2条の平行沈線が横位で施されている。3は底部破片で、底径は約4cmと推定される。SK6からは縄文土器片(第7図1～4)が出土した。1～3は胴部破片で、1はL原体による撚糸文、2は条痕、3はL R縄文が施されており、これらは縄文時代中期から後期の遺物と推定される。4は口縁部破片で、口縁に2個一組の山形突起があり、器面には文様が見られない。大洞B～BC式の土器と判断される。SK520からは磨り石(第7図5)が出土した。扁平な楕円形の安山岩で、長さ17.15cm、高さ9.45cm、厚さ3.75cmで、縁辺部に磨り面と敲打跡があり、被熱によって剥離している部分がある。半円状扁平打製石器の原型となった磨り石と推定される。

(4) 柱穴様ピット(SKP)

A区の埋没沢の西側縁辺部に10基分布する(付図2、第5表)。規模の平均は長軸0.30m、短軸0.26m、深さ0.14m、長軸÷短軸の比率は1.13、覆土はすべて単層でブロック状のVI・VII層由来土を主体するため一括埋め戻しと推定される。

SKP8からは縄文土器片(第7図6)が出土した。6は法量の小さい壺形土器の肩部で、無文地に沈線で文様が描かれている。縄文時代後期前葉の土器と推定される。

第4表 古代以前の土坑一覧

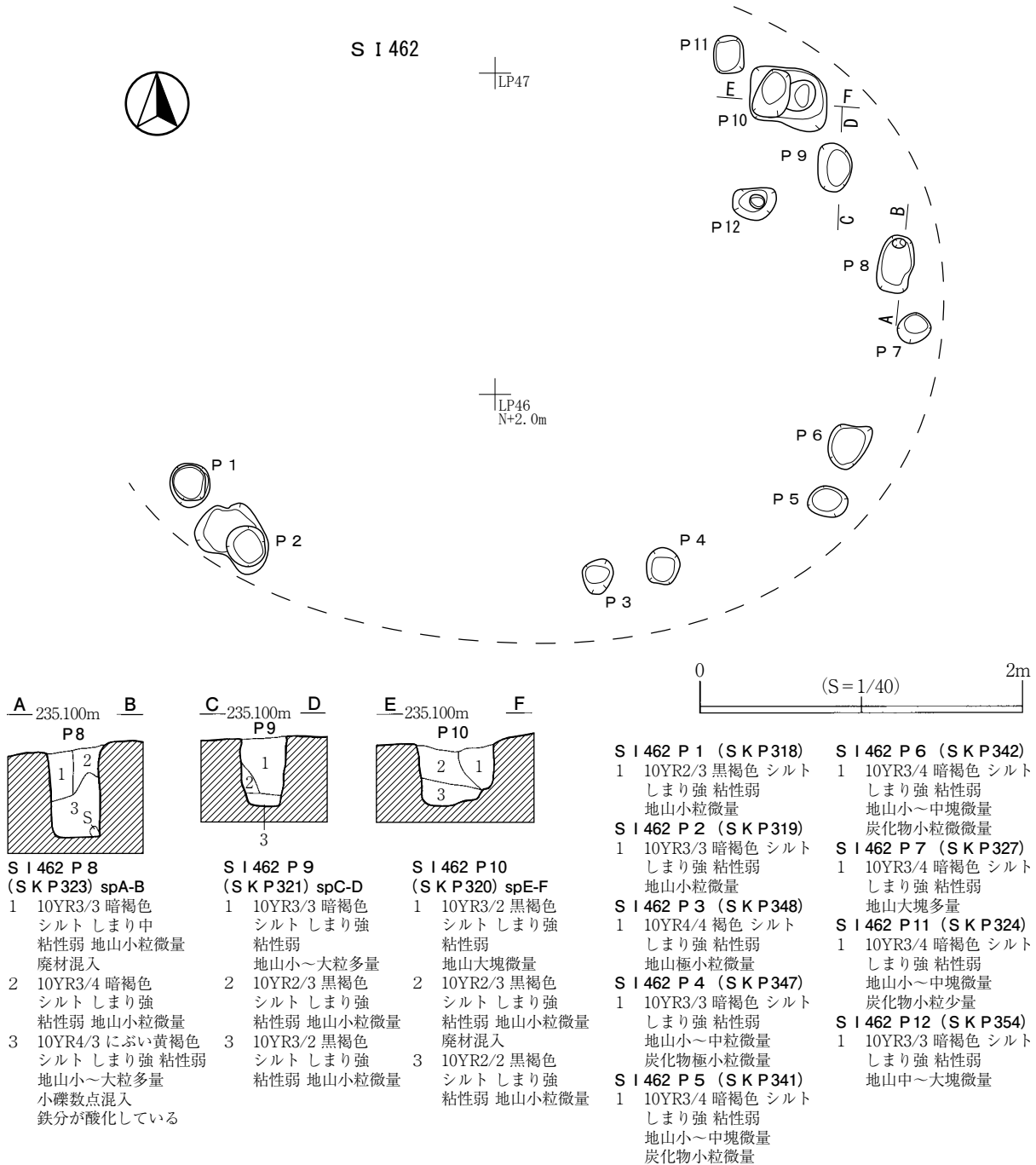
挿図番号	種別	層位	グリッド	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	備考
第6図	SK2	VII層上面	KL・KM40	1.40	0.78	0.12	SK3より新しい。
第6図	SK3	VII層上面	KL・KM39・40	(0.95)	0.89	0.16	SK2より古い。
第6図	SK4	VI層	KN42	0.75	0.55	0.12	出土遺物: 第6図1～3
第6図	SK5	VI層	KO・KN43・44	0.75	0.55	0.12	
第7図	SK6	VI層	KP43・44	0.50	0.48	0.15	出土遺物: 第7図1～4
第7図	SK17	VII層上面	KS42	0.94	0.87	0.11	
第7図	SK261	VII層上面	MP48	(0.98)	0.85	0.18	SKI226・SKP267より古い。
第7図	SK300	VII層上面	MO・MP48	0.77	0.57	0.09	
第7図	SK520	VII層上面	MO48・49	0.76	0.65	0.14	出土遺物: 第7図5

※ () 内の数値は残存値である。

第5表 古代以前の柱穴様ピット一覧

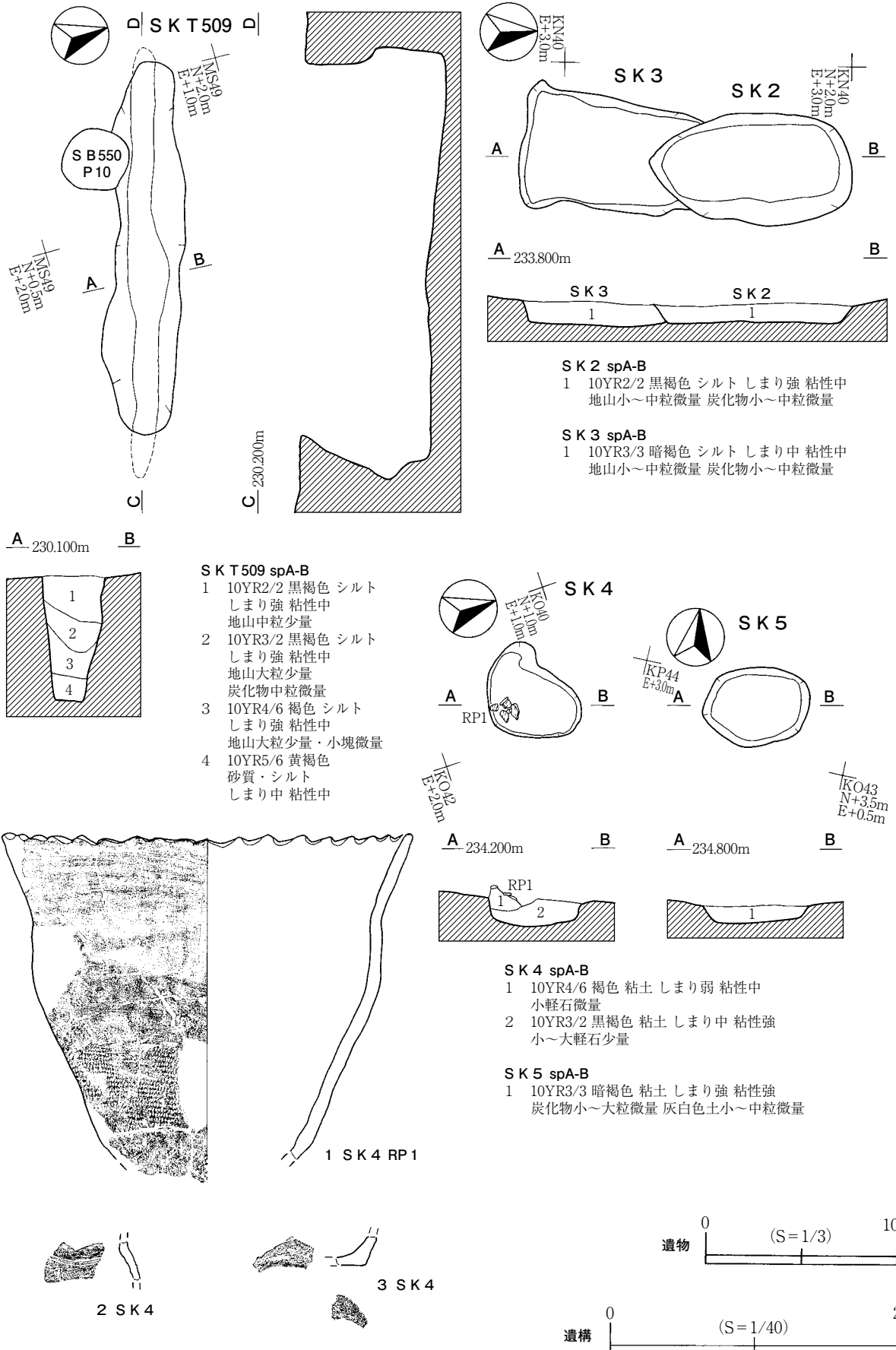
SKP番号	層位	グリッド	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	底面標高 (m)	備考
7	VII層上面	KQ41	0.33	0.24	0.13	234.30	SKP8より新しい。1層。
8	VII層上面	KQ41	(0.07)	0.14	0.05	334.40	SKP7より古い。1層。出土遺物: 第7図6
9	VII層上面	KQ43・44	0.40	0.33	0.14	234.37	
10	VII層上面	KR43	0.33	0.30	0.18	234.29	1層。
11	VII層上面	KQ44	0.19	0.18	0.14	234.38	1層。
12	VII層上面	KR44	0.25	0.22	0.08	234.34	1層。
13	VII層上面	KR・KS44	0.28	0.18	0.08	224.81	1層。
14	VII層上面	KS44	0.26	0.24	0.26	234.48	1層。
15	VII層上面	KP43	0.35	0.35	0.13	235.05	1層。
23	VII層上面	KO40	0.50	0.38	0.17	233.85	1層。

※ () 内の数値は残存値である。

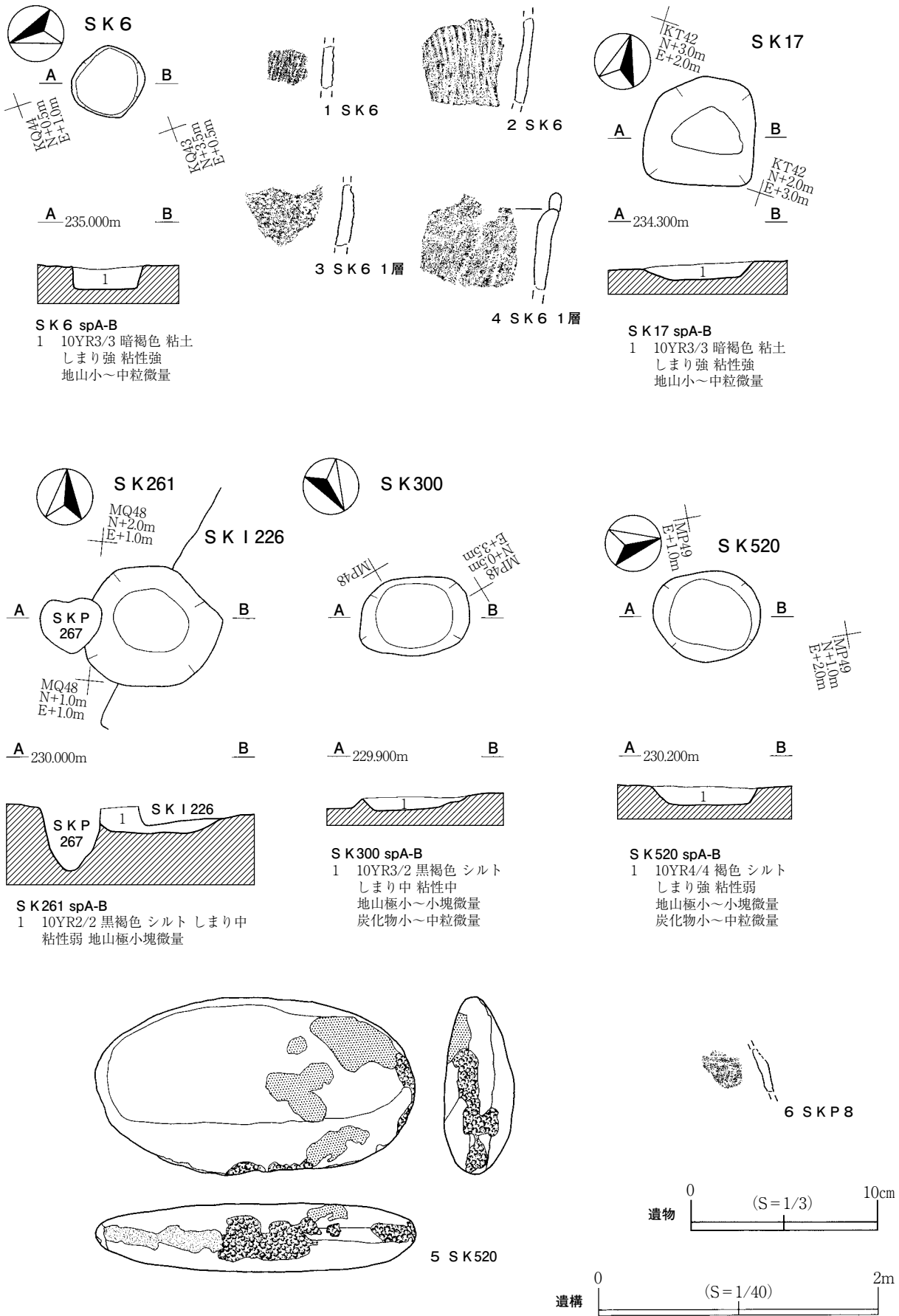


S I 462	旧番号	層位	グリッド	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	底面標高 (m)	備考
P 1	SKP318	Ⅶ層上面	LP46	0.27	0.25	0.30	234.33	
P 2	SKP319	Ⅶ層上面	LP46	0.47	0.37	0.38	234.26	
P 3	SKP348	Ⅶ層上面	LO46	0.20	0.18	0.15	234.49	
P 4	SKP347	Ⅶ層上面	LO46	0.22	0.20	0.35	234.45	
P 5	SKP341	Ⅶ層上面	LO46	0.25	0.20	0.15	234.60	
P 6	SKP342	Ⅶ層上面	LO46	0.33	0.25	0.13	234.65	
P 7	SKP327	Ⅶ層上面	LO46	0.20	0.18	0.27	234.61	
P 8	SKP323	Ⅶ層上面	LO46	0.35	0.23	0.57	234.34	1層から鉄製品1点出土。
P 9	SKP321	Ⅶ層上面	LO46	0.29	0.22	0.42	234.52	
P 10	SKP320	Ⅶ層上面	LO46	0.49	0.36	0.38	234.53	
P 11	SKP324	Ⅶ層上面	LO46	0.24	0.20	0.35	234.66	
P 12	SKP354	Ⅶ層上面	LO46	0.26	0.19	0.22	234.74	柱痕を底面形状で確認した。柱痕底面標高234.68m。

第5図 古代以前の遺構① (S I 462)



第6図 古代以前の遺構② (SK T 509、SK 2・3・4・5)



第7図 古代以前の遺構③ (SK 6・17・261・300・520、SK P 8)

2 遺構外出土遺物

古代以前の遺構外出土遺物の多くは、A区の縄文時代から弥生時代の遺物包含層から出土した。土器・土製品と石器に分け、土器・土製品は時代順に並べて通し番号を付し掲載している。

(1) 縄文土器(第8～12図、図版13～15)

第8図1は、縄文時代前期、円筒下層c式の深鉢形土器の口縁部破片である。口縁は平縁で、前々段多条の羽状縄文が横位回転で施されている。胎土は繊維を多量に含む。

第8図2、第9図3～5は、縄文時代中期末葉、大木10式の深鉢形土器である。2は平縁で、器形は口縁部が直立し、頸部でくびれ肩部が張り出しており、底部に向かって器径が小さくなっている。口縁から頸部までは無文である。肩部から胴部にかけて、逆「U」字の文様が、粘土紐貼付によるヒレ状の隆帯と沈線で7単位描かれている。逆「U」字の文様の内側から底部にかけては、RL縄文が施されている。3は平縁で、器形は口縁部が直立し、胴部に膨らみがある。口唇部は面取りされている。器面全体にRL縄文と綾線文の縦位回転が施されている。4は平縁で、器形は口縁部が開き、頸部でわずかにくびれ、胴部から下へ向かって器径が小さくなっている。器面は摩滅しているが、頸部より下にはRL縄文が施されているのが確認できた。5は器厚や湾曲から底部付近の破片と判断されるが、小破片であるため器形の特徴は不明である。器面にはまばらにRL縄文が施されている。

第9図6、第10図7は、縄文時代後期初頭の土器である。第9図6は鉢形土器である。平縁で、器形は口縁部が開いて頸部でくびれ、肩部が張り出し、胴部から底部に向かって器径が小さくなっており、底面には網代跡が残っている。器面の口縁部から胴部の間に、粘土紐貼付による断面が三角形の隆帯で、多重の「V」字の文様が4単位描かれている。4単位の「V」字の文様の間に1か所だけ、さらに「V」字の文様が描かれている。断面が三角形の隆帯と、逆傾斜の平行線が隣接して描かれる「V」字か逆「V」字の文様は、葦窪式土器の要素と類似している。第10図7は深鉢形土器である。口縁は2個1組の山形突起が4単位ある波状口縁で、器形は口縁部で内湾し、胴部上半が膨らみ、胴部半ばから底部に向かって器径が小さくなっている。器面にはRL縄文の上から沈線で文様が描かれている。欠損部分が多いため正確な文様構成は不明だが、口縁部、胴部半ば、胴部下半部に、文様帯を区画する横位の沈線が2条1組で描かれている。口縁部文様帯には入組文や渦巻文、胴部半ばの文様帯には直線的な主文様が描かれている。口縁部の山形突起の位置と文様帯の文様単位は対応しない。文様は十腰内I式土器の直前、馬立式や蛭沢式などに併行すると推定される。

第10図8～12、第11図14～20は、縄文時代後期前葉の十腰内I式土器に比定される。第10図8は口縁部破片である。波状口縁で、口縁部は外湾している。口縁の波頂部の真下に渦巻文が縦に3個描かれている。口縁に沿って3条1組の沈線が描かれており、渦巻文と口縁部の沈線で区画された部分には、同じく3条1組の直線的な斜線が沈線で描かれている。9～11は格子状の文様が施された小破片で、10は口縁部である。9の文様は撚糸文、10・11は櫛状工具による沈線で格子状の文様が描かれている。

12は深鉢形土器で、平縁である。器形は口縁部が直立し、肩部がわずかに張り出し、胴部から下に向かって緩やかに器径が小さくなっていく。器面にはLR縄文が施されており、その上から口縁と肩部に横位の沈線を施して、間の縄文を摩り消している。肩部の沈線の下には入組文を含む横位の沈線が施されている。第11図14は深鉢形土器の破片である。平縁で、器形は口縁部が外傾し頸部以

下はほぼ直立している。器面は頸部以下にR L縄文が施されている。15は湾曲と器厚から底部付近と推定される小破片で、器面にL R縄文が施されている。16・17は口縁部の小破片で、無文である。胎土が際立って粗く、輪積や口縁部の折り返しの痕跡が明らかに残っている。18は深鉢形土器である。口縁部は折り返されており、平縁である。器形はほぼ円筒形をしており、胴部下半から底部に向かってわずかに器径が小さくなっており、底面には笹の葉状の葉脈を持つ植物の圧痕が残っている。器面には撚糸文が縦位回転で施されている。19・20は壺形土器の口縁部を含む破片で、無文である。湾曲や器厚から法量が小さいと推定される。

第11図21は、縄文時代後期中葉、十腰内Ⅱ式に比定される台付鉢形土器の台部である。鉢部との接着部分から接地部分に向かって緩やかに器径が大きくなっている。器面にはL R縄文を施した後、沈線で横位に展開する方形や波形の文様を描き、縄文を摩り消している。

第12図22は縄文時代後期後葉の瘤付土器の肩部と底部の破片である。接合しないが、同じ場所出土したこと、胎土・器形から同一個体と判断した。壺形土器で、肩部に粘土粒添付による突起があり、L R縄文の上から横位に展開する文様が描かれ、縄文が摩り消されている。

第12図23～26は、縄文時代晩期の大洞式土器である。23は大洞B式の深鉢形土器と推定され、胴部にくびれのある器形で、器厚は非常に薄く、器面はよく磨かれて黒光りしている。くびれの部分に横位の沈線が3条引かれ、その間に列点が施されている。横位の沈線の上には、曲線的な文様を描かれている。24・25は大洞C2式の鉢形土器の口縁部破片である。細かい波状口縁で、器形は口縁部が直立し肩部がわずかに張り出し、胴部は底部に向かってゆるやかに器径が小さくなっている。25はB区で検出された竪穴住居跡S I 462の付近で出土した。口縁に沿って3条の沈線が横位で施されており、沈線より下の胴部にはL R縄文が施文されている。26はL R縄文の施された小破片で、胎土・調整から縄文時代晩期と判断した。

(2)土製品(第11図、図版15)

第11図13は、縄文時代後期前葉の十腰内Ⅰ式の時期にあたる板状土偶である。上半部と下半部は離れた状態で出土した。頭部は欠損している。両手両足は簡略化しており、特に足は股にあたる表現がないが、下端につま先らしき表現がある。みぞおちから脇腹にかけて肋骨状の段差があり、みぞおちから下半に向かって正中線を鎖状に描き、腹部から脇腹・背中にかけてと、首の周りに格子状の文様を描いている。沈線でこれらの文様を描いた後に両乳房と臍を粘土粒添付による突起で表現し、臍には井桁形の沈線を描いている。

(3)石器(第14図、第6表、図版17)

石鎌7点、石錐2点、石匙2点、スクレイパー1点、磨製石斧1点、磨石4点が出土した。個々の石質・法量・特徴などは第6表に記述した。

磨石については大きく2種類に分けられ、細長い稜線に磨り面があるもの、2つ目は丸く平たい面に磨り面があるもので、52～54は前者、55は後者に当たる。さらに52は素材がもともと持つ細長い稜線を磨り面として用いているのに対し、53・54は扁平な楕円形の石を打ち欠いてさらに細長い稜線を作り出し、磨り面として用いている。

第6表 遺構外出土石器一覧

遺物番号	器種	石質	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	備考
39	石鎌 (無茎凹基)	頁岩	23.5	13.5	3.0	0.5	
40	石鎌 (無茎凹基)	頁岩	25.0	17.0	5.0	1.4	
41	石鎌 (無茎平基)	頁岩	24.0	14.0	4.0	0.7	
42	石鎌 (有茎凸基)	鉄石英 (赤色頁岩)	31.5	8.0	4.0	1.0	
43	石鎌 (有茎凸基)	頁岩 (白)	28.0	11.0	3.0	0.5	基部折損、アスファルト付着
44	石鎌 (有茎凸基)	鉄石英 (赤色頁岩)	27.5	7.0	4.0	1.2	
45	石鎌 (有茎凸基)	玉髓	22.5	12.0	4.0	0.9	基部折損
46	石錐	鉄石英 (赤色頁岩)	32.0	35.0	7.0	4.5	
47	石錐	頁岩	36.5	53.5	16.5	29.5	
48	石匙	頁岩	57.0	41.0	8.0	13.2	
49	石匙	頁岩	48.0	34.5	7.0	10.8	下端折損
50	スクレイパー	頁岩	26.5	24.5	6.5	4.3	
51	磨製石斧	粘板岩	50.0	10.5	18.0	15.6	
52	磨石	安山岩	102.0	4.5	52.0	308.8	
53	磨石	安山岩	155.5	31.5	76.0	581.3	
54	磨石	安山岩	165.0	23.5	86.0	606.8	
55	敲石	安山岩	113.0	77.5	92.5	1213.9	

(4) 弥生土器(第12・13図、図版16)

弥生時代の土器は大きく3種類に分けられる。第12図27～29は、弥生時代初頭の台付鉢形土器で、27・28には変形工字文が沈線で描かれ、工字文の間を刺突で充填している。29は口縁部、肩部、台部の破片で、接合しないが出土状況・胎土などの点で同一個体と判断した。口縁部は内外面ともに口縁に沿って横位の沈線が3条施されている。頸部、胴部と台部の境、台部の接地部分付近には横位の沈線が2条施されており、横位の沈線の間はR L原体による縦走縄文が充填されている。30～33は横位の沈線と縄文だけで文様が施されている深鉢形土器もしくは鉢形土器である。頸部に施された横位の沈線より下の胴部には全てR L縄文が施されている。31～33の口縁部には、内外面共に口縁に沿って2・3条の沈線が施されている。第13図34～36は、口縁部から頸部までは無文で、頸部以下の胴部にはR L縄文が施されている鉢形土器である。

(5) 土師器(第13図、図版16)

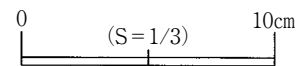
第13図37は土師器の坏の破片である。内面はよくみがかれた内黒で、底面は糸切底である。第13図38は土師器把手付土器の把手部分である。摩滅が激しく調整痕はほとんど見えなくなっていた。把手は中実で、先端部分のみ若干窪みがある。



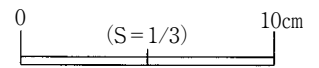
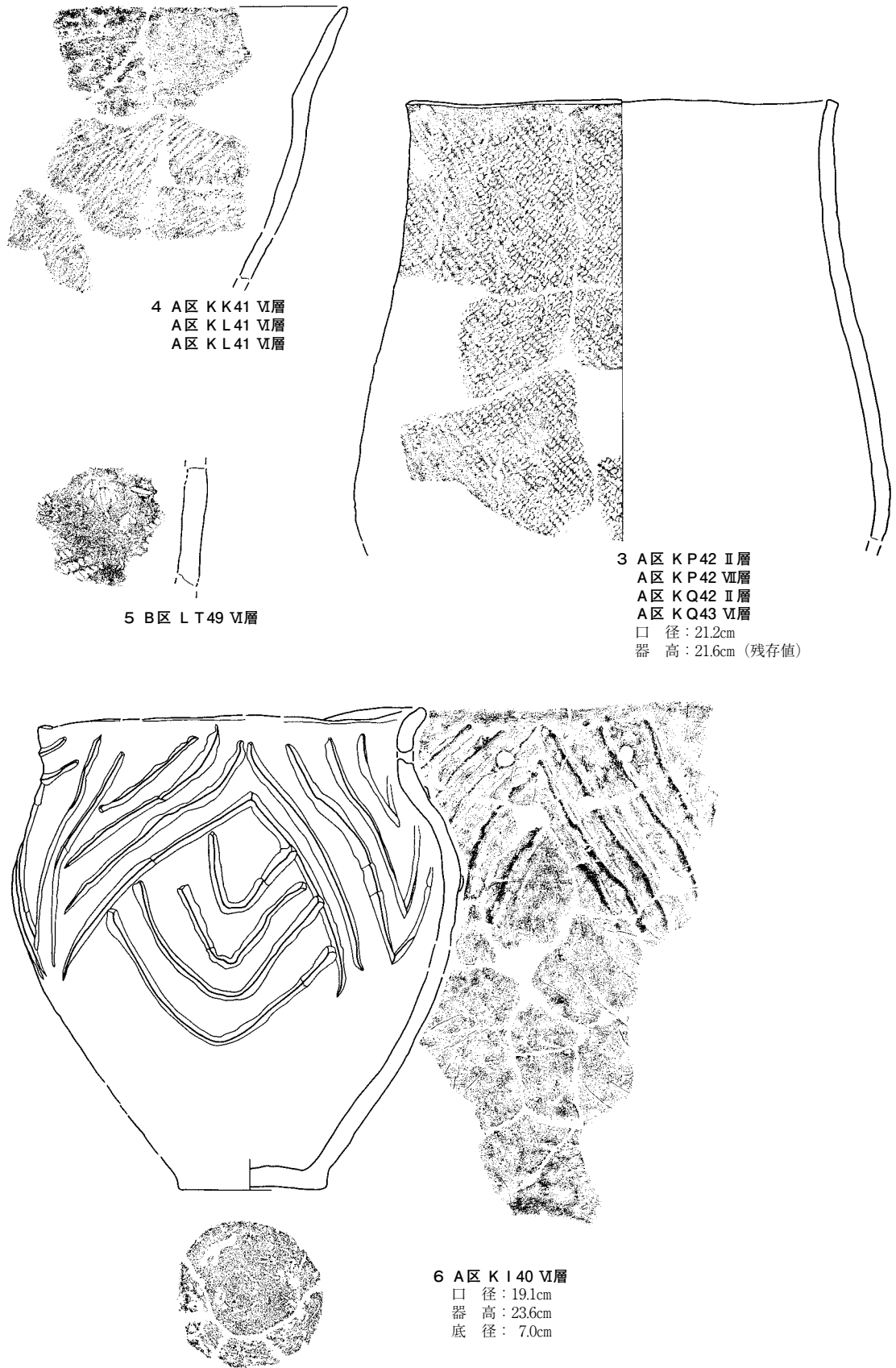
1 A区 LO44 Ⅲ層



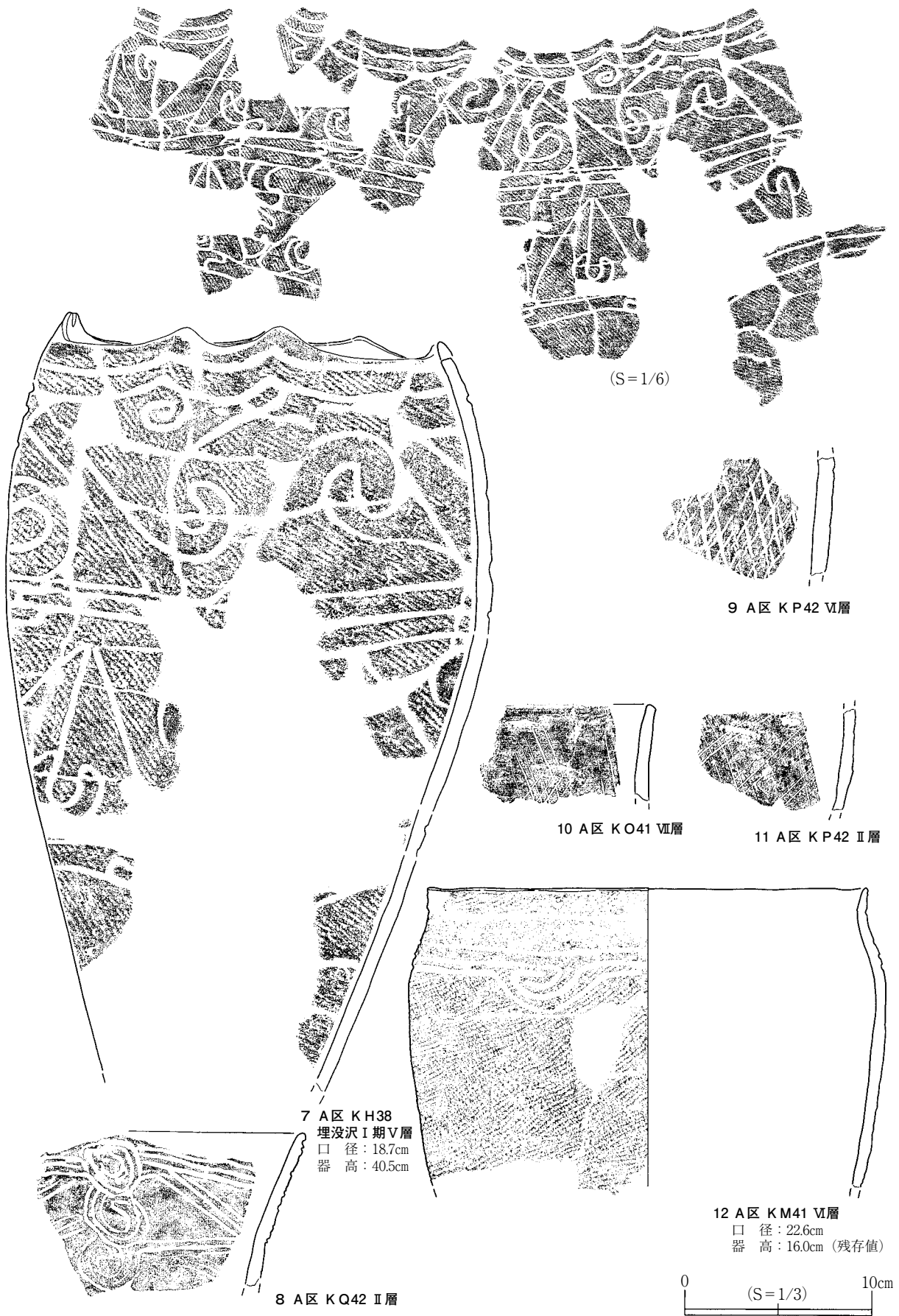
2 A区 K J 40 VI層 RP 1
口 径：26.7cm
器 高：54.7cm
底 径：8.8cm



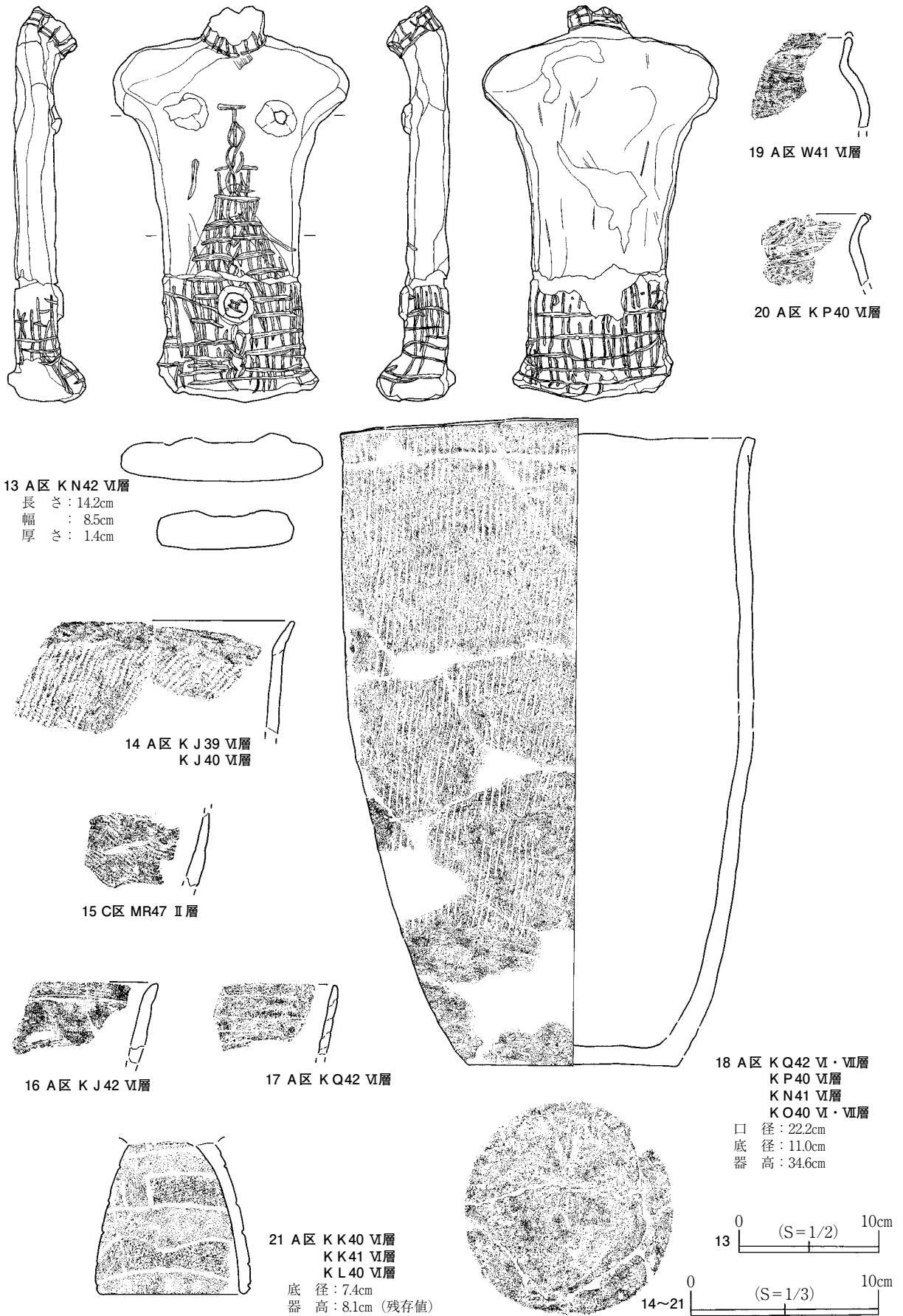
第8図 遺構外出土遺物①（古代以前）



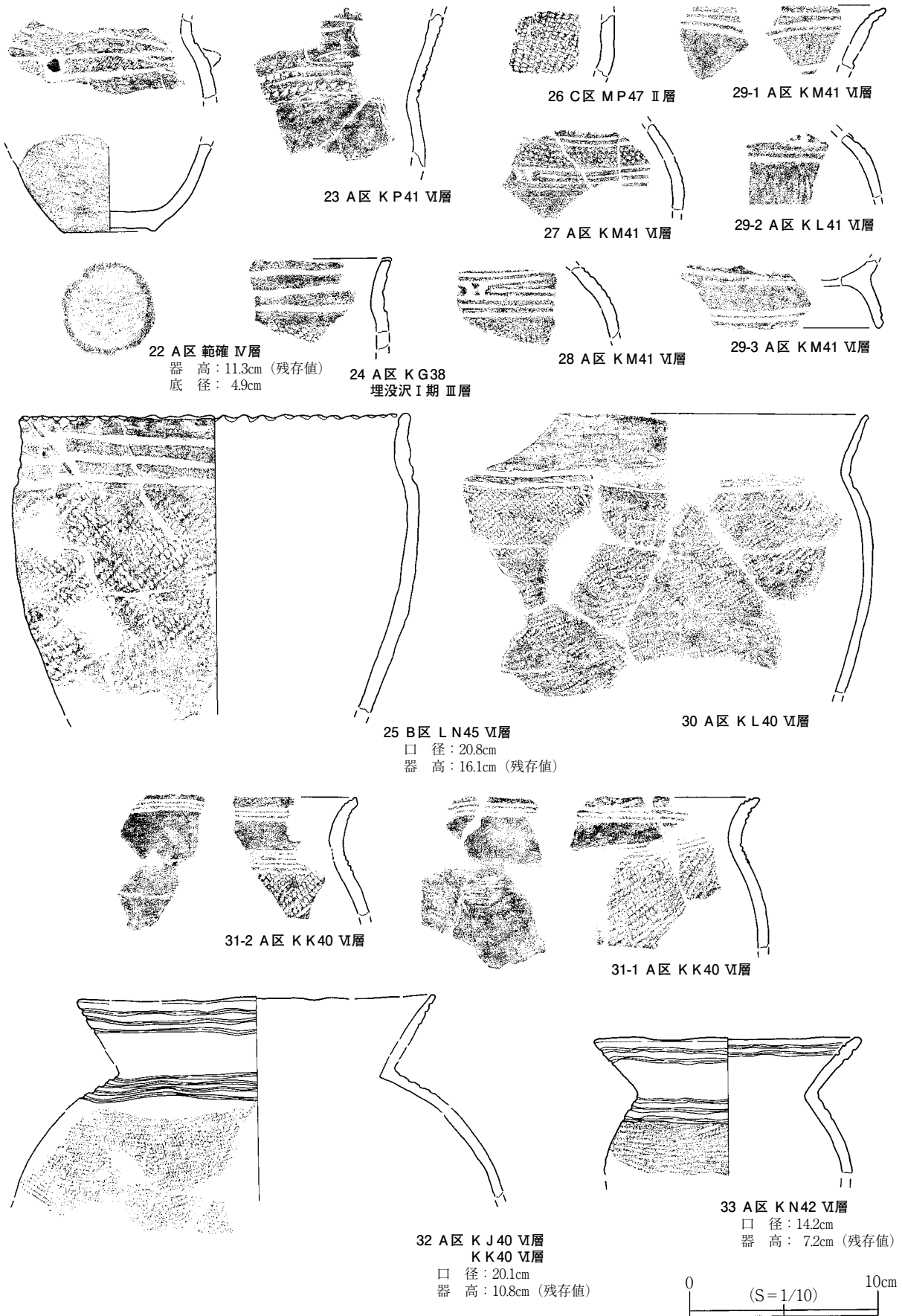
第9図 遺構外出土遺物② (古代以前)



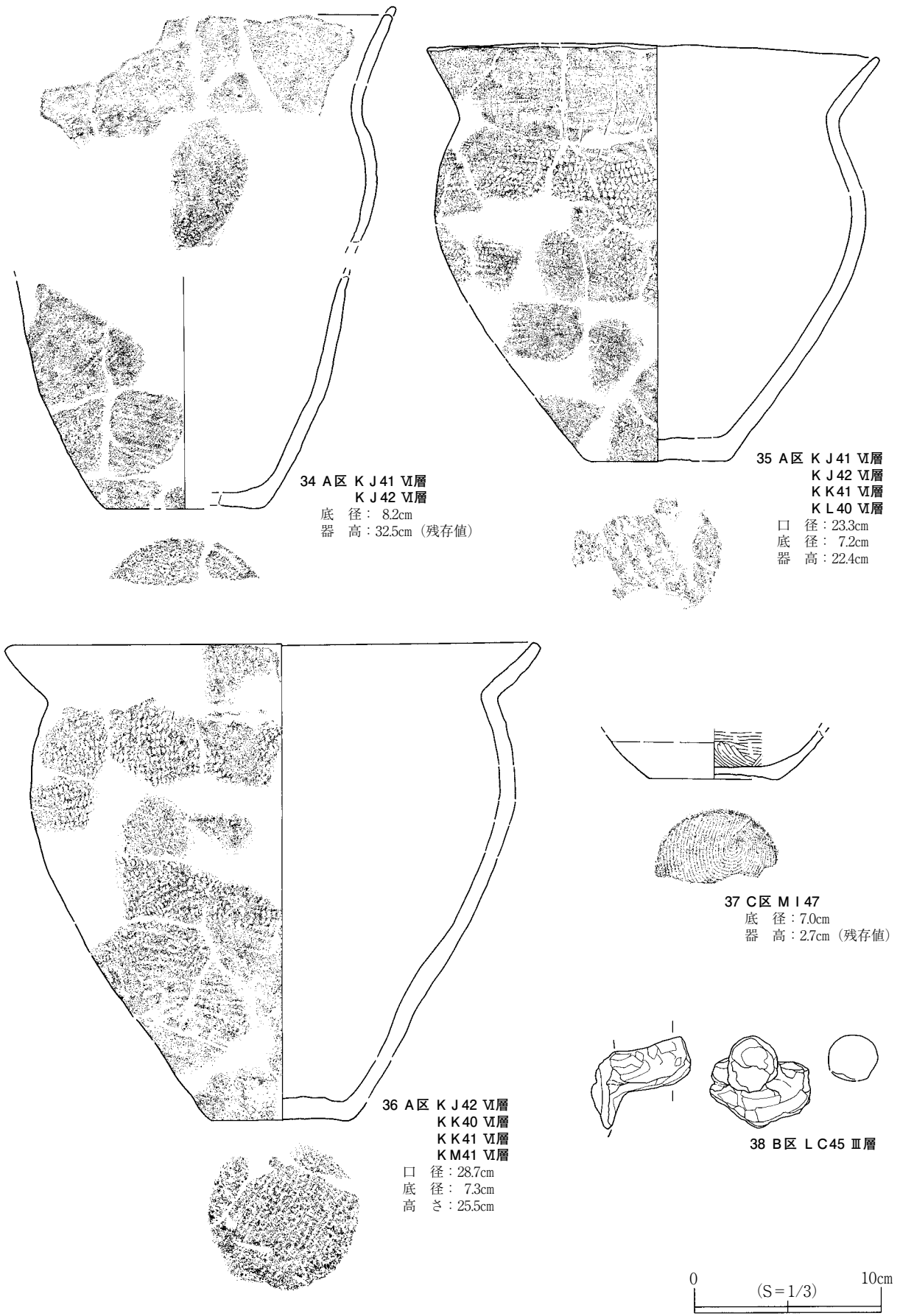
第10図 遺構外出土遺物③ (古代以前)



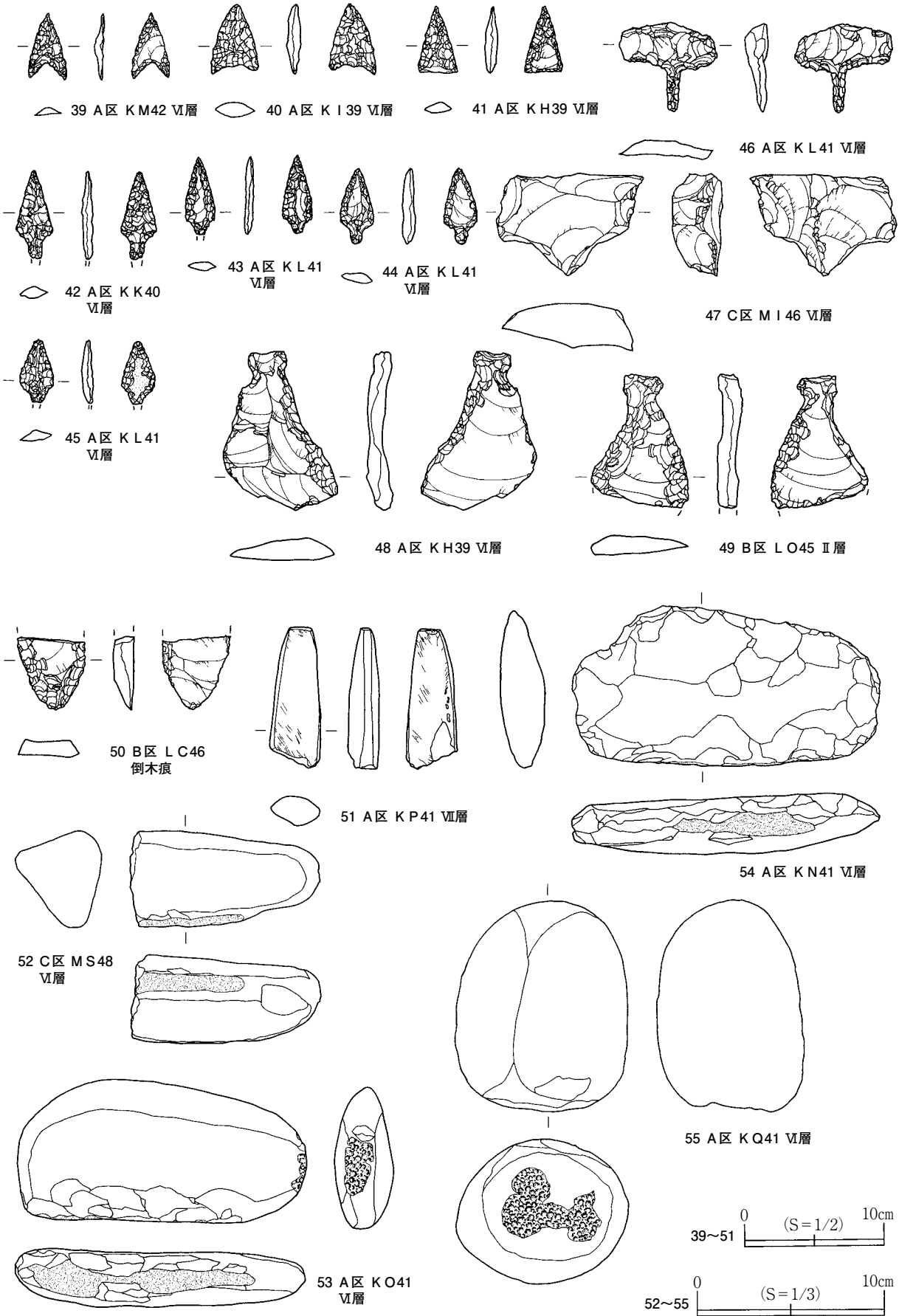
第11図 遺構外出土遺物④ (古代以前)



第12図 遺構外出土遺物⑤ (古代以前)



第13図 遺構外出土遺物⑥ (古代以前)



第14図 遺構外出土遺物⑦ (古代以前)

第3節 中世以降の遺構と遺物

1 検出遺構と出土遺物

帯曲輪3か所、竪穴状遺構3基、掘立柱建物跡6棟、柱穴列4列、焼土遺構3基、溝状遺構4条、性格不明遺構1基、柱穴様ピット251基を検出した。遺構から出土した遺物は、SK I 226から出土した近世の陶磁器片とSK 112から出土した時期不明の漆碗、柱穴様ピットから出土した同じく時期不明の鉄製品のみで、遺構の時期を特定できる遺物はない。中世の造成面に位置することから、これらの時期は中世以降と判断した。

(1) 帯曲輪

小学校跡地の南側斜面部に位置し、現況で3段の細長い平坦面が確認できる。造成の過程については、第1節で詳述したとおりである。

(2) 竪穴状遺構(SK I)

B区中段東側で1基、C区で2基検出した。C区に位置するSK I 226・270は、平面形・規模・主軸がほぼ同じであり、主軸については同じくC区に位置する掘立柱建物跡・柱穴列とも近似する。SK I 168(第15図、図版8)

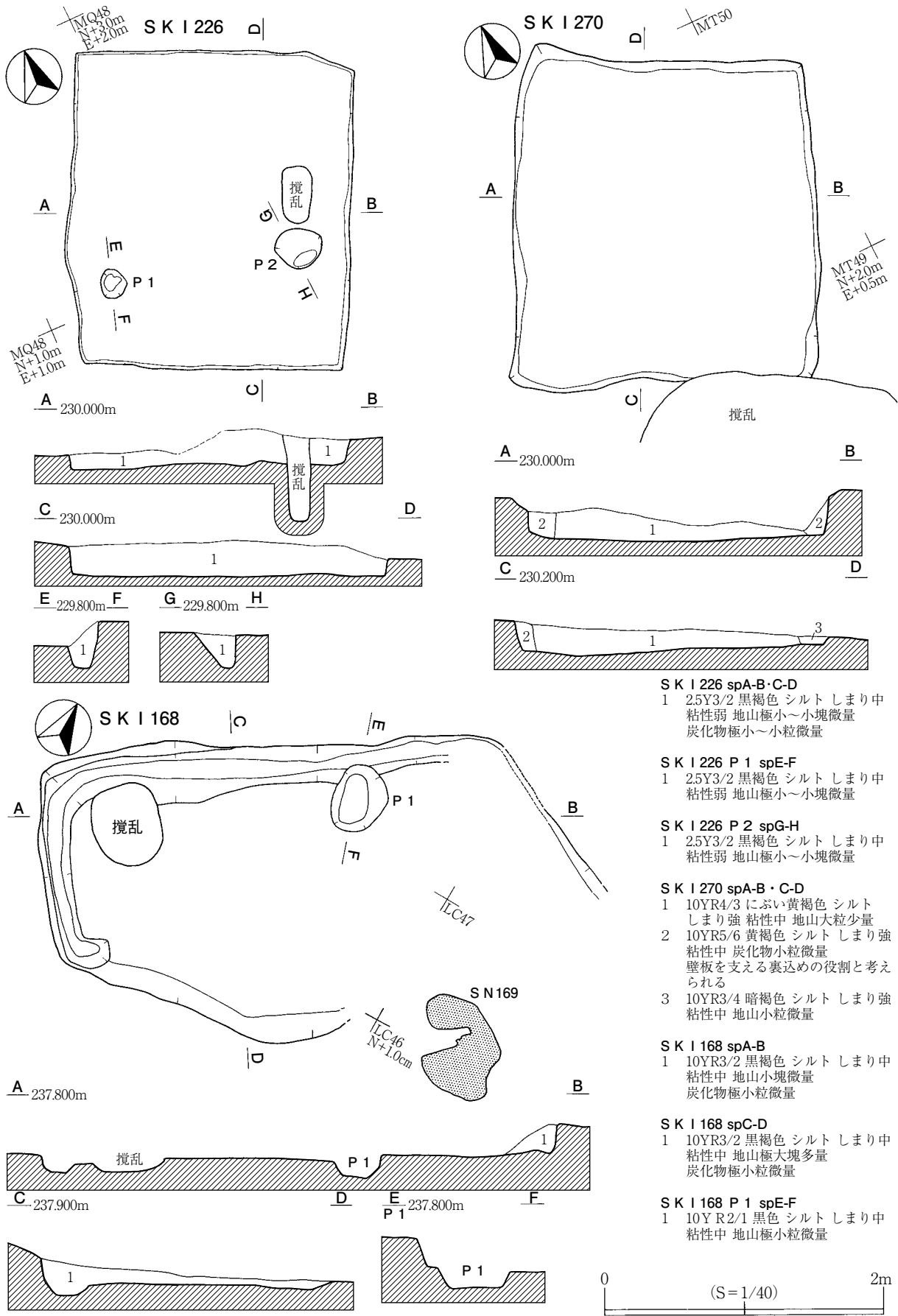
B区中段MP 48の、I層直下のⅦ層上面で北西・南西壁の輪郭を確認した。南東側は削平されて失われているが、平面形は隅丸長方形と推定される。規模は残存値で長軸3.66m、短軸1.98m、深さ0.20mで、主軸はN—60°—Wである。北西・南西壁に沿って壁溝がある。覆土は単層で黒褐色土を主体とし、Ⅶ層由来土のブロックと炭化物を含む。SN 169と重複しているが、本遺構の覆土が削平されている部分であるため新旧関係は不明である。北西壁際床面にP 1が位置し、規模は長軸0.48m、短軸0.38m、深さ0.12mである。覆土は単層で、竪穴部分より黒い土を主体とする。

SK I 226(第15図、図版9～11)

C区MP 48の、I層直下のⅥ層上面で長方形の平面形を確認した。規模は長軸2.25m、短軸2.05m、深さ0.20mで、主軸はN—65°—Eである。覆土は単層で、Ⅵ層に由来する黒褐色土を主体とし、Ⅶ層由来のブロックと炭化物を少量含む。SK 261と重複し、本遺構が新しい。1層の上位から、近世の香炉の破片が出土した。床面にP 1・2があり、P 1の規模は長軸0.20m、短軸0.18m、深さ0.25m、P 2の規模は長軸0.30m、短軸0.28m、深さ0.23mである。覆土は単層で、竪穴部分とほぼ同様であることから、竪穴と同時に埋没したと推定される。

SK I 270(第15図、図版11)

C区MS・MT 49・50の、I層直下のⅦ層上面で長方形の平面形を確認した。規模は長軸2.50m、短軸2.20m、深さ0.25m、主軸はN—64°—Eである。覆土は3層に分層され、1層はⅦ層に由来するにぶい黄褐色土のブロックを主体とし、一括埋め戻しと判断される。2・3層はⅥ・Ⅶ層由来のブロックを主体とし、壁際に堆積していることから、壁板の裏込めと推定される。SB 550 P 1・SK P 545と重複し、本遺構が新しい。南壁の一部は、近現代に桶を埋設した痕跡により攪乱されている。



第15図 中世以降の遺構① (SK I 168・226・270)

(3) 掘立柱建物跡(SB)

B区下段で2棟、C区で4棟検出した。すべて中世や近現代の造成により削平を受けた場所にあり、I層直下のⅦ層上面で確認した。3間×2間程と1間×1間程のものが1棟ずつ近接もしくは重複した位置関係で見ついている。C区で検出したSB 549・550・559・560の主軸は、同じくC区の竪穴状遺構SKI 226・270、柱穴列と近似する。以下の記述について、長軸は柱の芯心距離、短軸は長軸壁の距離を計測した結果である。掘立柱建物跡の範囲内にあるが柱穴と直接重複していない柱穴様ピットは、新旧関係が不明なため割愛した。

SB 463(第16図、第7表、図版5)

B区下段LR～LT 47・48のⅦ層上面で確認した、9基の柱穴で構成されている。図面上で柱穴様ピットの位置関係から掘立柱建物跡と判断した。3間×2間の側柱のみの建物で、南隅にあたる柱穴は確認できなかった。規模は長軸4.34m、短軸3.35m、主軸はN-49°-Wである。SB 464と重複しているが、新旧関係は不明である。

SB 464(第16図、第7表、図版5)

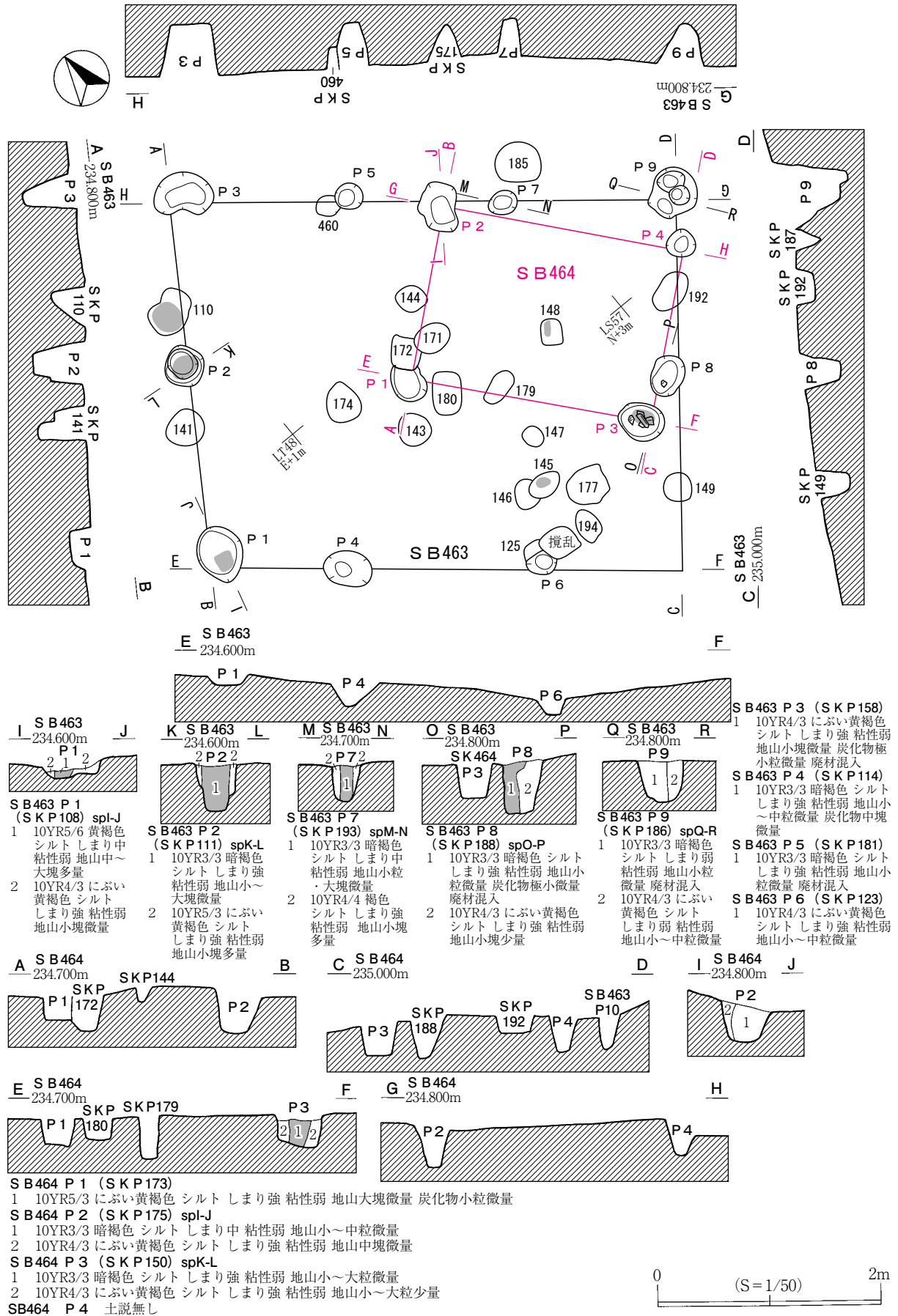
B区下段LR・LS 47・48のⅦ層上面で確認した、4基の柱穴で構成されている。図面上で柱穴様ピットの位置関係から掘立柱建物跡と判断した。1間×1間で、規模は長軸2.20m、短軸1.65m、主軸はN-40°-Wである。SB 463と重複しているが、新旧関係は不明である。

SA 558は、本遺構の北西壁と平行に位置することから、本遺構の目隠し塀と推定される。

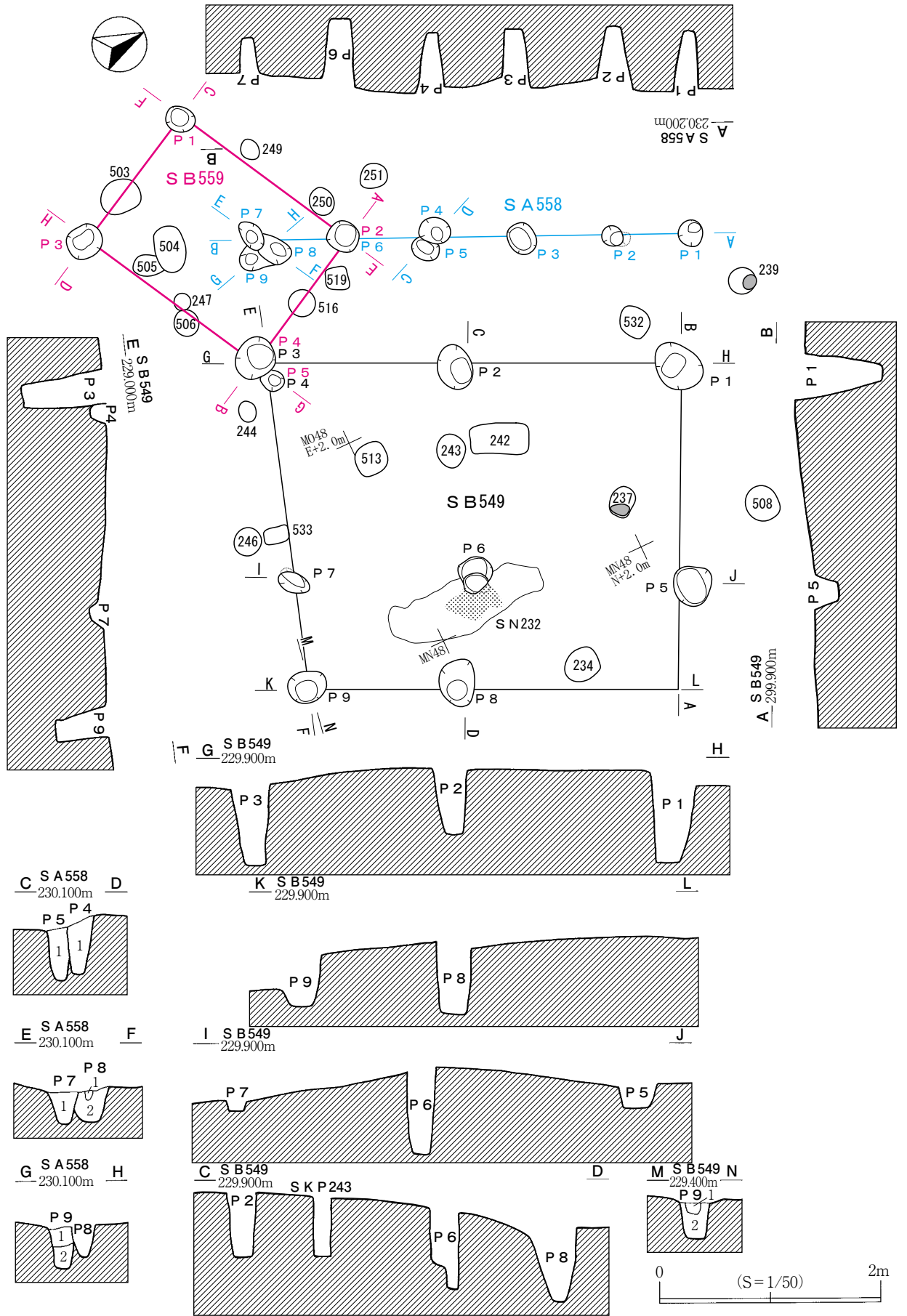
第7表 SB 463・464 柱穴一覧

SB 463	旧番号	層位	グリッド	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	底面標高 (m)	備 考
P 1	SKP108	Ⅶ層上面	LS・LT47	0.53	0.39	0.14	234.25	柱痕を平断面で確認した。柱痕底面標高234.24m。2層から鉄製品1点出土。
P 2	SKP111	Ⅶ層上面	LS48	0.39	0.37	0.41	234.23	柱痕を平断面で確認した。柱痕底面標高234.10m。
P 3	SKP158	Ⅶ層上面	LS48	0.55	0.34	0.46	234.18	
P 4	SKP114	Ⅶ層上面	LS47	0.42	0.31	0.18	234.09	
P 5	SKP181	Ⅶ層上面	LS48	0.26	0.25	0.39	234.17	SKP 460より新しい。
P 6	SKP123	Ⅶ層上面	LS47	(0.23)	(0.22)	0.15	234.02	攪乱より古く、SKP 125より新しい。
P 7	SKP193	Ⅶ層上面	LS48	0.27	0.21	0.31	234.16	
P 8	SKP188	Ⅶ層上面	LR・LS47	0.36	0.32	0.47	234.22	柱痕を平断面で確認した。柱痕底面標高234.13m。
P 9	SKP186	Ⅶ層上面	LR47	0.46	0.43	0.36	234.22	柱痕を平断面で確認した。柱痕底面標高234.15m。底面標高234.68m。

SB 464	旧番号	層位	グリッド	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	底面標高 (m)	備 考
P 1	SKP173	Ⅶ層上面	LS47	(0.32)	0.28	0.24	234.26	SKP 171、SKP 172より古い。1層から陶磁器片1点、鉄製品1点出土。
P 2	SKP175	Ⅶ層上面	LS48	0.48	0.36	0.36	234.17	
P 3	SKP150	Ⅶ層上面	LS47	0.43	0.34	0.30	324.28	柱痕を平断面で確認した。柱痕底面標高234.28m。
P 4	SKP187	Ⅶ層上面	LR47	0.27	0.23	0.32	234.28	底面標高234.68m。

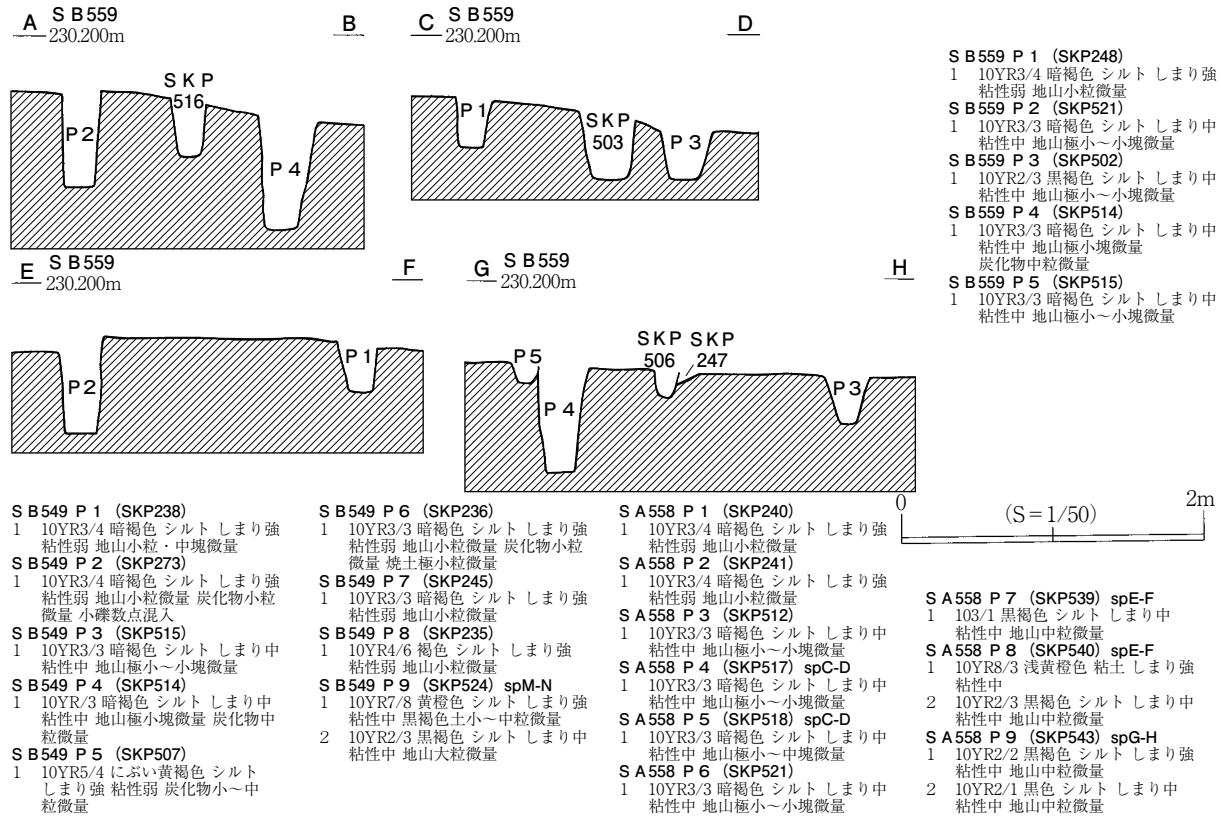


第16図 中世以降の遺構② (S B 463・464)



第17図 中世以降の遺構③ (S B 549・559、S A 558)

第4章 調査の記録



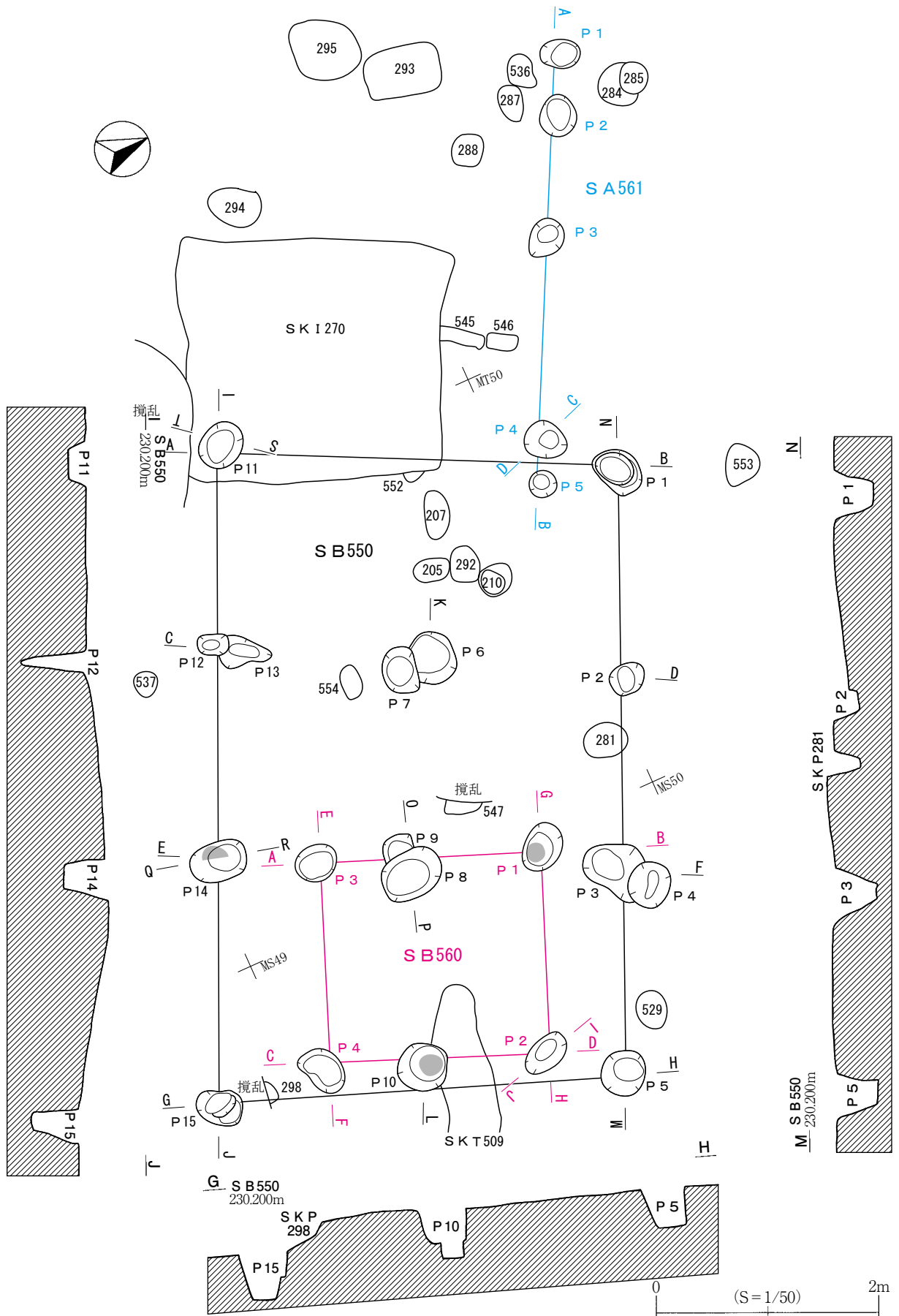
第18図 中世以降の遺構④ (S B 549・559、S A 558)

第8表 S B 549・559、S A 558 柱穴一覧

S B 549	旧番号	層位	グリッド	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	底面標高 (m)	備考
P 1	SKP238	Ⅶ層上面	MN48	0.48	0.36	0.52	229.18	
P 2	SKP273	Ⅶ層上面	MN48	0.42	0.33	0.34	229.44	
P 3	SKP515	Ⅶ層上面	MN47	0.40	0.34	0.64	229.00	S K P 514 より新しい。
P 4	SKP514	Ⅶ層上面	MN47	(0.18)	0.18	0.12	229.56	S K P 515 より古い。
P 5	SKP507	Ⅶ層上面	MM48	0.38	0.36	0.21	229.36	
P 6	SKP236	Ⅶ層上面	MN48	0.35	0.30	0.65	228.98	S N 232 より新しい。
P 7	SKP245	Ⅶ層上面	MN47	0.30	0.18	0.05	229.30	
P 8	SKP235	Ⅶ層上面	MM47・48	0.43	0.33	0.54	228.79	
P 9	SKP524	Ⅶ層上面	MN47	0.34	0.27	0.33	228.86	

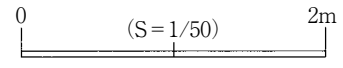
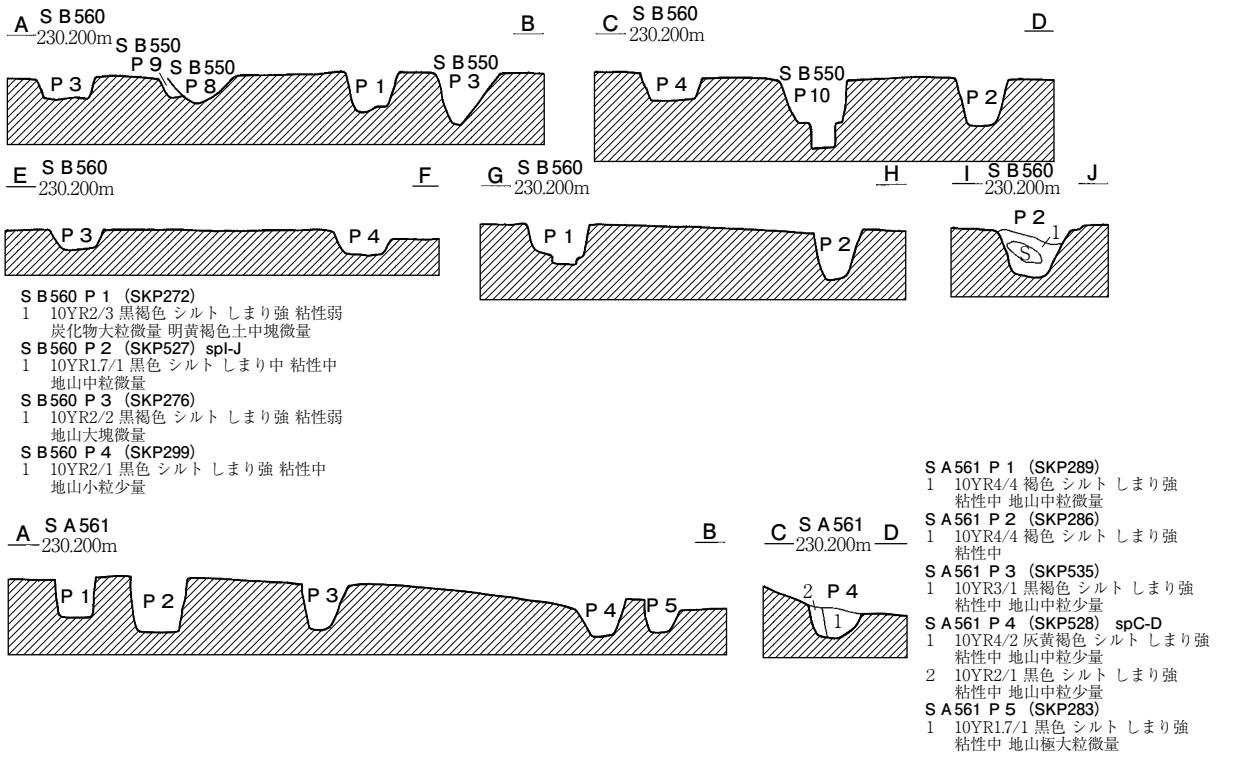
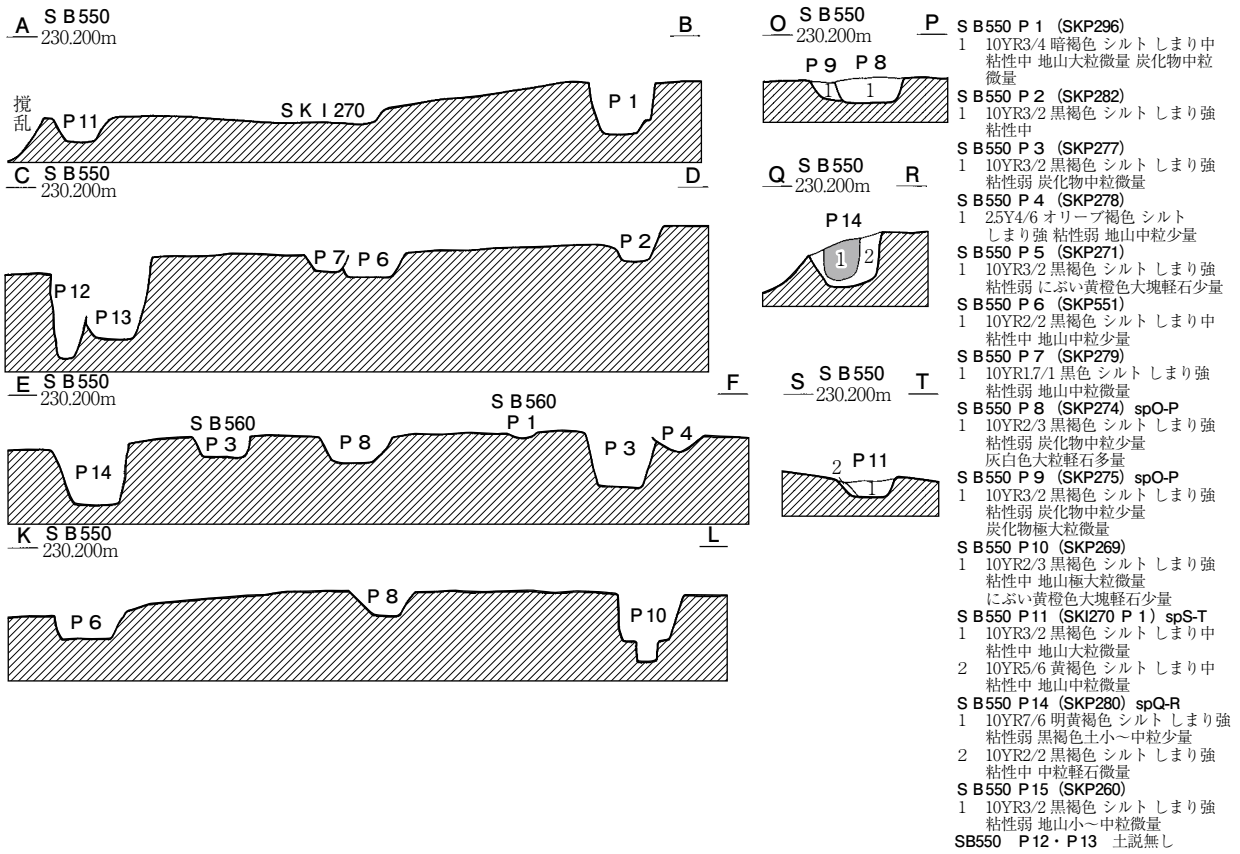
S B 559	旧番号	層位	グリッド	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	底面標高 (m)	備考
P 1	SKP248	Ⅶ層上面	MN47	0.28	0.23	0.27	229.49	
P 2	SKP521	Ⅶ層上面	MN48	0.28	0.27	0.56	229.20	
P 3	SKP502	Ⅶ層上面	MO47	0.35	0.33	0.24	229.31	
P 4	SKP514	Ⅶ層上面	MN47	(0.18)	0.18	0.12	229.56	S K P 515 より古い。
P 5	SKP515	Ⅶ層上面	MN47	0.40	0.34	0.64	229.00	S K P 514 より新しい。

S A 558	旧番号	層位	グリッド	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	底面標高 (m)	備考
P 1	SKP240	Ⅶ層上面	MN48	0.25	0.23	0.52	229.35	1層から廃材出土。
P 2	SKP241	Ⅶ層上面	MN48	0.20	0.18	0.52	229.37	
P 3	SKP512	Ⅶ層上面	MN48	0.28	0.25	0.44	229.38	1層から鉄製品1点出土。
P 4	SKP517	Ⅶ層上面	MN48	0.29	0.24	0.47	229.36	S K P 518 より新しい。
P 5	SKP518	Ⅶ層上面	MN48	0.25	(0.17)	0.48	229.30	S K P 517 古い。
P 6	SKP521	Ⅶ層上面	MN48	0.28	0.27	0.56	229.20	
P 7	SKP539	Ⅶ層上面	MO47・48	0.28	0.18	0.29	229.38	S K P 540、S K P 543 より新しい。
P 8	SKP540	Ⅶ層上面	MN48	(0.28)	0.20	0.28	229.39	S K P 539 より古く、S K P 543 より新しい。
P 9	SKP543	Ⅶ層上面	MN47	(0.20)	0.23	0.38	229.29	S K P 539、S K P 540 より古い。



第19図 中世以降の遺構⑤ (S B 550・560、S A 561)

第4章 調査の記録



第20図 中世以降の遺構⑥ (S B550・560、S A561)

第9表 S B 550・560、S A 561 柱穴一覧

S B 550	旧番号	層位	グリッド	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	底面標高 (m)	備考
P 1	SKP296	Ⅶ層上面	MS50	0.45	0.35	0.21	229.55	
P 2	SKP282	Ⅶ層上面	MS50	0.34	0.28	0.17	229.70	
P 3	SKP277	Ⅶ層上面	MR49	(0.45)	0.48	0.36	229.58	S K P 278 より古い。
P 4	SKP278	Ⅶ層上面	MR49	0.40	0.37	0.19	229.72	S K P 277 より新しい。1層から寛永通宝1点、鉄製品1点、陶磁器片6点出土
P 5	SKP271	Ⅶ層上面	MR49	0.43	0.40	0.27	229.64	
P 6	SKP551	Ⅶ層上面	MS49	0.49	0.37	0.21	229.60	S K P 279 より古い。
P 7	SKP279	Ⅶ層上面	MS49	0.44	0.35	0.17	229.64	S K P 551 より新しい。
P 8	SKP274	Ⅶ層上面	MS49	0.57	0.41	0.17	229.73	S K P 275 新しい。1層から寛永通宝1点出土
P 9	SKP275	Ⅶ層上面	MS49	0.29	(0.16)	0.12	229.77	S K P 274 より古い。
P 10	SKP269	Ⅶ層上面	MR49	0.48	0.45	0.33	229.53	S K T 509 より新しい。柱痕を底面形状で確認した。柱痕底面標高229.45m。
P 11	SKI270P1	SKI270 床面	MT49	0.45	0.38	0.12	229.51	S K I 270 より古い。
P 12	SKP541	Ⅶ層上面	MS49	0.27	0.19	0.53	229.07	S K P 542 より新しい。
P 13	SKP542	Ⅶ層上面	MS49	(0.41)	0.30	0.57	229.16	S K P 541 より古い。
P 14	SKP280	Ⅶ層上面	MS49・50	0.50	0.31	0.27	229.55	柱痕を断面で確認した。柱痕底面標高229.58m。2層から石器1点出土
P 15	SKP260	Ⅶ層上面	MR48	0.42	0.32	0.39	229.18	

S B 560	旧番号	層位	グリッド	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	底面標高 (m)	備考
P 1	SKP272	Ⅶ層上面	MR49	0.45	0.33	0.24	229.74	柱痕を底面形状で確認した。柱痕底面標高229.66m。
P 2	SKP527	Ⅶ層上面	MS49	0.38	0.33	0.12	229.79	
P 3	SKP276	Ⅶ層上面	MR49	0.45	0.25	0.28	229.58	
P 4	SKP299	Ⅶ層上面	MR49	0.43	0.30	0.11	229.75	

S A 561	旧番号	層位	グリッド	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	底面標高 (m)	備考
P 1	SKP289	Ⅶ層上面	MT50	0.38	0.26	0.23	229.76	
P 2	SKP286	Ⅶ層上面	MT50	0.40	0.35	0.35	229.61	
P 3	SKP535	Ⅶ層上面	MT50	0.39	0.28	0.21	229.68	
P 4	SKP528	Ⅶ層上面	MS50	0.38	0.33	0.19	229.58	
P 5	SKP518	Ⅶ層上面	MN48	0.48	0.23	0.16	229.62	

S B 549(第17・18図、第8表、図版9)

C区MM・MN 47・48のⅦ層上面で確認した、9基の柱穴で構成されている。現場で柱穴の位置関係から掘立柱建物跡と判断した。2間×2間の総柱の建物で、東隅にあたる柱穴は確認できなかった。規模は長軸3.78m、短軸2.93m、主軸N—64°—Eである。S B 559と重複しているが、P 3(S B 559 P 4)とP 4(S B 559 P 5)のどちらが本遺構に属する柱穴か、および本遺構との新旧関係は不明である。P 6はS N 232と重複しており、本遺構が古い。各柱穴の詳細は第8表の柱穴一覧に記載。S B 550(第19・20図、第9表、図版5)

C区MR～MT 48～50のⅦ層上面で確認した、15基の柱穴で構成されている。現場で柱穴の位置関係から掘立柱建物跡と判断した。3間×2間で、規模は長軸5.94m、短軸3.63m、主軸N—67°—Eである。S B 560・S A 558と重複しているが、新旧関係は不明である。各柱穴の詳細は第9表の柱穴一覧に記載した。

S B 559(第17・18図、第8表)

C区MN・MO 47・48のⅦ層上面で確認した、5基の柱穴で構成されている。図面上で柱穴の位置関係から掘立柱建物跡と判断した。1間×1間で、規模は長軸1.91m、短軸1.38m、主軸N—67°—Wである。S B 549と重複しているが、P 4(S B 549 P 3)とP 5(S B 549 P 4)のうち本遺構に

属するのはどちらか、および本遺構との新旧関係は不明である。P 2とS A 558 P 6がどちらの遺構に属するか、および新旧関係は不明である。各柱穴の詳細は第8表の柱穴一覧に記載した。

S B 560(第19・20図、第9表、図版5)

C区MR・MS 49のⅦ層上面で確認した、4基の柱穴で構成されている。図面上で柱穴様ピットの位置関係から掘立柱建物跡と判断した。1間×1間で、規模は長軸2.04 m、短軸1.86 m、主軸N—67°—Eである。S B 550と重複している。各柱穴の詳細は第9表の柱穴一覧に記載した。

(4) 柱穴列(S A)

B区下段中央部北側で2列、C区で2列を検出した。すべて中世や近現代の造成により削平を受けた場所にあり、I層直下のⅦ層上面で確認した。B区に位置するS A 465・466は、下段から中段への斜面際にあり、主軸が斜面と平行していることから土留め柵の可能性が考えられるほか、本遺構の南側は近現代の攪乱を受けていることから、本来は掘立柱建物だったが構成する柱穴が確認できなかった可能性もある。C区に位置するS A 558はS B 549の、S A 561はS K I 270の壁に平行する位置にあることから、建物に伴う目隠し塀と推定される。中世に造成面と推定される位置にあることから、これらの時期は中以下の記述において、柱穴間の距離は芯心距離を計測した結果である。

S A 465(第21図、第11表、図版4)

B区下段LM・LN 46のⅦ層層上面で確認した、6基の柱穴で構成されている。図面上で柱穴様ピットの位置関係から、柱穴列と判断した。P 1からP 6までの距離は5.60 m、主軸はN—83°—Wである。P 5とP 6は重複しており、どちらかが別遺構か、立替の痕跡の可能性がある。S A 466とほぼ平行で、近接した位置にある。各柱穴の詳細は第11表の柱穴一覧に記載した。

S A 466(第21図、第11表、図版4)

B区下段LM・LN 45・46のⅦ層層上面で確認した、6基の柱穴で構成されている。図面上で柱穴様ピットの位置関係から、柱穴列と判断した。P 1からP 6までの距離は5.97 m、主軸はN—76°—Wである。S A 465とほぼ平行で、近接した位置にある。各柱穴の詳細は第11表の柱穴一覧に記載した。

S A 558(第17・18図、第8表、図版9)

C区MN 47のⅦ層上面で確認した、9基の柱穴で構成されている。現場で柱穴の位置関係から、柱穴列と判断した。P 1からP 6までの距離は5.97 m、主軸はN—65°—Eである。S A 465とほぼ平行で、近接した位置にある。各柱穴の詳細は第8表の柱穴一覧に記載した。

S A 561(第19図、第9表、図版5)

C区MS・MT 50のⅦ層上面で確認した、5基の柱穴で構成されている。図面上で柱穴様ピットの位置関係から、柱穴列と判断した。P 1からP 6までの距離は3.92 m、主軸はN—63°—Wである。S B 560と重複しているが、新旧関係は不明である。

(5) 焼土遺構(S N)

B区中段・下段・C区でそれぞれ1基確認した。かまどの構築土や配石は確認できなかった。

S N 116(第22図)

B区下段MC 49に位置する。遺構上面は近現代の宅地造成により攪乱されており、I層直下のⅢ層上面で確認した。規模は、長軸1.36 m、短軸0.92 m、被熱の深さは3 cmである。断面は2層に

分かれ、1層は2層を基とし被熱によって赤く変色した部分、2層は基本土層Ⅲ層に対応する堆積土だが非常に浅く、盛土ではなく削平部分に残存した土である。

S N 169(第22図、図版8)

B区中段LB 46のⅦ層上面で確認した。規模は、長軸0.80 m、短軸0.57 m、被熱の深さは4 cmである。Ⅶ層が直接被熱によって赤く変色している。

S N 232(第22図、図版12)

C区MM・MN 47・48に位置する。基本土層Ⅳ層に対応すると推定される黒色土の攪乱の上で確認した。規模は、長軸0.48 m、短軸0.34 m、被熱の深さは4 cmである。断面は2層に分かれ、1層は2層を基とし被熱によって赤く変色した部分、2層は不整形な攪乱の中に堆積した黒色土で、基本土層Ⅳ層に対応する。S B 54 P 1と重複し、本遺構の方が新しい。

(6)溝状遺構(S D)

B区中段で4基を検出した。

S D 163(第22図)

LB 46のⅦ層上面で確認した。規模は、残存部分で長軸1.43 m、短軸0.23 m、深さ0.07 mである。覆土は単層で、混入物の少ない黒褐色土を主体とすることから自然堆積と推定される。S K P 461より古い。

S D 167(第22図)

LD 44・45のⅦ層上面で確認した。規模は、長軸1.42 m、短軸0.21 m、深さ0.05 mである。覆土は単層で、ブロック上のⅥ層由来土を主体とすることから、人為的に埋め戻されたと判断される。

S D 367(第22図、付図2)

L K～L O 48～50のⅦ層上面で確認した。東西両端は攪乱され確認できなかった。規模は、残存部分の進展長で長軸11.53 m、短軸は最大幅で0.71 m、深さ0.10 mである。覆土は単層で、混入物の少ない暗褐色土を主体とすることから、自然堆積と推定される。中段から上段へ向かう斜面際に位置する。S D 369と重複しており、本遺構が古い。

S D 369(第22図、付図2)

LL～LN 48～50のⅦ層上面で確認した。東西両端は攪乱され確認できなかった。規模は、残存部分で長軸9.04 m、短軸0.87 m、深さ0.16 mである。覆土は単層で、グライ化しているが元は混入物の少ない黒色土を主体としており、自然堆積と推定される。S D 367と重複しており、本遺構が新しい。

(7)土坑(S K)

B区中段でS K 426・432・436・440・445・451の6基を、B区下段でS K 112・131・132・200・322・343を検出した(第23図)。12基中9基は長短軸0.6 m前後の円形に近い土坑である。S K 112・451・426・445は他の9基より規模が大きく楕円形の土坑である。S K 112・S K 440は塩ビ管埋設など近現代の掘削によって、S K 445は上面が削平によって攪乱されており、S K 112・445は確認時点で覆土がほとんど残っていなかったため、堆積状況は不明である。S K 343とS K 426の2・3層はⅦ層由来土のブロックを多量に含むことから人為堆積と判断される。その他は混入物の少ない黒色土を主体としており、自然堆積の可能性が高いと推定される。

S K 112 は底面から漆器の漆膜部分が出土したが、木質部は完全に不朽しており、漆膜の残存状態も悪く、器種・時代は特定できない。

S K 426 と S K 445 は重複しており、S K 426 の方が古い。

第10表 中世以降の土坑一覧

挿図番号	種別	層位	グリッド	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	備考
23	S K 112	Ⅶ層上面	LQ47	1.01	0.56	0.43	攪乱より古い。漆器1点出土。
23	S K 131	Ⅶ層上面	MA47	0.67	0.61	0.17	
23	S K 132	Ⅶ層上面	MA47	0.59	0.55	0.29	
23	S K 200	Ⅶ層上面	LQ・LR46	0.57	0.50	0.12	
23	S K 322	Ⅶ層上面	LO46	0.53	0.46	0.18	
23	S K 343	Ⅶ層上面	LN45	0.75	0.59	0.28	
23	S K 426	Ⅶ層上面	LR・LS51	1.07	(1.39)	0.40	S K 445 より古い。
23	S K 432	Ⅶ層上面	LQ・LR51	0.68	0.50	0.18	
23	S K 436	Ⅶ層上面	LT51	0.58	0.33	0.26	
23	S K 440	Ⅶ層上面	LQ50	0.72	(0.47)	0.18	攪乱より古い。
23	S K 445	Ⅶ層上面	LR・LS51	2.56	1.58	0.13	S K 426 より新しい。
23	S K 451	Ⅶ層上面	LR49・50	2.09	0.81	0.21	

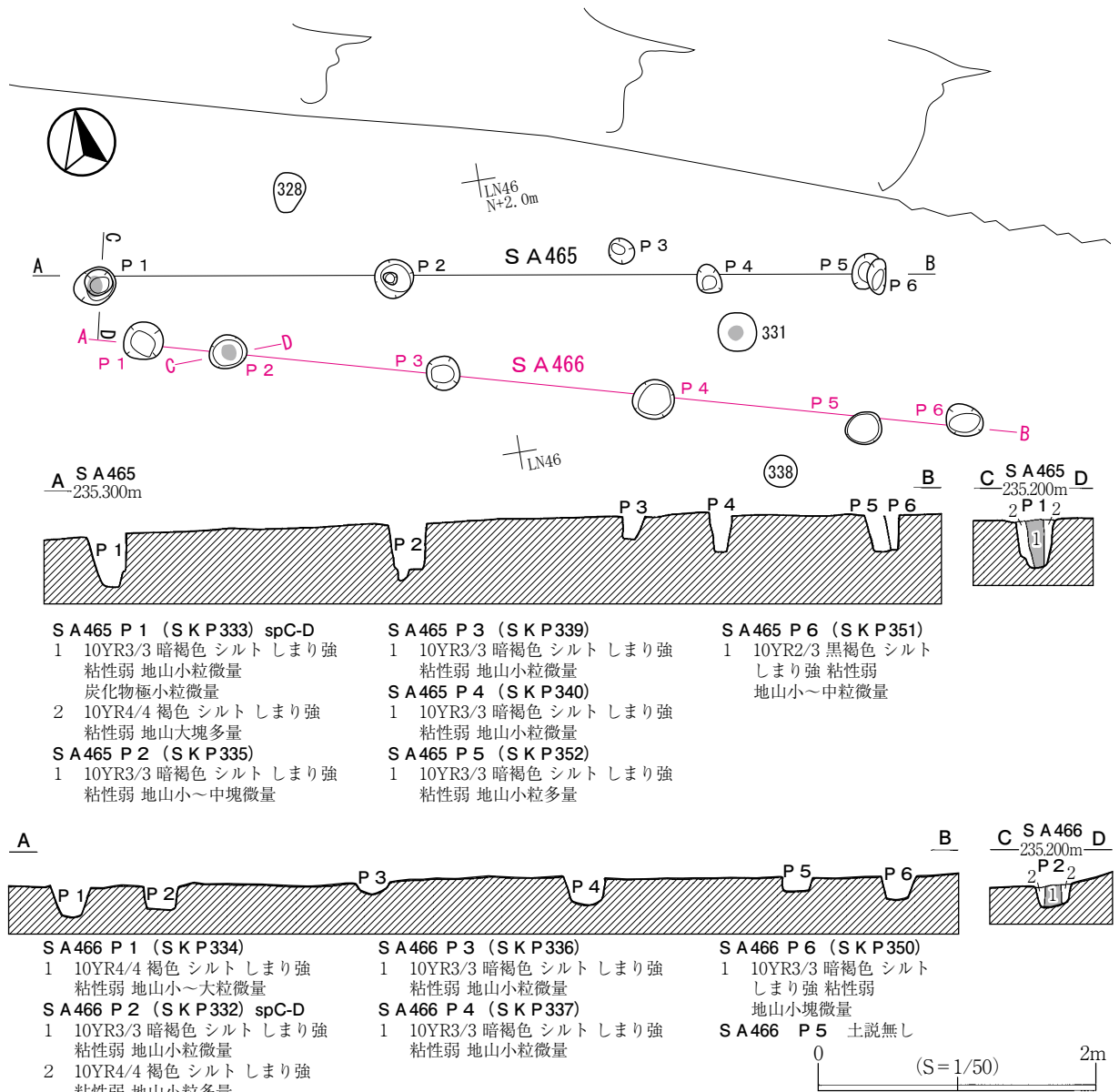
(8) 性格不明遺構 (S X)

S X 447(第24図、図版8)

LP48・49のⅥ層上面で確認した。平面形は楕円形だが、現地形が南へ傾斜しているために底面がⅥ層に届いていない部分があり、正確な全体の形を確認することはできなかった。規模は、残存部分で長軸4.20 m、短軸0.88 m、深さ0.81 mである。覆土は単層で混入物の少ない暗褐色土を主体としており、自然堆積と推定される。土層断面図 spE-F で2層としている部分は、本遺構の掘り込みではなく水の浸透により土が変色した部分である。

(9) 柱穴様ピット (S K P)

B区・C区で251基を検出した(付図2・第12～15表)。ほとんどが帯曲輪の平坦面に位置しており、斜面部で検出したのはS K P 170・330の2基のみである。B区下段のLG～LL 44・45に位置する柱穴様ピット群は、一直線上ではないが、帯曲輪と平行する方向に並んで分布する傾向があり、目隠し塀もしくは土留め柵を構成する柱穴であった可能性が考えられる。

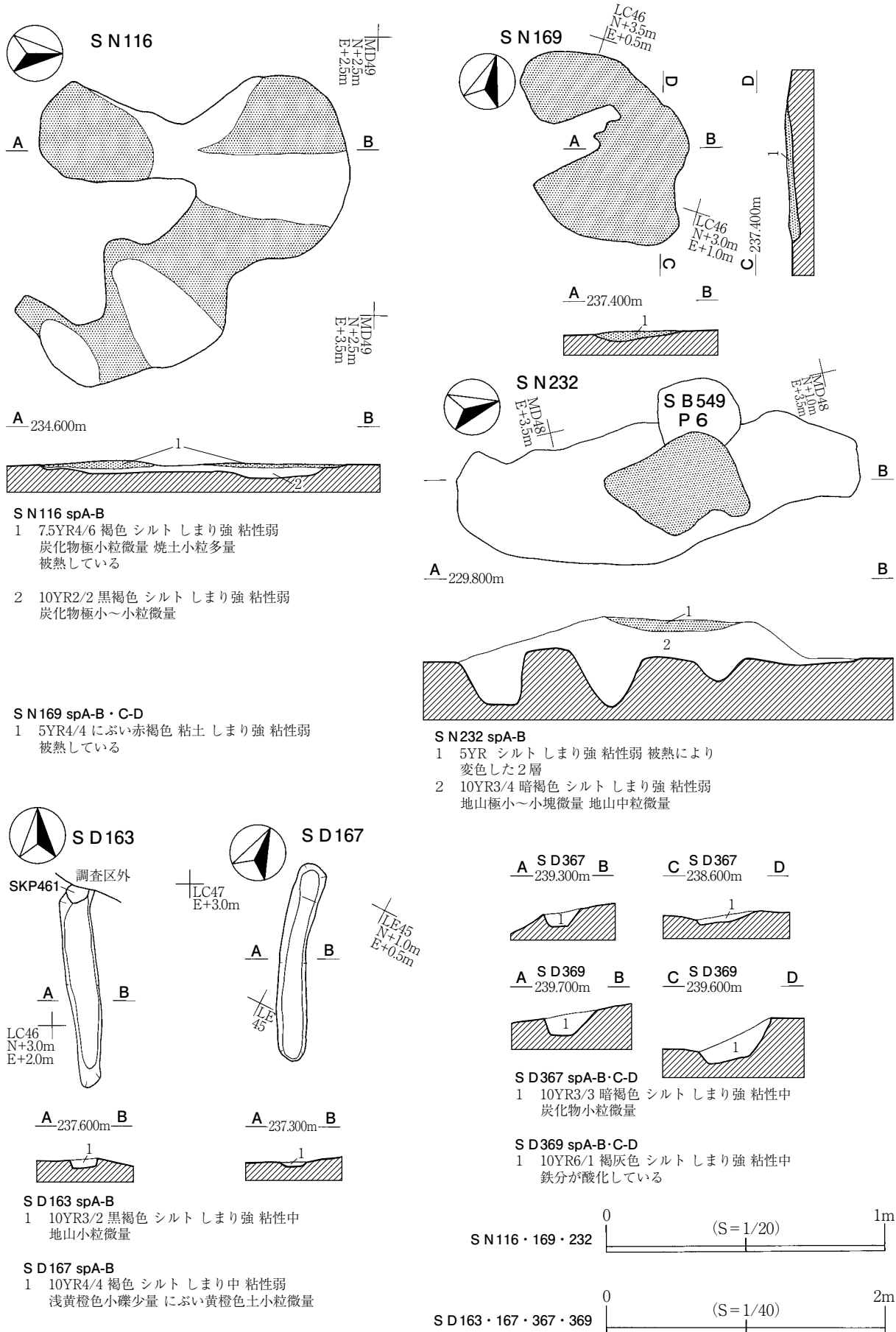


第21図 中世以降の遺構⑦ (S A 465・466)

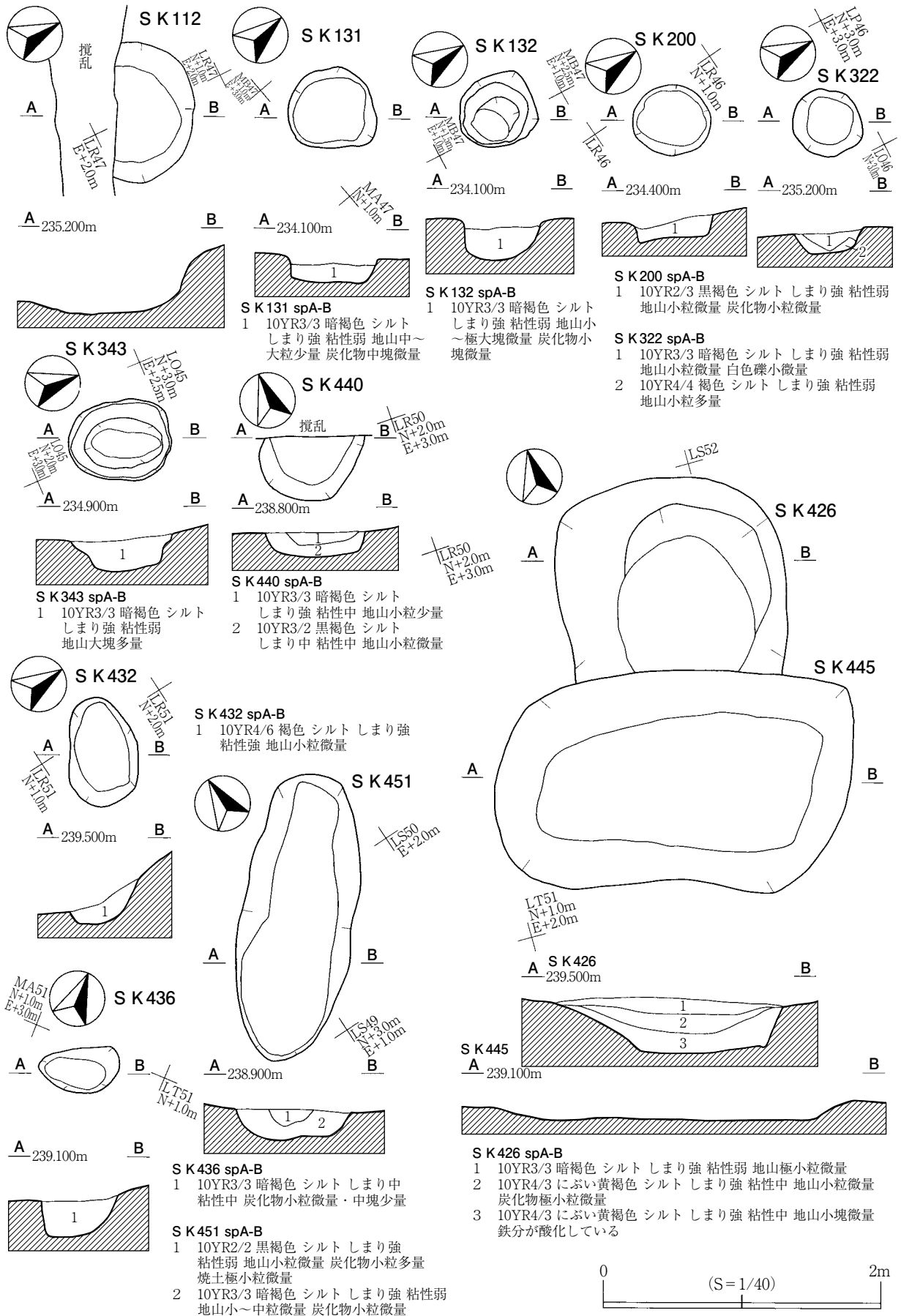
第11表 SA 465・466 柱穴一覧

SA 465	旧番号	層位	グリッド	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	底面標高 (m)	備考
P 1	SKP333	Ⅶ層上面	LN46	0.31	0.26	0.35	234.72	柱痕を平断面で確認した。柱痕底面標高234.78m。
P 2	SKP335	Ⅶ層上面	LN46	0.30	0.28	0.40	234.71	柱痕を底面形状で確認した。柱痕底面標高234.64m。
P 3	SKP339	Ⅶ層上面	LM46	0.19	0.17	0.15	234.94	
P 4	SKP340	Ⅶ層上面	LM46	0.22	0.18	0.18	234.83	
P 5	SKP352	Ⅶ層上面	LM46	0.27	(0.11)	0.21	234.84	P 6より古い。
P 6	SKP351	Ⅶ層上面	LM46	0.26	0.08	0.23	234.85	P 5より新しい。

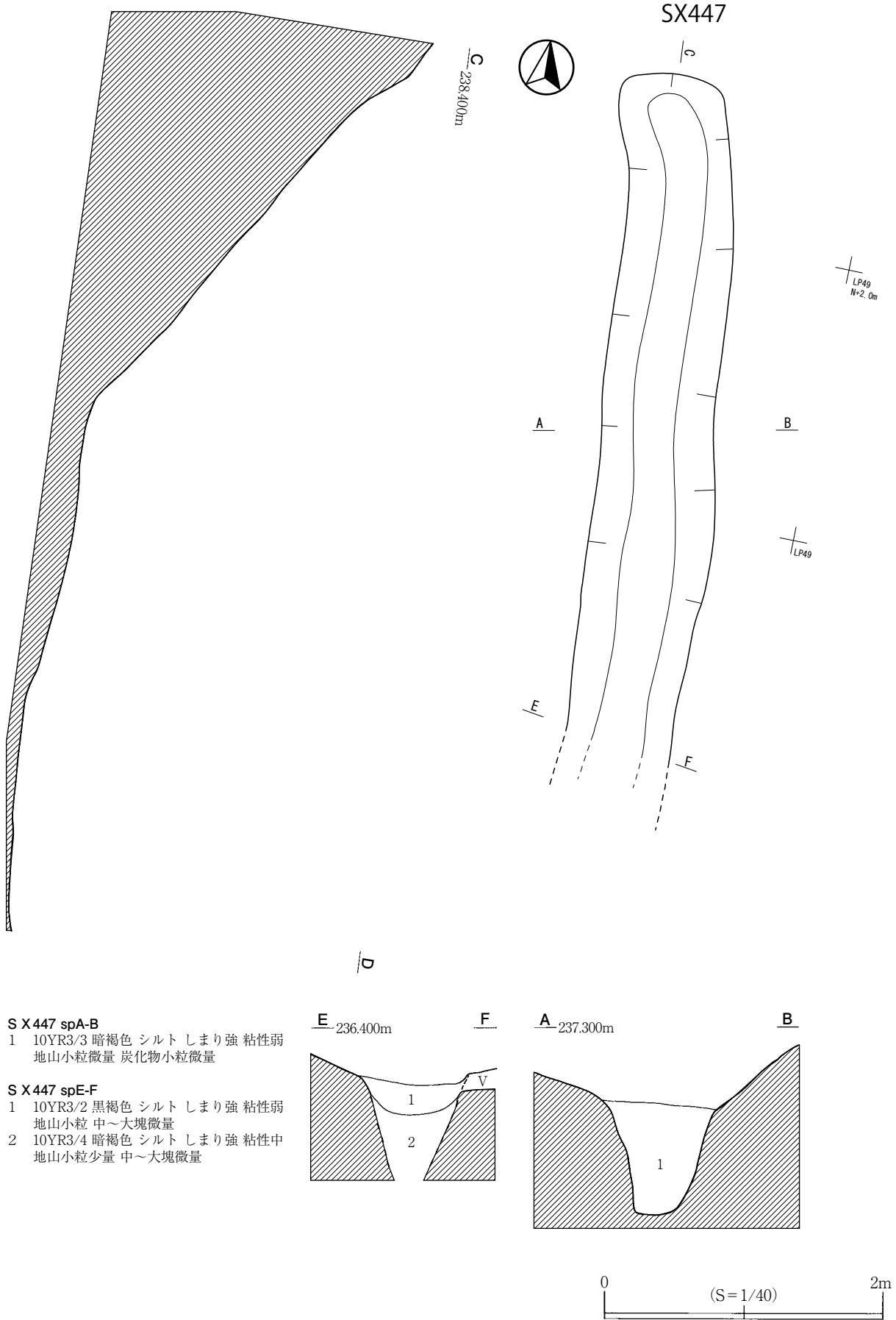
SA 446	旧番号	層位	グリッド	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	底面標高 (m)	備考
P 1	SKP334	Ⅶ層上面	LN46	0.29	0.26	0.20	234.73	
P 2	SKP332	Ⅶ層上面	LN46	0.27	0.25	0.15	234.78	柱痕を平断面で確認した。柱痕底面標高234.78m。
P 3	SKP336	Ⅶ層上面	LN46	0.25	0.25	0.14	234.90	
P 4	SKP337	Ⅶ層上面	LM46	0.30	0.28	0.15	234.83	
P 5	SKP411	Ⅶ層上面	LM45	0.27	0.23	0.30	234.90	
P 6	SKP350	Ⅶ層上面	LM45	0.28	0.23	0.17	234.85	



第22図 中世以降の遺構⑧ (SN116・169・232、SD163・167・367・369)



第23図 中世以降の遺構⑨ (SK112・131・132・200・322・343・426・432・436・440・445・451)



S X 447 spA-B

- 1 10YR3/3 暗褐色 シルトしまり強 粘性弱
地山小粒微量 炭化物小粒微量

S X 447 spE-F

- 1 10YR3/2 黒褐色 シルトしまり強 粘性弱
地山小粒 中~大塊微量
- 2 10YR3/4 暗褐色 シルトしまり強 粘性中
地山小粒少量 中~大塊微量

第24図 中世以降の遺構⑩ (S X 447)

第12表 中世以降の柱穴様ピット一覧①

SKP 番号	層位	グリッド	長 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	底面標高 (m)	備 考	地区
104	Ⅶ層上面	LH44	0.25	0.23	0.55	234.02	1層。	B下
105	Ⅲ層	LT46	0.66	0.51	0.37	233.60	3層。柱痕を平断面で確認、底面標高 233.57m。	B下
106	Ⅲ層	LT46	0.64	0.62	0.31	233.93	2層。柱痕を平断面で確認、底面標高 233.68m。	B下
109	Ⅶ層上面	LT48	0.40	0.37	0.15	234.46	2層。柱痕を平断面で確認。	B下
110	Ⅶ層上面	LS48	0.43	0.34	0.49	234.37	2層。1層で小礫微量、鉄分が酸化している。柱痕を平断面で確認、H 234.17m。	B下
113	Ⅶ層上面	LT47	0.40	0.32	0.24	233.90		B下
115	Ⅶ層上面	LT47	0.33	0.27	0.20	233.91	S K P 119 より新しい。2層。1層で廃材混入。柱痕を平断面で確認。	B下
119	Ⅶ層上面	LT47	0.38	0.18	0.23	233.91	S K P 115 より古い。1層。	B下
120	Ⅶ層上面	LT47	0.28	0.20	0.31	233.90	S K P 121 より新しい。1層。	B下
121	Ⅶ層上面	LT47	0.23	(0.15)	0.29	233.92	S K P 120 より古い。1層	B下
125	Ⅶ層上面	LS47	(0.23)	(0.12)	0.19	234.03	攪乱・S B 463 P 6 より古い。1層。	B下
126	Ⅲ層	LS・LT46	0.64	0.63	0.27	233.63	2層。柱痕を平断面で確認。	B下
127	Ⅲ層	LT46	0.37	0.35	0.30	233.61	1層。S K P 128 より新しい。	B下
128	Ⅲ層	LT46	0.41	(0.24)	0.26	233.68	1層。S K P 127 より古い。	B下
133	Ⅶ層上面	LT47	0.21	(0.08)	0.12	234.00	1層。攪乱より古い。	B下
134	Ⅶ層上面	LT48	0.22	0.23	0.24	234.26	1層。大礫1個混入。	B下
135	Ⅶ層上面	LT48	0.30	0.26	0.28	234.26	2層。2層で廃材(木の皮)混入。柱痕を平断面で確認。	B下
136	Ⅶ層上面	LT48	0.22	0.21	0.17	234.39	1層。	B下
137	Ⅶ層上面	LT48	0.22	0.20	0.29	234.20	2層。柱痕を平断面で確認、底面標高 234.16m。	B下
138	Ⅶ層上面	LT48	0.41	0.32	0.30	234.13	3層。2層で鉄分が酸化している。	B下
139	Ⅶ層上面	LT48	0.30	0.25	0.26	234.12	1層。鉄分が酸化している。	B下
140	Ⅶ層上面	LT48	0.42	0.37	0.52	233.96	2層。	B下
141	Ⅶ層上面	LS48	0.34	0.33	0.42	234.09	3層。	B下
142	Ⅶ層上面	LS48	0.25	0.20	0.46	234.12	1層。廃材混入。	B下
143	Ⅶ層上面	LS47	0.30	0.29	0.25	234.24	1層。廃材混入。	B下
144	Ⅶ層上面	LS48	0.29	0.25	0.14	234.44	2層。	B下
145	Ⅶ層上面	LS47	0.30	0.20	0.29	234.20	S K P 146 より新しい。2層。1層で鉄分が酸化している。柱痕平断面で確認、H 234.15m。	B下
146	Ⅶ層上面	LS47	0.26	0.21	0.43	234.02	S K P 145 より古い。1層。廃材混入。	B下
147	Ⅶ層上面	LS47	0.19	0.18	0.22	234.28	1層。	B下
148	Ⅶ層上面	LS47	0.24	0.20	0.36	234.18	1層。廃材混入。柱痕を底面形状で確認(底面が変色していた)。	B下
149	Ⅶ層上面	LS47	0.25	0.24	0.30	234.17	1層。	B下
151	Ⅶ層上面	LR46	0.30	0.27	0.32	234.12	1層。	B下
152	Ⅶ層上面	LR46	0.31	0.28	0.34	234.18	1層。	B下
154	Ⅶ層上面	LR47	(0.50)	(0.30)	0.43	234.16	攪乱より古い。2層。2層で廃材混入。柱痕を平断面で確認。	B下
155	Ⅶ層上面	LR46	0.25	0.20	0.38	234.97	1層。	B下
156	Ⅶ層上面	LQ46	0.37	0.36	0.44	234.22	1層。	B下
157	Ⅶ層上面	LQ46	0.54	0.34	0.21	234.26	1層。	B下
159	Ⅶ層上面	LS47	(0.23)	0.23	0.38	234.00	S K P 459 より新しい、S K P 458 より古い。1層。	B下
160	Ⅶ層上面	LR46	0.24	0.18	0.21	234.12	1層。	B下
164	Ⅶ層上面	LB46	0.41	0.31	0.11	237.08	S K P 165 より古い。1層。浅黄橙色砂微量、黒褐色土小粒微量。	B中
165	Ⅶ層上面	LB46	(0.28)	0.15	0.10	237.17	S K P 164 より新しい。1層。暗褐色土小塊微量、黒褐色土粒微量。	B中
170	Ⅶ層上面	LI50	0.47	0.36	0.40	243.30	2層。	B上
171	Ⅶ層上面	LS47	0.33	0.24	0.39	234.15	S K P 172・S B 464 P 1 より新しい。1層。	B下
172	Ⅶ層上面	LS47・48	0.29	0.27	0.34	234.16	S B 464 P 1 より新しい、S K P 171 より古い。2層。2層で廃材混入。柱痕を平断面で確認。	B下
174	Ⅶ層上面	LS47・48	0.36	0.30	0.10	234.42	1層。	B下
177	Ⅶ層上面	LS47	0.40	0.36	0.47	233.92	2層。	B下
179	Ⅶ層上面	LS47	0.33	0.19	0.16	234.14	1層。小礫数点混入。	B下
180	Ⅶ層上面	LS47	0.41	0.27	0.34	234.33	2層。	B下
182	Ⅶ層上面	LS48	0.25	0.24	0.20	234.25	1層。	B下
183	Ⅶ層上面	LS48	0.30	0.27	0.44	234.05	2層。1層で廃材混入。柱痕を平断面で確認。	B下
184	Ⅶ層上面	LS48	0.28	0.24	0.07	234.44	1層。	B下
185	Ⅶ層上面	LR・LS48	0.43	0.37	0.32	234.20	2層。1層で廃材混入。柱痕を平断面で確認、底面標高 234.16m。	B下
189	Ⅶ層上面	LS47	0.27	0.19	0.35	233.95	2層。	B下
190	Ⅶ層上面	LS47	0.25	0.23	0.39	233.91	2層。	B下
191	Ⅶ層上面	LS46・47	0.28	0.19	0.30	233.89	1層。	B下
192	Ⅶ層上面	LR47	0.40	0.25	0.23	234.44	2層。柱痕を底面形状で確認、底面標高 234.39m。	B下
194	Ⅶ層上面	LS47	0.29	0.20	0.47	233.90	2層。	B下
195	Ⅶ層上面	LS・LT48	0.32	0.25	0.27	234.29	1層。	B下
196	Ⅶ層上面	LJ44	0.24	0.20	0.46	234.11	1層。	B下

第13表 中世以降の柱穴様ピット一覧②

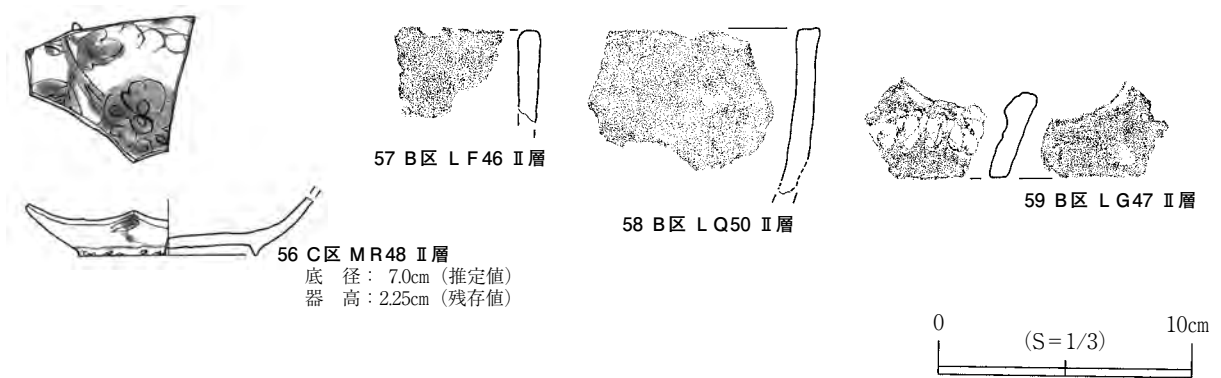
SKP 番号	層位	グリッド	長 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	底面標高 (m)	備 考	地区
197	Ⅶ層上面	LJ44	0.17	0.12	0.40	234.20	土説無し。	B下
198	Ⅶ層上面	LJ44	0.28	0.19	0.51	234.10	1層。	B下
199	Ⅶ層上面	LK46	0.38	0.29	0.17	237.02	2層。1層で廃材混入、2層で地山由来土主体小軽石微量。柱痕：平断面で確認、底面標高236.92m。	B中
205	Ⅶ層上面	MS49	0.34	0.21	0.34	229.32	1層。	C
207	Ⅶ層上面	MS49	0.45	0.23	0.17	229.51	1層。	C
210	Ⅶ層上面	MS49	0.33	0.27	0.21	229.49	1層。	C
211	Ⅶ層上面	MS50	(0.25)	0.17	0.24	229.51	S K P 230より古い。1層。トレンチによって半分以上失われている。	C
216	Ⅶ層上面	MQ48	0.19	0.16	0.30	229.49	1層。	C
227	Ⅶ層上面	MT51	0.34	0.17	0.32	229.82	S K P 228より新しい。1層。トレンチによって半分以上失われている。	C
228	Ⅶ層上面	MT51	(0.50)	(0.10)	0.32	229.83	S K P 227より古い。3層。柱痕を平断面で確認、底面標高229.80m。トレンチによって半分以上失われている。	C
229	Ⅶ層上面	MT51	0.21	(0.12)	0.16	229.96	1層。トレンチによって半分以上失われている。	C
230	Ⅶ層上面	MS50	0.38	0.26	0.36	229.68	S K P 211より新しい。1層。	C
231	Ⅶ層上面	MS50	0.25	(0.14)	0.34	229.72		C
234	Ⅶ層上面	MM48	0.34	0.28	0.17	229.36	1層。小礫数点混入。	C
237	Ⅶ層上面	MN48	0.28	0.21	0.43	229.24	1層。大礫数点混入。柱痕を底面形状で確認、底面標高229.19m。	C
239	Ⅶ層上面	MN48	0.25	0.24	0.30	229.57	1層。柱痕を底面形状で確認、底面標高229.44m。	C
242	Ⅶ層上面	MN48	0.54	0.28	0.08	229.78	1層。大礫数点混入。	C
243	Ⅶ層上面	MN48	0.31	0.25	0.35	229.42	1層。大礫数点混入。	C
244	Ⅶ層上面	MN47	0.17	0.15	0.13	229.52	1層。	C
246	Ⅶ層上面	MN47	0.25	0.23	0.12	229.19	1層。	C
247	Ⅶ層上面	MN47	0.17	0.15	0.13	229.61	1層。	C
249	Ⅶ層上面	MN・MO48	0.20	0.17	0.18	229.66	1層。	C
250	Ⅶ層上面	MO48	0.25	0.25	0.26	229.56	1層。	C
251	Ⅶ層上面	MO48	0.25	0.21	0.36	229.48	1層。	C
252	Ⅶ層上面	MO48	0.20	0.18	0.32	229.58	1層。	C
253	Ⅶ層上面	MO48	0.24	0.18	0.12	229.89	1層。	C
254	Ⅶ層上面	MQ48	0.28	0.25	0.60	229.26	1層。	C
255	Ⅶ層上面	MQ47	0.22	0.20	0.30	229.34	1層。	C
256	Ⅶ層上面	MQ47	0.17	0.15	0.24	229.47	1層。	C
257	Ⅶ層上面	MQ・MR48	0.21	0.18	0.06	229.78	1層。	C
258	Ⅶ層上面	MR48	0.30	0.26	0.36	229.28	1層。	C
263	Ⅶ層上面	MP49	0.48	0.38	0.15	229.78	1層。	C
264	Ⅶ層上面	MQ49	0.25	0.25	0.08	229.87	1層。	C
265	Ⅶ層上面	MQ49	0.38	0.27	0.20	229.72	S K P 266より古い。1層。	C
266	Ⅶ層上面	MQ49	(0.28)	0.35	0.10	229.82	S K P 265より新しい。1層。	C
267	Ⅶ層上面	MP48	0.42	0.40	0.45	229.18	S K 261より新しい。1層。	C
268	Ⅶ層上面	MR49	0.52	0.44	0.08	229.82	1層。	C
281	Ⅶ層上面	MS49	0.40	0.31	0.23	229.73	1層。	C
284	Ⅶ層上面	MT50	0.27	0.23	0.23	229.78	S K P 285より新しい。1層。	C
285	Ⅶ層上面	MT50	0.40	0.36	0.14	229.85	S K P 284より古い。1層。	C
287	Ⅶ層上面	MT50	0.35	0.20	0.32	229.65	1層。	C
288	Ⅶ層上面	MT50	0.30	0.27	0.41	229.52	1層。	C
290	Ⅶ層上面	MP48	0.25	0.22	0.25	229.40	1層。	C
292	Ⅶ層上面	MS49	0.31	0.27	0.21	229.49	1層。	C
293	Ⅶ層上面	MT50	0.70	0.45	0.10	229.80	1層。	C
294	Ⅶ層上面	MT49	0.50	0.35	0.46	229.32	1層。	C
295	Ⅶ層上面	MT49・50	0.78	0.56	0.22	229.48	1層。	C
297	Ⅶ層下面	MR48	0.28	0.24	0.17	229.25	1層。	C
298	Ⅶ層上面	MR48	0.19	(0.10)	0.10	229.72	1層。	C
301	Ⅶ層上面	LS46	0.26	0.26	0.13	234.00	1層。	B下
302	Ⅶ層上面	LS46	0.25	0.19	0.49	234.47	1層。	B下
303	Ⅶ層上面	LR46	0.38	0.36	0.16	233.92	S K P 305より新しい、S K P 304より古い。1層。	B下
304	Ⅶ層上面	LR46	0.35	0.22	0.27	233.83	S K P 303・309・305より新しい。1層。	B下
305	Ⅶ層上面	LR46	(0.26)	0.19	0.16	234.08	攪乱・S K P 304・303より古い。1層。	B下
306	Ⅶ層上面	LQ46	0.31	0.25	0.12	234.10	1層。鉄分が酸化している。	B下
307	Ⅶ層上面	LQ45・46	0.44	0.38	0.38	233.86	2層。1層で廃材混入。柱痕を底面形状で確認。	B下
308	Ⅶ層上面	LQ45	(0.27)	(0.09)	0.24	233.68	2層。2層で鉄分が酸化している。上端はトレンチにより半分以上失われている。	B下
309	Ⅶ層上面	LR46	0.32	(0.25)	0.50	233.63	S K P 304より古い。2層。	B下
310	Ⅶ層上面	LP45	0.31	0.26	0.36	233.65	S K P 311より新しい。2層。	B下
311	Ⅶ層上面	LP45	0.29	(0.23)	0.35	233.67	S K P 310より古い。1層。	B下
312	Ⅶ層上面	LP45	0.28	0.19	0.31	233.74	1層。	B下
313	Ⅶ層上面	LP45	0.44	0.32	0.38	233.90	S K P 314より新しい。2層。	B下

第14表 中世以降の柱穴様ピット一覧③

SKP 番号	層位	グリッド	長 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	底面標高 (m)	備 考	地区
314	Ⅶ層上面	LP45	0.31	(0.18)	0.27	234.00	S K P 313より古い。1層。小礫数点混入。	B下
315	Ⅶ層上面	LQ45	0.26	0.20	0.07	233.59	基本土層トレンチの床面で検出したため、上部はトレンチにより失われている。本来はⅢ層からの掘り混みの可能性がある。	B下
316	Ⅶ層上面	LQ45	0.25	0.22	0.29	233.67	1層。廃材混入。	B下
317	Ⅶ層上面	LQ45	0.46	0.42	0.39	233.49	2層。	B下
325	Ⅶ層上面	LS46・47	0.24	0.17	0.36	234.36	土説無し。	B下
328	Ⅶ層上面	LN46	0.26	0.23	0.40	234.63	1層。	B下
330	Ⅶ層上面	LH48・49	0.29	0.23	0.12	239.91	1層。	B中
331	Ⅶ層上面	LM46	0.29	0.28	0.40	234.83	4層。柱痕を平断面で確認、底面標高234.66m。	B下
338	Ⅶ層上面	LM45	0.25	0.22	0.13	234.86	2層。	B下
344	Ⅶ層上面	LN45	0.38	0.37	0.13	234.68	1層。	B下
345	Ⅶ層上面	LN45	0.22	0.19	0.27	234.47	1層。	B下
346	Ⅶ層上面	LN45	0.19	0.17	0.41	234.26	1層。	B下
353	Ⅶ層上面	LM45	0.74	0.43	0.26	234.62	1層。	B下
355	Ⅶ層上面	LM45	0.32	0.28	0.18	234.67	2層。	B下
356	Ⅶ層上面	LM45	0.25	0.25	0.13	234.76	1層。	B下
357	Ⅶ層上面	LM45	0.24	0.24	0.16	234.74	S K P 358より新しい。1層。	B下
358	Ⅶ層上面	LM45	(0.28)	0.27	0.14	234.76	S K P 357より古い。1層。	B下
359	Ⅶ層上面	LL・LM45	0.51	0.31	0.18	234.75	1層。	B下
360	Ⅶ層上面	LL45	0.32	0.25	0.26	234.95	1層。	B下
365	Ⅶ層上面	LP50	0.30	0.24	0.04	239.29	1層。	B中
365	Ⅶ層上面	LP50	0.30	0.24	0.04	239.29	1層。	B中
368	Ⅶ層上面	LL47	0.66	0.57	0.12	237.77	1層。鉄製品1点出土。中痕：平断面で確認。	B中
370	Ⅶ層上面	LN49	0.18	0.17	0.09	238.59	1層。鉄分が酸化している。	B中
371	Ⅶ層上面	LN49	0.69	0.45	0.23	238.23	1層。	B中
372	Ⅶ層上面	LN49	0.39	0.25	0.15	238.30	2層。2層で暗褐色小粒微量。	B中
373	Ⅶ層上面	LN49	0.38	0.32	0.21	238.18	1層。	B中
374	Ⅶ層上面	LN48・49	0.33	0.29	0.20	238.06	1層。にぶい黄褐色火山灰微量。	B中
375	Ⅶ層上面	LN48	0.47	0.38	0.17	237.90	1層。	B中
376	Ⅶ層上面	LN49	0.47	0.37	0.10	238.25	1層。	B中
377	Ⅶ層上面	LM49	0.23	0.20	0.32	238.52	1層。	B中
378	Ⅶ層上面	LM48	0.25	0.23	0.05	238.16	1層。	B中
379	Ⅶ層上面	LL48	0.50	0.50	0.10	238.08	1層。	B中
380	Ⅶ層上面	LL48	0.31	0.17	0.07	238.13	1層。	B中
382	Ⅶ層上面	LL45	0.22	0.20	0.40	234.30	1層。	B下
384	Ⅶ層上面	LK・LL45	(0.32)	0.28	0.25	235.00	1層。	B下
385	Ⅶ層上面	LM45	0.29	0.28	0.20	234.17	1層。	B下
386	Ⅶ層上面	LM45	0.21	0.15	0.15	234.22	1層。	B下
387	Ⅶ層上面	LO45	0.35	0.27	0.38	233.47	2層。	B下
388	Ⅶ層上面	LO45	0.26	0.21	0.21	233.77	1層。	B下
389	Ⅶ層上面	LO45	0.25	0.24	0.24	233.54	1層。	B下
390	Ⅶ層上面	LO45	0.46	0.33	0.21	233.63	1層。小礫数点混入。	B下
391	Ⅶ層上面	LO45	0.22	0.21	0.24	233.64	1層。	B下
392	Ⅶ層上面	LM45	0.32	0.26	0.16	234.71	1層。	B下
393	Ⅲ層	LO44	0.29	0.26	0.32	233.49	1層。	B下
394	Ⅲ層	LN44	0.28	0.24	0.37	233.22	2層。	B下
395	Ⅶ層上面	LN45	0.21	0.20	0.39	234.18	2層。	B下
396	Ⅶ層上面	LN45	0.29	0.26	0.35	234.06	2層。	B下
397	Ⅶ層上面	LJ44	0.19	0.18	0.33	234.13	1層。	B下
398	Ⅶ層上面	LJ44	0.20	0.20	0.69	234.95	3層。	B下
399	Ⅶ層上面	LI44	0.25	0.23	0.57	234.21	2層。	B下
400	Ⅶ層上面	LI44	0.39	0.25	0.50	234.33	2層。	B下
401	Ⅶ層上面	LK47	0.50	0.37	0.18	237.68	1層。鉄製品1点出土。	B中
402	Ⅶ層上面	LQ51	0.27	0.23	0.10	240.30	1層。	B中
403	Ⅶ層上面	LI44	0.28	0.22	0.55	234.20	1層。	B下
404	Ⅶ層上面	LI44	0.25	0.21	0.50	234.40	1層。	B下
405	Ⅶ層上面	LH44	0.26	0.20	0.64	234.15	2層。	B下
406	Ⅶ層上面	LH43・44	0.26	0.23	0.64	234.17	1層。	B下
407	Ⅶ層上面	LH44	0.23	0.19	0.60	234.77	1層。	B下
408	Ⅶ層上面	LG44	0.24	0.21	0.57	234.74	2層。	B下
409	Ⅶ層上面	LG44	0.24	0.20	0.53	234.60	2層。	B下
410	Ⅶ層上面	LG43	0.16	0.16	0.56	234.41	1層。	B下
412	Ⅶ層上面	LJ44	(0.25)	0.30	0.29	234.34	1層。廃材混入。S K P 398の箱掘りにより、東側を失っている。	B下
413	Ⅶ層上面	LJ44	0.30	(0.10)	0.41	243.07	1層。廃材混入。S K P 398の箱掘りにより、西側を失っている。	B下
414	Ⅶ層上面	LH44	0.23	0.21	0.52	234.60	3層。	B下
415	Ⅶ層上面	LK45	0.38	0.28	0.50	234.77	2層。柱痕を平断面で確認。	B下

第15表 中世以降の柱穴様ピット一覧④

SKP 番号	層位	グリッド	長 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	底面標高 (m)	備 考	地区
416	Ⅶ層上面	LK45	0.30	0.23	0.57	234.23	2層。柱痕を平断面で確認。	B下
417	Ⅶ層上面	LK45	0.27	0.25	0.13	234.78	1層。	B下
418	Ⅶ層上面	LK44	0.22	0.19	0.29	234.16	1層。にぶい黄橙色粘土大塊微量。	B下
419	Ⅶ層上面	LK44	0.25	0.19	0.53	234.98	1層。	B下
420	Ⅶ層上面	LK44	0.22	0.21	0.28	234.22	1層。	B下
423	Ⅶ層上面	LR51	0.29	0.25	0.22	238.80	1層。	B中
424	Ⅶ層上面	LS51	0.25	0.20	0.40	238.58	1層。	B中
425	Ⅶ層上面	LT51・52	0.55	0.50	0.15	238.81	2層。1層で鉄製品1点出土、地山由来土主体。	B中
427	Ⅶ層上面	LQ50	0.40	0.32	0.09	238.32	1層。	B中
428	Ⅶ層上面	LQ50	0.25	0.17	0.09	240.31	1層。	B中
429	Ⅶ層上面	LR51	0.30	0.28	0.08	239.04	1層。	B中
430	Ⅶ層上面	MB52	0.16	0.10	0.26	238.39	1層。	B中
431	Ⅶ層上面	MB52	0.31	0.30	0.30	238.53	2層。2層でにぶい黄褐色土大粒微量。	B中
433	Ⅶ層上面	MB52	0.29	0.21	0.31	238.43	1層。	B中
434	Ⅶ層上面	MB53	0.30	0.21	0.29	238.76	1層。	B中
435	Ⅶ層上面	LT51	0.17	0.15	0.07	238.64	1層。	B中
438	Ⅶ層上面	LR50	0.36	0.29	0.15	238.39	1層。	B中
439	Ⅶ層上面	LR・LS50	0.30	0.20	0.09	238.62	1層。	B中
441	Ⅶ層上面	LK44	0.30	0.22	0.58	233.92	1層。	B下
442	Ⅶ層上面	LK44	0.24	0.19	0.36	234.18	1層。	B下
443	Ⅶ層上面	LI44	0.36	0.29	0.37	234.61	1層。	B下
444	Ⅶ層上面	LG44	0.29	0.19	0.51	235.07	2層。柱痕を平断面で確認。	B下
448	Ⅶ層上面	LL44・45	0.38	0.27	0.52	234.08	2層。	B下
449	Ⅶ層上面	LM44・45	0.34	0.21	0.17	234.23	1層。	B下
450	Ⅶ層上面	LM44	0.35	0.27	0.12	234.01	1層。	B下
452	Ⅶ層上面	LD44	0.38	0.37	0.50	234.98	1層。	B下
453	Ⅶ層上面	LE45	0.33	0.29	0.31	235.22	2層。柱痕を平断面で確認。	B下
454	Ⅶ層上面	LD44	0.49	0.38	0.30	234.93	1層。	B下
455	Ⅶ層上面	LD45	0.34	0.30	0.33	235.15	1層。鉄分が酸化している。	B下
456	Ⅶ層上面	LC45	0.18	0.17	0.11	236.84	1層。	B下
457	Ⅶ層上面	LC46	0.19	0.17	0.22	236.81	1層。	B下
458	Ⅶ層上面	LS47	0.26	0.14	0.41	233.99	S K P 159・459より新しい。土説無し。	B下
459	Ⅶ層上面	LS47	0.23	(0.11)	0.17	234.33	S K P 458・159より古い。1層。	B下
460	Ⅶ層上面	LS48	0.21	0.19	0.17	234.37	S B 463 P 5より古い。	B下
461	Ⅶ層上面	LB46	(0.13)	0.14	0.10	237.31	S D 163より新しい。土説無し。	B中
501	Ⅶ層上面	MQ48	0.20	0.16	0.12	229.59	1層。	C
503	Ⅶ層上面	MO47	0.36	0.28	0.23	229.34	2層。	C
504	Ⅶ層上面	MO47	(0.25)	0.20	0.25	229.34	S K P 505より古い。1層。	C
505	Ⅶ層上面	MO47	0.42	0.25	0.40	229.16	S K P 504より新しい。2層。	C
506	Ⅶ層上面	MN47	0.25	0.23	0.19	229.42	1層。	C
508	Ⅶ層上面	MM・MN48	0.34	0.28	0.54	229.98	1層。	C
510	Ⅶ層上面	MN49	0.34	0.32	0.31	229.64	2層。	C
513	Ⅶ層上面	MN47・48	0.35	0.30	0.48	229.29	1層。	C
516	Ⅶ層上面	MN48	0.34	0.23	0.28	229.40	1層。	C
519	Ⅶ層上面	MN48	0.27	0.24	0.24	229.47	1層。	C
522	Ⅶ層上面	MP48	0.37	0.28	0.17	229.43	1層。	C
526	Ⅶ層上面	MS48	0.38	(0.18)	0.15	229.44	S K P 557より古い。1層。	C
529	Ⅶ層上面	MR49	0.33	0.27	0.16	229.91	1層。	C
530	Ⅶ層上面	MM47	0.24	0.22	0.13	228.74	1層。	C
531	Ⅶ層上面	MM47	0.30	0.27	0.14	228.74	1層。	C
532	Ⅶ層上面	MN48	0.32	0.26	0.38	229.42	1層。	C
533	Ⅶ層上面	MN47	0.23	0.14	0.13	229.36	1層。	C
534	Ⅶ層上面	MT49	0.27	0.23	0.20	229.42	1層。	C
536	Ⅶ層上面	MT50	0.35	0.28	0.32	229.62	1層。	C
537	Ⅶ層上面	MS49	0.25	0.21	0.08	229.45	1層。	C
544	Ⅶ層上面	MT50	0.30	0.39	0.12	229.64	1層。	C
545	Ⅶ層上面	MT49・50	0.43	0.14	0.47	229.47	S K I 270より古い。1層。	C
546	Ⅶ層上面	MT50	0.28	0.14	0.35	229.50	1層。	C
547	Ⅶ層上面	MS49	0.30	(0.12)	0.70	229.24	1層。	C
548	Ⅶ層上面	MM47	0.77	0.65	0.09	228.74	1層。	C
552	Ⅶ層上面	MS49	0.18	(0.08)	0.05	229.69	S K I 270より古い。1層。	C
553	Ⅶ層上面	MS50	0.38	0.32	0.08	229.67	1層。	C
554	Ⅶ層上面	MS49	0.27	0.18	0.18	229.62	1層。	C
556	Ⅶ層上面	MR48	0.23	0.08	0.25	229.40	1層。	C
557	Ⅶ層上面	MS・MT48	0.32	0.30	0.25	229.33	S K P 526より新しい。土説無し。	C



第25図 遺構外出土遺物（中世以降）

2 遺構外出土遺物

(1) 陶磁器(第25図56～59、図版16)

第25図56は、C区MR48 II層で出土した16世紀末の景德鎮の染付け皿である。内外面に草花文様が描かれている。高台の内側には放射状の削り跡がある。全体に釉薬をかけた後、接地部分の釉薬のみをはがしているため、高台の内側にも釉薬がかかっている。接地部分には砂目跡が残っている。56が出土したことは、C区が湯瀬館の破却前に利用されていた部分であることを示唆すると考えられる。

第25図57～59は、貝風呂と推定される素焼きの陶器片である。57・58は口縁部破片であり、口唇部は面取りされている。59は底部と焚き口もしくは送風口部分の間の破片で、内面には整形の際の工具痕が残っている。

(2) 鉄製品

遺構外から鉄製品が多数出土した。芯の部分が酸化せずに残存していることから、高師小僧のような自然遺物ではなく鉄製品であることが確認できたが、小破片で全体形の判る遺物はなく、時期を検討することは出来ない。

第5章 自然科学的分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

湯瀬館跡は、1591年に破却されたとされる中世の館跡である。発掘調査では、中世の館跡に伴うと考えられる遺構のほか、縄文時代中期末葉～後期初頭の土器等も出土している。

今回の分析調査では、基本層序や遺構の年代を検討するために、テフラ分析や出土した炭化材の放射性炭素年代測定を実施する。また、炭化材については、古植生や木材利用に関する資料を得るための樹種同定も併せて実施する。

第1節 炭化材の年代測定と樹種同定

I 炭化材の放射性炭素年代測定

1. 試料

試料は、各遺構から出土した炭化材3点(試料番号1, 2, 3)である。

2. 分析方法

土壌や根など目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後HClにより炭酸塩等酸可溶成分を除去、NaOHにより腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、HClによりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去を行う(酸・アルカリ・酸処理)。

試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅(II)と銀箔(硫化物を除去するため)を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃(30分)850℃(2時間)で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO₂を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO₂と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置(NEC Pelletron 9SDH-2)を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局(NIST)から提供されるシュウ酸(HOX-?)とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に¹³C/¹²Cの測定も行うため、この値を用いて $\delta^{13}\text{C}$ を算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma:68%)に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02(Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer)を用い、誤差として標準偏差(One Sigma)を用いる。

暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、および半減期の違い(¹⁴Cの半減期

5730 ± 40年)を較正することである。暦年較正に関しては、本来10年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表す。試料がいずれも炭化材であることから、北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用いる。

暦年較正は、測定誤差σ、2σ双方の値を計算する。σは統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、2σは真の値が95%の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは、σ、2σの範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

3. 結果

同位体効果による補正を行った測定結果を第16表、暦年較正結果を第17表に示す。補正年代は、試料番号1が1,010 ± 30BP、試料番号2が140 ± 30BP、試料番号3が12,850 ± 40BPを示す。また、測定誤差をσとして計算させた暦年較正結果は、試料番号1がcalAD995-1,029、試料番号2がcalAD1,680-1,952、試料番号3がcalBC13,548-13,141である。

第16表 放射性炭素年代測定および樹種同定結果

番号	遺構	層位	試料	補正年代 BP	δ 13 C (‰)	測定年代 BP	Code No.	樹種
1	SN169	1層	炭化材	1,010 ± 30	-23.68 ± 0.45	990 ± 20	IAAA-92151	ケヤキ
2	SK1226	1層	炭化材	140 ± 30	-18.97 ± 0.49	40 ± 20	IAAA-92152	ブナ属
3	SKT509	4層	炭化材	12,850 ± 40	-23.92 ± 0.63	12,830 ± 60	IAAA-92153	カラマツまたはトウヒ属

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
- 2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
- 3) 付記した誤差は、測定誤差σ(測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

第17表 暦年較正結果

番号	補正年代 (BP)	暦年較正年代 (cal)								相対比	Code No.
		σ		2σ		σ		2σ			
1	1,009 ± 24	σ		cal AD 995	- cal AD 1,007	cal BP 955	- cal BP 943	0.327		IAAA-92151	
		σ		cal AD 1,011	- cal AD 1,029	cal BP 939	- cal BP 921	0.673			
		2σ		cal AD 983	- cal AD 1,044	cal BP 967	- cal BP 906	0.946			
		2σ		cal AD 1,099	- cal AD 1,119	cal BP 851	- cal BP 831	0.047			
2	140 ± 23	σ		cal AD 1,680	- cal AD 1,696	cal BP 270	- cal BP 254	0.150		IAAA-92152	
		σ		cal AD 1,725	- cal AD 1,763	cal BP 225	- cal BP 187	0.281			
		σ		cal AD 1,801	- cal AD 1,814	cal BP 149	- cal BP 136	0.117			
		σ		cal AD 1,836	- cal AD 1,845	cal BP 114	- cal BP 105	0.064			
		σ		cal AD 1,851	- cal AD 1,877	cal BP 99	- cal BP 73	0.181			
		σ		cal AD 1,917	- cal AD 1,938	cal BP 33	- cal BP 12	0.198			
		σ		cal AD 1,951	- cal AD 1,952	cal BP - 1	- cal BP - 2	0.009			
		2σ		cal AD 1,670	- cal AD 1,708	cal BP 280	- cal BP 242	0.167			
		2σ		cal AD 1,718	- cal AD 1,779	cal BP 232	- cal BP 171	0.280			
		2σ		cal AD 1,799	- cal AD 1,827	cal BP 151	- cal BP 123	0.125			
		2σ		cal AD 1,831	- cal AD 1,889	cal BP 119	- cal BP 61	0.252			
		2σ		cal AD 1,910	- cal AD 1,943	cal BP 40	- cal BP 7	0.171			
3	12,846 ± 55	σ		cal BC 13,548	- cal BC 13,141	cal BP 15,497	- cal BP 15,090	1.000		IAAA-92153	
		2σ		cal BC 13,918	- cal BC 13,019	cal BP 15,867	- cal BP 14,968	1.000			

- 1) 計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02 (Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer)を使用した。
- 2) 計算には表に示した丸める前の値を使用している。
- 3) 1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
- 4) 統計的に真の値が入る確率はσは68%、2σは95%である。
- 5) 相対比は、σ、2σのそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

II 炭化材の樹種同定

1. 試料

試料は、各遺構から出土した炭化材3点（試料番号1, 2, 3）である。

2. 分析方法

試料を自然乾燥させた後、木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）、Wheeler 他（1998）、Richter 他（2006）を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林（1991）や伊東（1995,1996,1997,1998,1999）を参考にする。

3. 結果

樹種同定結果を第16表に示す。炭化材は、針葉樹1分類群（カラマツまたはトウヒ属）と広葉樹2分類群（ブナ属・ケヤキ）に同定された。各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・カラマツまたはトウヒ属（*Larix kaempferi* (Lamb.) Carriere or *Picea*） マツ科

軸方向組織は、観察した範囲では仮道管のみで構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は狭い。放射組織は、仮道管、柔細胞、水平樹脂道、エピセリウム細胞で構成される。放射柔組織の細胞壁は厚く、垂直壁にはじゅず状の肥厚が認められる。放射仮道管の有縁壁孔のフチは保存が悪く形態は不明。分野壁孔は保存が悪く形態不明。放射組織は単列、1-15細胞高。

・ブナ属（*Fagus*） ブナ科

散孔材で、管孔は単独または放射方向に2-3個が複合して散在し、年輪界付近で径を減ずる。道管の分布密度は高い。道管は単穿孔および階段穿孔を有し、壁孔は対列状～階段状に配列する。放射組織はほぼ同性、単列、数細胞高のものから複合放射組織までである。

・ケヤキ（*Zelkova serrata* (Thunb.) Makino） ニレ科ケヤキ属

環孔材で、孔圏部は1-2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、塊状に複合して接線・斜方向に紋様状あるいは帯状に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1-6細胞幅、1-50細胞高。放射組織の上下縁辺部を中心に結晶細胞が認められる。

III 考察

焼土遺構S N 169は、中・近世の可能性があると考えられているが、年代測定では $1,010 \pm 30BP$ (calAD995-1,029)の値が得られており、古代の遺構の可能性もある。炭化材は、燃料材等の一部が残存した可能性があり、落葉広葉樹のケヤキに同定された。ケヤキは、河畔等に生育する落葉高木であり、遺跡周辺に生育していた樹木を利用した可能性がある。

中世の資料では、盤若台遺跡の鎌倉時代と考えられる燃料材にスギ、コナラ節、クリ、トチノキ、

エゴノキ属、ブナ属、ヤマウルシ、カエデ属、クマヤナギ属、ガマズミ属、ケヤキが確認された例がある（植田,2001）。一方、年代測定結果から推定される古代の資料については、ケヤキが確認された事例は認められない。

竪穴状遺構 S K I 226 は、中・近世の可能性が考えられている。年代測定では、 $140 \pm 30\text{BP}$ (calAD1,680-1,952) の値が得られており、近世～現代の可能性がある。炭化材は、落葉広葉樹のブナ属に同定された。ブナ属は、山地の落葉広葉樹林を構成し、木材は比較的重硬で強度が高い材質を有する。本地域でも比較的普通に見られる樹木であり、遺跡周辺の山地・丘陵地に生育していた樹木を利用したことが推定される。

陥し穴 S K T 509 は、縄文時代の可能性が考えられている。年代測定では、 $12,850 \pm 40\text{BP}$ (calBC13,548-13,141) の値が得られており、縄文時代草創期に相当する年代を示している。炭化材は、針葉樹のカラマツまたはトウヒ属に同定された。カラマツやトウヒ属は、池内遺跡の To-HP 下の埋没林等に認められており（寺田・辻,1999）、今回の結果から本遺跡周辺にもカラマツやトウヒ属が生育していたことが推定される。

第2節 基本土層のテフラ分析

1. 試料

試料は、試料番号4～9とされた6点である。試料番号4～7は、A区基本土層 spA-B より採取されており、採取層位は試料番号順に II d、V a、V b、V c の各層である。いずれの層も、縄文時代遺物包含層よりも上位の層位とされている。試料番号8はA区基本土層 spC-D の埋没沢1-4層より採取されている。埋没沢1-4層は発掘調査所見により、上述した基本土層のV層に対比されている。試料番号9はB区基本土層 spE-F より採取されており、その層位はV層とされている。

各試料の外観は次の通りである。試料番号4は、軽石を少量含むにぶい黄褐色を呈するシルト質の土壌、試料番号5・7・9は軽石を多量に含む黄褐～灰黄褐色を呈するシルト質の土壌である。試料番号6および試料番号8は、褐灰～灰白色を呈する若干土壌化した砂質シルトである。

2. 分析方法

試料約 20 g を蒸発皿に取り、水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後、実体顕微鏡下にて観察する。観察は、テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象とし、その特徴や含有量の多少を定性的に調べる。

火山ガラスは、その形態によりバブル型・中間型・軽石型の3タイプに分類した。各型の形態は、バブル型は薄手平板状、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破碎片状などの塊状ガラスであり、軽石型は小気泡を非常に多く持った塊状および気泡の長く伸びた繊維束状のものとする。

3. 結果

結果を第18表に示す。6点の試料全てから軽石と火山ガラスが検出され、スコリアは認められな

第18表 テフラ分析結果

試料番号	採取位置	層位	スコリア		火山ガラス		軽石			その他碎屑物
			量	量	色調・形態	量	色調・発泡度	最大粒径		
4	A区基本土層 spA-B	II d層	-	+	cl·bw,cl·pm	++	W·g ~ sg>GW·b (opx,mt,pl)	8.0	Lf (An,Tf,Ry,Ss,Ch), ob	
5	A区基本土層 spA-B	V a層	-	++	cl·pm>cl·bw	++++	W·g ~ sg>>W·b,GW·sb (opx,mt,pl)	9.0	Lf (An), ob	
6	A区基本土層 spA-B	V b層	-	++	cl·pm>cl·bw>br·md	++++	W·g ~ sg>>W·b,GW·sb (opx,mt,pl)	6.0	Lf (An), ob	
7	A区基本土層 spA-B	V c層	-	+	cl·pm,cl·bw,br·md	++++	W·g ~ sg>>W·b,GW·sb (opx,mt,pl)	11.0	Lf (An), ob	
8	A区基本土層 spC-D	埋没沢1-4層	-	+	cl·pm,cl·bw,br·md	++++	W·g ~ sg>>W·b,GW·sb (opx,mt,pl)	5.5	Lf (An), ob	
9	B区基本土層 spE-F	V層	-	+	cl·pm,cl·bw,br·md	++++	W·g ~ sg>>W·b,GW·sb (opx,mt,pl)	7.0	Lf (An), ob	

凡例 - :含まれない。(+) :きわめて微量。+ :微量。++ :少量。+++ :中量。++++ :多量。
 cl:無色透明。br:褐色。bw:バブル型。md:中間型。pm:軽石型。
 W:白色。GW:灰白色。
 g:良好。sg:やや良好。sb:やや不良。b:不良。() :斑晶鉱物。opx:斜方輝石。mt:磁鉄鉱。pl:斜長石。最大粒径はmm。
 Lf:岩片。An:安山岩。Tf:凝灰岩。Ry:流紋岩。Ss:砂岩。Ch:チャート。ob:黒曜石片。

かった。軽石は、試料番号4には少量、他の試料には多量認められた。軽石の特徴は、いずれの試料も同様であり、白色を呈し、発泡は良好～やや良好の軽石が主体を占め、これに白～灰白色を呈し、発泡の不良～やや不良の軽石が混在する。軽石の最大径は、試料番号6・8で約6mm、試料番号7では約11mmであり、他の試料はその間の値を示す。また、軽石には、斜方輝石、磁鉄鉱および斜長石などの斑晶鉱物が包有されている。火山ガラスは、試料番号5・6に少量、他の試料には微量含まれる。いずれも無色透明の塊状の軽石型が多く、少量の繊維束状のものも混在し、微量の無色透明のバブル型も認められる。

軽石と火山ガラスの他には、いずれの試料も少量の斜長石や斜方輝石、単斜輝石などの遊離結晶や安山岩の岩石片、さらには微量の黒曜石片などが認められる。なお、試料番号4では、遊離結晶の中に微量の角閃石も混在し、岩石片には安山岩のほかに凝灰岩や流紋岩、砂岩、チャートなど多種類のものが混在する。

4. 考察

各試料から検出された軽石は、上述した色調や発泡度および斑晶鉱物の種類、さらには火山ガラスと黒曜石片を伴うことおよび湯瀬館跡の地理的位置を考慮すれば、これまでに研究された東北地方におけるテフラの産状(町田ほか(1981;1984)、Arai et al.(1986)、町田・新井(2003)など)との比較から、十和田aテフラ(To-a)に由来すると考えられる。To-aは、平安時代に十和田カルデラから噴出したテフラであり、給源周辺では火砕流堆積物と降下軽石からなるテフラとして、火砕流の及ばなかった地域では軽石質テフラとして、さらに給源から離れた地域では細粒の火山ガラス質テフラとして、東北地方のほぼ全域で確認されている(町田ほか,1981)。また、その噴出年代については、早川・小山(1998)による詳細な調査によれば、西暦915年とされている。

今回の試料が採取された各層のうち、A区基本土層のV a、V b、V cの各層は、基本的には土壌化を受けているものの、その外観と軽石の産状から、V a層とV c層はTo-aの降下軽石層、V b層はTo-aの降下火山灰層に相当する可能性が高い。Hayakawa(1985)は、To-aの噴火について、大湯1軽石の噴出-毛馬内火砕流の噴出-大湯3軽石の噴出という過程を述べており、毛馬内火砕流本体の堆積していないところでは、火砕流から舞い上がった火山灰が堆積し、これを大湯2火山灰とし

ている。層的にみれば、本遺跡のV c層は大湯1軽石層、V b層は大湯2火山灰層、V a層は大湯3軽石層にそれぞれ対比される可能性がある。

A区基本土層のII d層は、To-aとは異質の岩石片が多種多量に混在していることから、To-aの軽石の再堆積物を包含する層位と考えることができる。また、A区基本土層の埋没沢1-4層およびB区基本土層のV層も、土壌化を受けたTo-aの降下堆積層であると考えられるが、A区基本土層spA-Bに比べて降下堆積後の保存環境が不良であったことから、軽石層も火山灰層も混交していると考えられる。

引用文献

- Arai,F.・Machida,H.・Okumura,K.・Miyachi,T.・Soda,T.・Yamagata,K,1986,Catalog for late quaternary marker-tephras in Japan II - Tephras occurring in Northeast Honshu and Hokkaido - .Geographical reports of Tokyo Metropolitan University No.21,223-250.
- Hayakawa,Y.,1985,Pyroclastic Geology of Towada Volcano. Bulletin of The Earthquake Research Institute University of Tokyo,vol.60 ,507-592.
- 早川由紀夫・小山真人,1998,日本海をはさんで10世紀に相次いで起こった二つの大噴火の年月日-十和田湖と白頭山-.火山,43,403-407.
- 林 昭三,1991,日本産木材 顕微鏡写真集.京都大学木質科学研究所.
- 伊東隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載I.木材研究・資料,31,京都大学木質科学研究所,81-181.
- 伊東隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載II.木材研究・資料,32,京都大学木質科学研究所,66-176.
- 伊東隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載III.木材研究・資料,33,京都大学木質科学研究所,83-201.
- 伊東隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載IV.木材研究・資料,34,京都大学木質科学研究所,30-166.
- 伊東隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載V.木材研究・資料,35,京都大学木質科学研究所,47-216.
- 町田 洋・新井房夫,2003,新編 火山灰アトラス.東京大学出版会,336p.
- 町田 洋・新井房夫・森脇 広,1981,日本海を渡ってきたテフラ.科学,51,562-569.
- 町田 洋・新井房夫・杉原重夫・小田静夫・遠藤邦彦,1984,テフラと日本考古学-考古学研究と関連するテフラのカタログ-.渡辺直経(編)古文化財に関する保存科学と人文・自然科学.同朋舎,865-928.
- Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.(編),2006,針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘(日本語版監修),海青社,70p.[Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.(2004) IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].
- 島地 謙・伊東隆夫,1982,図説木材組織.地球社,176p.
- 寺田和雄・辻 誠一郎,1999,秋田県大館市池内における十和田八戸テフラに埋積した森林植生と年輪年代学の適用.植生史研究,6,日本植生史学会,39-47.
- 植田弥生,2001,盤若台遺跡出土炭化材の樹種同定.「盤若台遺跡」,秋田県埋蔵文化財調査報告書第331集,秋田県埋蔵文化財センター・秋田県教育委員会,37-40.
- Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(編),1998,広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修),海青社,122p.[Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

第6章 まとめ

湯瀬館跡は、鹿角市の湯瀬溪谷右岸の丘陵上に位置する館跡である。鹿角四十二館の一つに数えられ、1591年に破却されたという文献が残っている。八幡平小学校湯瀬校舎跡地と、「館コ」と呼ばれる部分に広大な平坦面を設けた痕跡が認められ、これらが主要な曲輪と考えられる。湯瀬館跡の位置は、湯瀬溪谷の中でも比較的開けた位置にあたり、鹿角へ出入りする古道の様子をうかがうのに適した立地と言える。

「館コ」部分は、東北自動車道建設に伴い1979年に発掘調査を行った。その結果、「館コ」部分を南北に分ける空堀や掘立柱建物跡などが見つかると、出土遺物によって13世紀頃～16世紀末にかけて館が機能していたことを示唆する成果が得られた。

当調査は、国道282号線交通安全施設等整備事業に伴って実施した。調査範囲は大きく分けて、館の範囲より東側に位置する畑地部分(A区)、湯瀬館跡の小学校跡地の南側に位置する3段の帯曲輪(B区)、「館コ」の南側に位置する宅地部分(C区)の3か所がある。

A区は館の範囲外にあたる部分だが、埋没沢が残っており、縄文時代前期から弥生時代が多量に出土し、ほぼ完形まで復元できる遺物が複数あった。B区では建物跡、C区では陥し穴が見つかることから、「館コ」や小学校跡地のある丘陵上などに当時の集落があったと推定されるが、中世に館を造成する際、削平されて失われたため、集落跡が発見されなかったものと考えられる。

B区では、掘立柱建物跡や柱穴列が発見され、帯曲輪の平端面の堆積土の状況から、帯曲輪がどのようにして形成されたかがわかった。B区は堆積土に含まれた十和田a火山灰の堆積状況から、元々小学校跡地から南へ向かって緩やかに傾斜する斜面だったのを、館の造成の際に旧表土・十和田a火山灰・地山層を削平して3段の平坦面を設けている。ただし、これらの平坦面は館が破却された後も畑地や宅地として利用され続けたため、館として機能していた当時の遺構面はほとんどない。

C区は、後世の構造物により攪乱されて、館の範囲に含まれるかどうか不明な区域だった。しかし当調査により、後世の攪乱から免れた位置に建物跡が複数検出され、館が破却された16世紀末の遺物も出土した。これらのことから、C区は館の一部である可能性が高いことがわかった。

当調査による主要な成果は、①湯瀬館跡周辺では縄文時代前期から断続的に人が生活していたこと、②湯瀬館の帯曲輪は丘陵の斜面部を削平して造成されたこと、③C区は湯瀬館の一部である可能性が高いことの3点である。



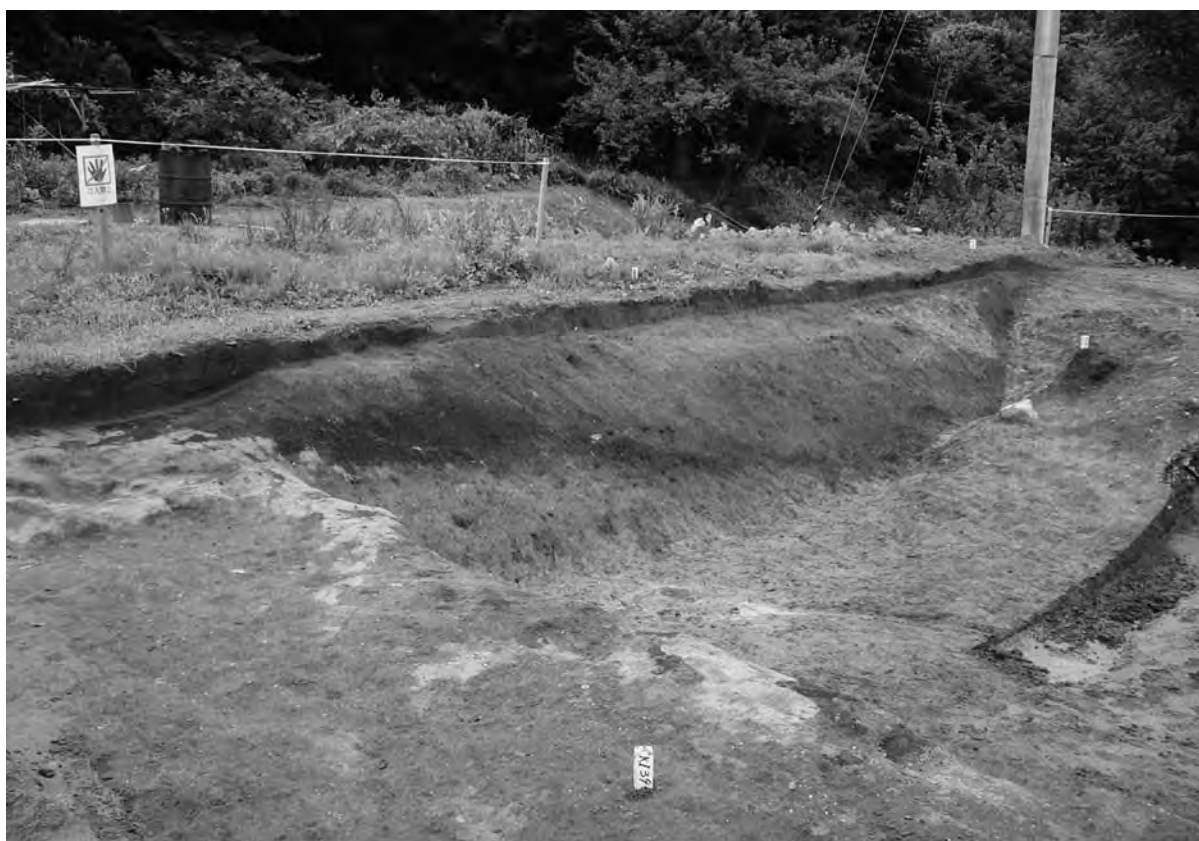
1 1979年調査区全景（真上）



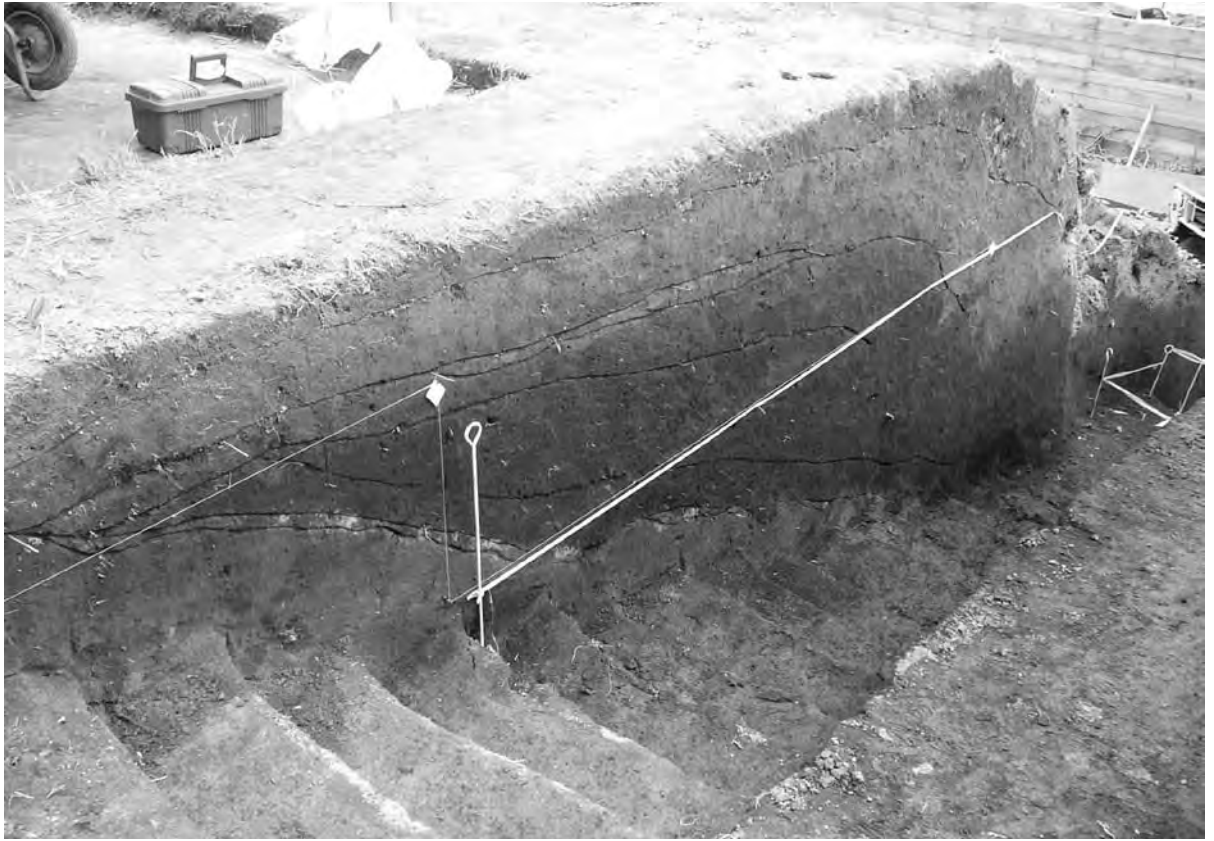
2 B区調査風景（B区東→）



1 A区基本土層① (A区東→)



1 A区基本土層② (A区西→)



1 B区基本土層 (B区西→)



2 C区基本土層 (C区北→)



1 S I 462 完掘①、SA465・466 完掘① (B区北西→)



2 S I 462 完掘②、SA465・466 完掘② (B区東→)



1 SB463・464 完掘 (B区北西→)



2 SB550・560 完掘、SA561 完掘 (C区北西→)



1 SK 4完掘 (A区東→)



2 KN42区土偶出土状况
(A区東→)



3 KJ40区縄文土器出土状况
(A区北西→)

1 KH38区縄文土器出土状況
(A区南西→)



2 SK112漆器出土状況
(B区南→)



3 SK451完掘 (B区南西→)



1 SK I 168 完掘①、
SN169 完掘
(B区南西→)



2 SK I 168 完掘②
(B区南东→)



3 SX447 完掘 (B区北→)





1 SB549 完掘、SA558 完掘
(C 区北西→)



2 SK I 226 断面 (C 区北西→)



3 SK261 断面 (C 区南→)

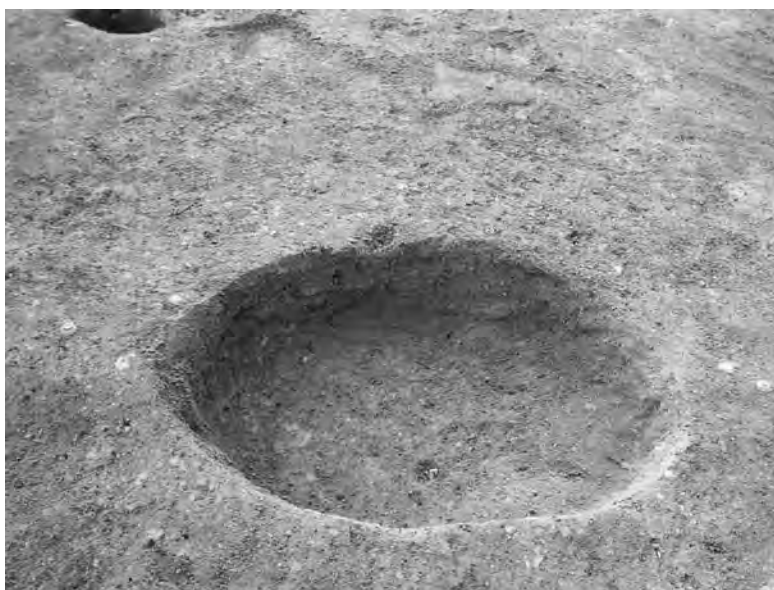
1 SK520 断面 (C区南東→)

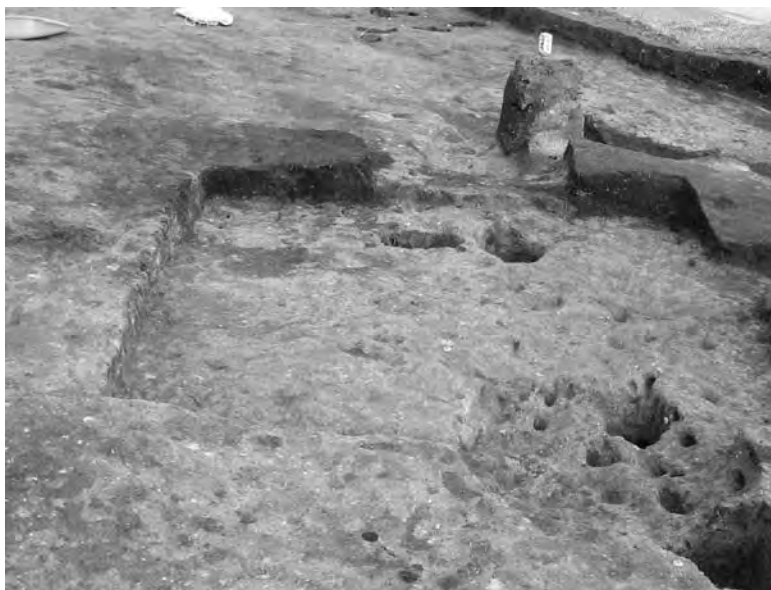


2 SK520 完掘 (C区東→)



3 SK I 226 確認 (C区北西→)





1 SK I 226 完掘 (C区北西→)



2 SK I 270 確認 (C区北西→)



3 SK I 270 完掘 (C区西→)

1 SKT509 完掘① (C区東→)



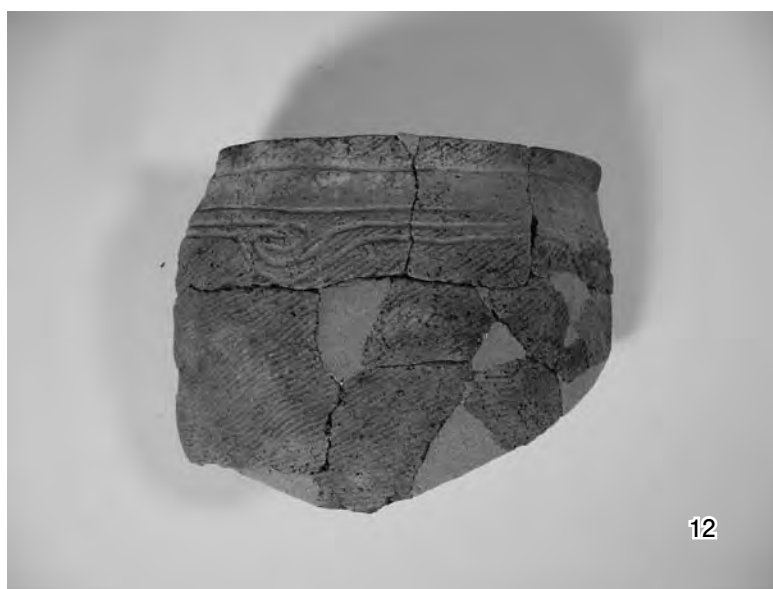
2 SKT509 完掘② (C区北→)

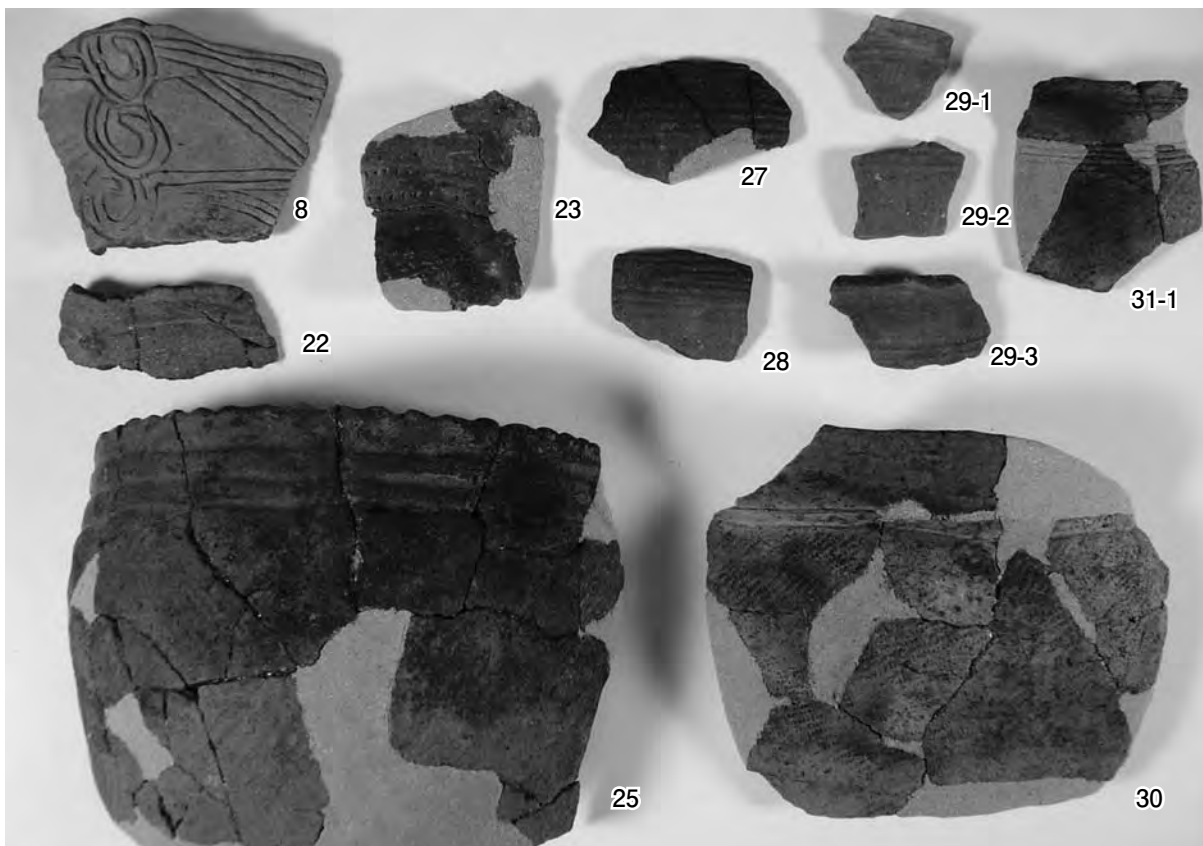


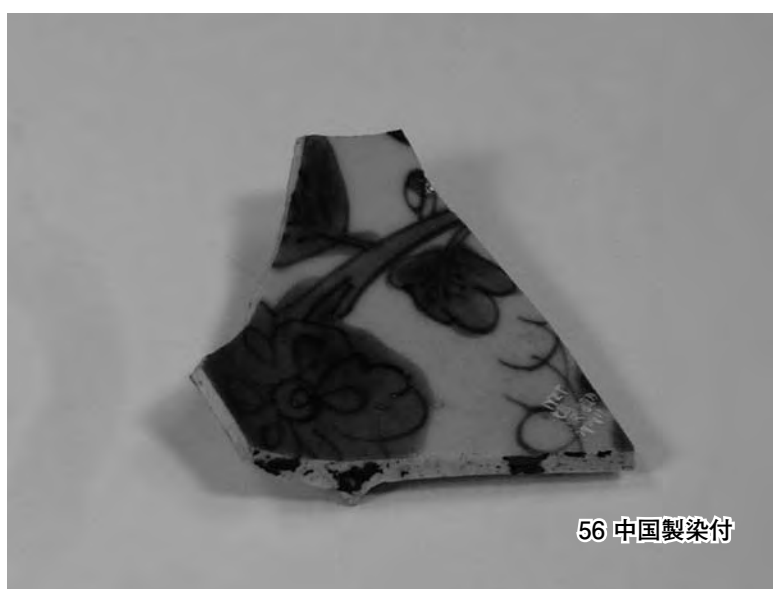
3 SN232 断面 (C区東→)

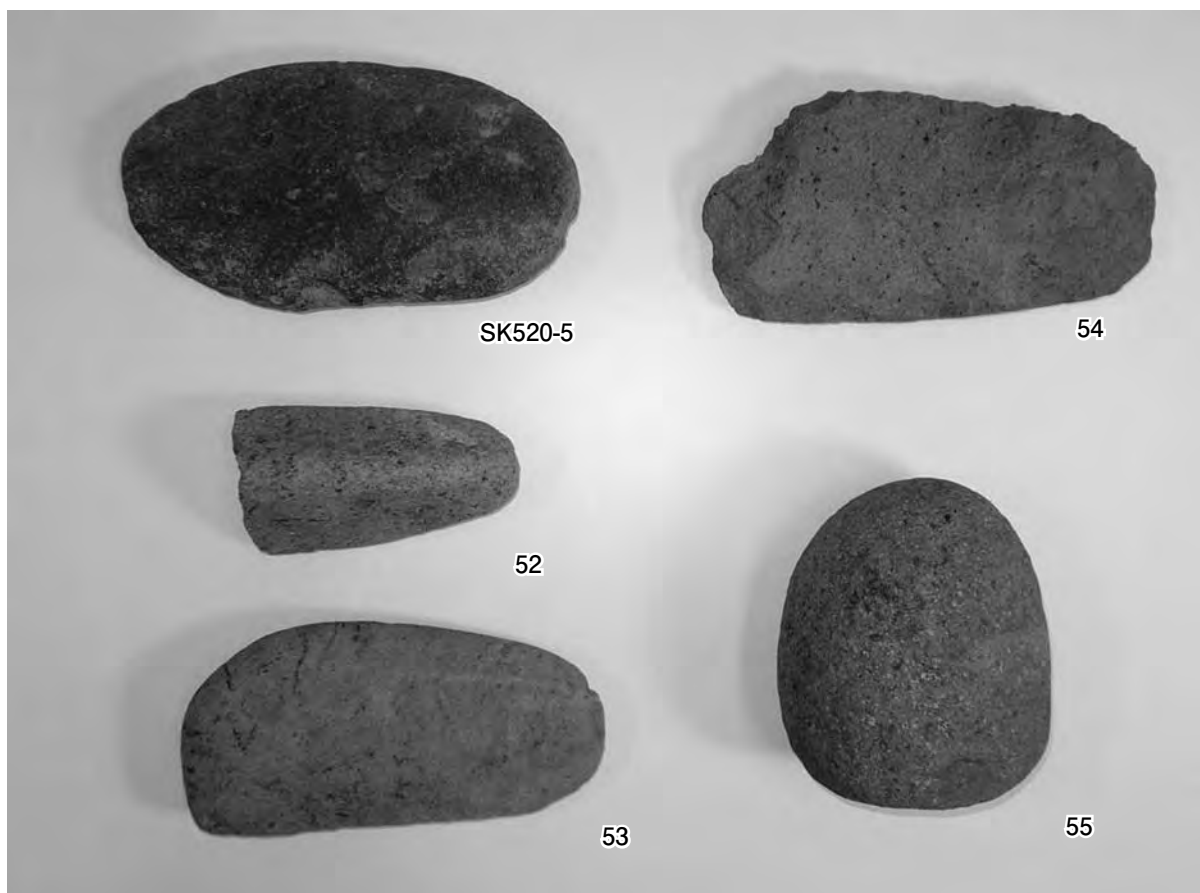


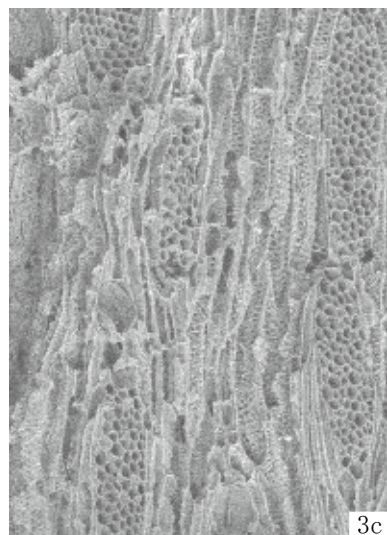
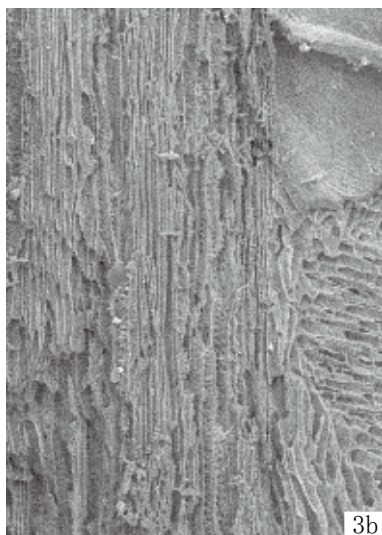
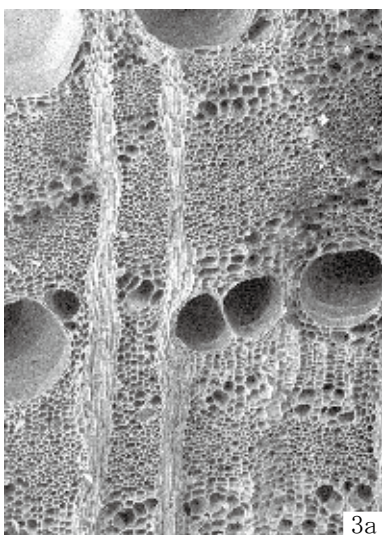
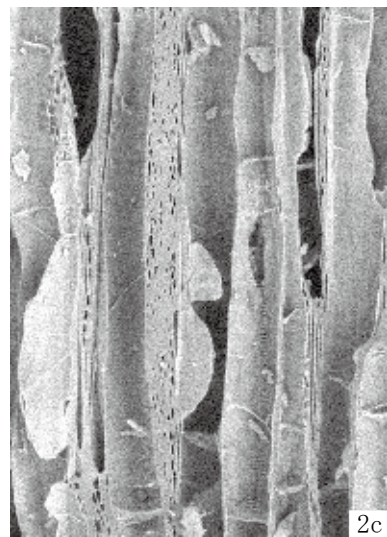
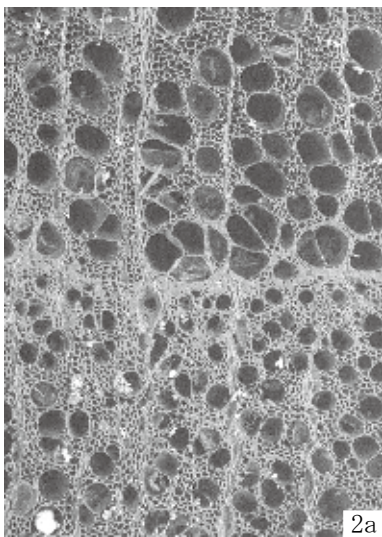
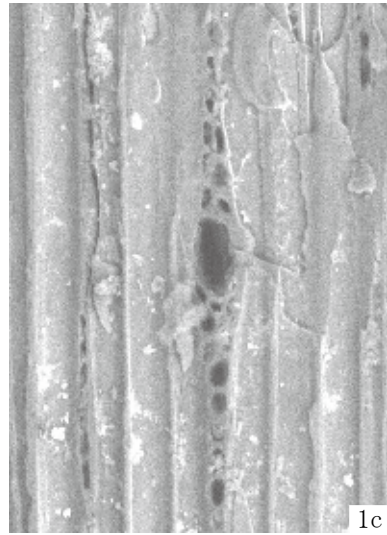
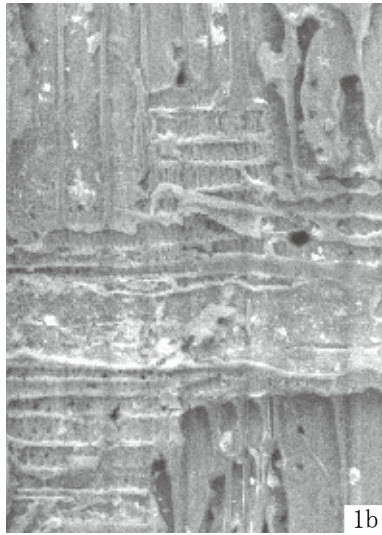
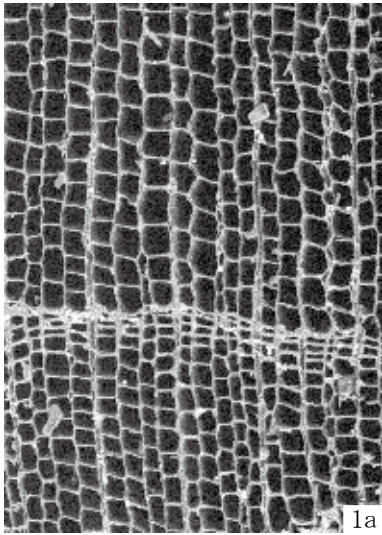






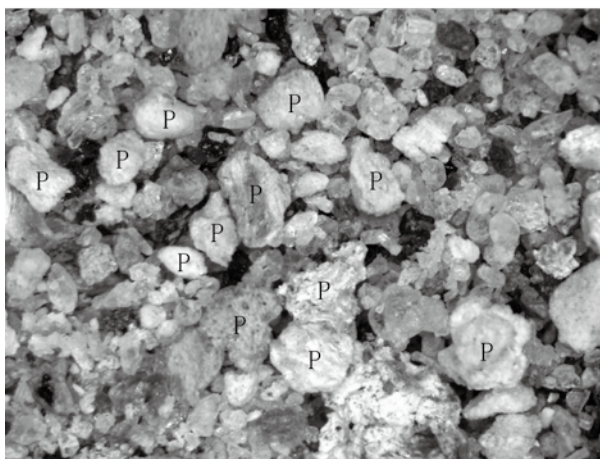




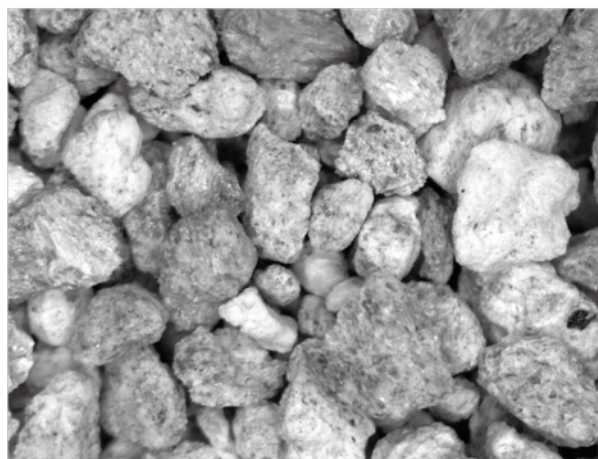


1. カラマツまたはトウヒ属 (試料番号3)
 2. ブナ属 (試料番号2)
 3. ケヤキ (試料番号1)
- a: 木口, b: 柾目, c: 板目

 200 μ m: 2-3a
 200 μ m: 1a, 2-3b, c
 100 μ m: 1b, c



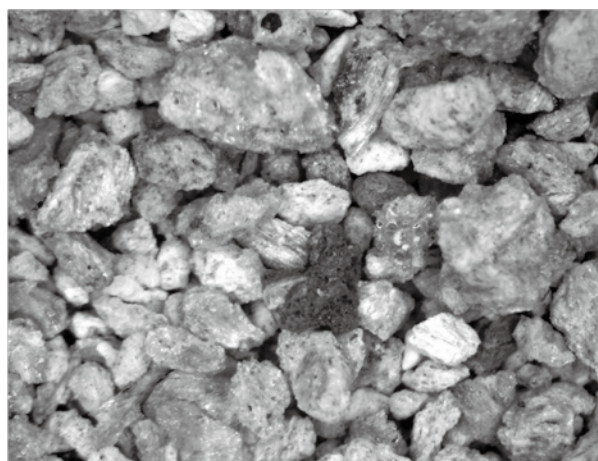
1. To-H・To-aの軽石 (A区基本土層spA-B: II b層;4)



2. To-H・To-aの軽石 (A区基本土層spA-B: Va層;5)



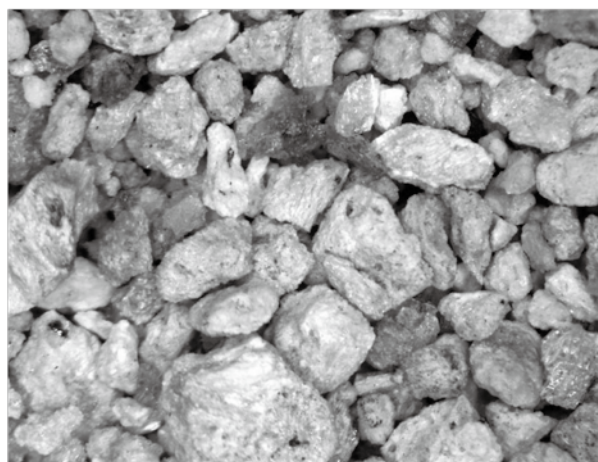
3. To-H・To-aの軽石 (A区基本土層spA-B: Vb層;6)



4. To-H・To-aの軽石 (A区基本土層spA-B: Vc層;7)



5. To-H・To-aの軽石 (A区基本土層spC-D: 埋没沢1-4層;8)



6. To-H・To-aの軽石 (B区基本土層spE-F: V層;9)

P: 軽石.

2. 0mm



報告書抄録

ふりがな	ゆぜたてあと							
書名	湯瀬館跡（第2次）							
副書名	国道282号交通安全施設等整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	秋田県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第462集							
編著者名	柴田陽一郎 五十嵐一治 山田祐子 巴亜子 深沢恵里子							
編集機関	秋田県埋蔵文化財センター							
所在地	〒014-0802 秋田県大仙市払田字牛嶋20番地 TEL 0187-69-3331							
発行機関	秋田県教育委員会							
所在地	〒010-8580 秋田県秋田市山王三丁目1番1号 TEL 018-860-5193							
発行年月日	西暦2010年8月							
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "	m ²		
ゆぜたてあと 湯瀬館跡	あきたけんか 秋田県鹿 づのしほちまん 角市八幡 たいあぎゆぜ 平字湯瀬 ふるたて 古館62 外	05209	9-394	40° 7' 28"	140° 50' 15"	20090615 ～ 20091030	7,300 m ²	国道282号交通安全施設等整備事業に係る埋蔵文化財事前発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
湯瀬館跡	集落 館跡	縄文時代 弥生時代 平安時代 中世	竪穴住居跡 1軒 陥し穴 1基 土坑 9基 柱穴様ピット 10基 帯曲輪 3か所 竪穴状建物跡 3軒 掘立柱建物跡 6棟 柱穴列 4列 焼土遺構 3基 溝状遺構 4条 性格不明遺構 1基 柱穴様ピット 251基	縄文土器 石器 弥生土器 土師器 陶磁器 鉄製品	主要な曲輪の南斜面の調査によって、3か所の曲輪が明らかになり、下段の曲輪から掘立柱建物跡や柱穴列、多くの柱穴様ピットが見つかった。			
要約	本遺跡は「鹿角四十二館」の一つとして知られる中世の館跡で、1979年に「館コ」部分の調査が行われている。主要な曲輪の南側斜面を調査した結果、帯曲輪の造成過程と中世の館の範囲を検討する資料が得られた。また、古代以降の攪乱を免れた部分に、縄文時代後期を中心とする遺構・遺物を発見した。							

秋田県文化財調査報告書第 462 集

湯瀬館跡(第2次)

－国道 282 号交通安全施設等整備事業に係る

埋蔵文化財発掘調査報告書－

印刷・発行 平成 22 年 8 月

編 集 秋田県埋蔵文化財センター

〒 014 - 0802 大仙市払田字牛嶋 20 番地

電 話 (0187) 69-3331

F A X (0187) 69-3330

発 行 秋田県教育委員会

〒 010 - 8580 秋田市山王 3 丁目 1 番 1 号

電 話 (018) 860-5193

印 刷 株式会社 松本印刷

